
ワンダラー放浪記

島隼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワンダラー放浪記

【Nコード】

N8242T

【作者名】

島隼

【あらすじ】

時には瘴獣を退治し、時には遺跡を調査し、時には市民を護衛し、迷子の子猫だつて探し出す。

みんなの「なんでも屋」、通称ワンダラー。

ワンダラーを生業とする個性豊かな四人のその日暮らしの生活とは
いかに！？

ご案内

この小説は自サイト「Four Tribes」(URLは下の方

を参照)に掲載されている同名小説の重複投稿作品です。

ご案内2

この小説は長編「インペリアル・ガード」のサイド(?)ストーリー的なお話になります(内容はまったく関係ありませんが...)。同一の世界の違う場所の話になっていますが、サイドということでは世界観の記述が甘いところがあります。不明な点は自サイトの「世界観」のページを見てももらえると読みやすくなると思います。

第一話 【1】

ここは都市同盟の一角を成す街クレスト。都市同盟の大半の地域と同様に南の海に面する港街で、漁業と海運業で栄える割と大きな街である。

この街の中央を通る大通りから一本それた道沿いに、小さな食堂がある。既に日は沈み、夜空に眩い星達が瞬き始めてから数刻程が経った頃、その道を挟んで向かい側にある一軒家と思われる建物の扉に、背を預けた悲壮感漂う四人の男女が正面を見つめていた。

「危機的状况だな……」

腰にバスタードソードを差し、短く整えられた茶色の髪に、身軽な軽装の上に皮製の簡素な胸当てを身に着けた三十前後の男が誰にともなく呟いた。

「……ああ、覚悟を決める必要があるかもしれん」

その言葉に、隣にいた赤毛の髪を適当に後ろに流し右の頬に十字の傷がある男が同意した。その男は背中に両手持ち専用の大剣を背負い、先ほどの男と似たような服装の他に皮で出来た赤い上着を羽織っている。

「なんのだ？」

大剣の男の隣にいた頭にバンダナを巻いたエルフ族と思われる女が冷たい目線で問いかける。

「餓死……」

剣士二人の声が哀しい響きを含みながら重なった。

「……どーすんのよ？」

「お前が言っとなっ！！」

「だって……」

腰に剣を差した男の隣にいる魔法士と思われる女というか少女が非難の声を上げたが、剣士二人に激しく突っ込まれる。

この四人は通称ワンダラーといわれる、いわゆる『なんでも屋』

を生業とする者達である。名前は腰に剣を差した男がカイト、背に大剣を背負っている男がジェイル、そしてエルフ族のエマと魔法士のミーファである。ミーファは年齢が十六歳程でワンダラーの中でもかなり若く、茶色い髪を肩口まで伸ばし所々を髪留めで止め、細かな刺繍がふんだんに縫いこまれたローブを腰に巻かれている紐は魔石が先端にはめ込まれた短い杖を差している。エマは『不老なるエルフ族』のため年齢は不明。腰にはレイピアを差し、背中に組み立て式の弓を皮袋に入れて背負っていて、頭に巻かれた緑色のバンドナの結び目から金色の長い髪が伸び、エルフ族特有の長く尖った耳はバンドナの中に隠されていた。服装も目立たないように人族の衣装を来ている。

その四人がここで何をしているのかというと、昨日で旅の資金が底をつき、ほぼ丸一日何も食べることができず、何となしに本能の赴くままに食堂の目の前まで来て我に返り、改めて現在の危機的状況を認識したところだった。

そもそも何故こんなことになったかというと、事の発端は三日前に遡る。

ワンダラー達は通常大きな街にあるギルドと言われる仕事斡旋所で仕事を請け負い、その仕事をこなすことによって報酬を得て日々の糧としている。ギルドで請け負える仕事にはさまざまなものがあり、代表的なものは瘴獣退治、遺跡調査、護衛、人探し等である。

四人はこの街で仕事を請け負いながら生活していたが、三日前に生活資金が寂しくなってきたので、ギルドから瘴獣退治の仕事を請け負った。

瘴獣退治はこの辺では割と多い仕事で、国家が存在せず兵隊や騎士団を持たない都市同盟では瘴獣退治をする組織が無いいため、瘴獣が発生すると近くの街のギルドに仕事として登録される。

瘴獣とは虫や動物等の死骸に瘴気が取りつき怪物化したものである。めつたに発生しないが、瘴獣は見境なく生き物を襲うため発生が確認されると即退治対象となっている。

そして四人が請け負ったのはバーストフライと呼ばれる虫の瘴獣退治であり、瘴獣としては珍しく空を飛ぶ。姿形は蜻蛉に似ているが、色は赤く大きさは大人と同じくらいあり、火を吐き尻尾のような胴体には無数の棘が生えている。攻撃力は大したことはないが、空を飛び倒し難いため報酬は高めだった。

カイトとジェイルは剣しか使えないが、エマは弓が使える、ミアファは魔法が使えるからなんとかなるだろうとこれを引き受けることになった。

その翌日、瘴獣がいるというこの街の近くを流れる川を搜索してみると割りと簡単に、というより奇妙な泣き声を発しながら空を跳ぶという目立つことこの上ないバーストフライを見つけた。

四人はすぐにエマの弓とミアファの魔法、そしてそれに対するカイトとジェイルの声援で攻撃を仕掛けた。動きが素早いため手こずりはしたが、大分弱らせたところでバーストフライが川の上に逃げたのだが、そこでミアファがやってはいけないミスをしてしまった。

カイトとジェイルの制止を振り切り火の魔法をバーストフライにぶつ放したのである。めでたくバーストフライは火に焼かれ消滅したが、瘴獣が消滅するとその後に残される輝石が川に落ちてしまったのである。

瘴獣は絶命すると元々死骸の肉体は消滅し、そこには輝石と呼ばれる黒い石が残される。取りついた瘴獣が結晶化したものと言われているが、くわしいことはまだわかっていない。そして、瘴獣退治が完了した証拠となるのがこの輝石なのである。

そう、輝石がなければギルドに戻っていくら説明しても報酬はもらえない。

街に戻るとカイトとジェイルは一応ギルドに行つて事情を説明し

てみたが、案の定認めてもらえなかった。肩を落とした二人がエマとミーファの待つ場所に戻ると……、ミーファが最後の路銀を風呂代に使うという暴挙に出ており、結局それ以降食事をするのもできず今に至るのである。

「なんで風呂なんか……」

ジェイルは立っていることも苦痛になったのか、その場にしゃがみ込みながらボソリと呟く。

「だって女の子だもん！！ 汗かいたらお風呂入るでしょ？」

「ワンダラーが汗嫌いって。そんなんでワンダラーが務まると思っ
てんのか？」

ジェイルは立ち上がりミーファに詰め寄ったが、ミーファはカイトの後ろに隠れて舌を出した。

「てめえ〜」

「まあ落ち着け、無くなってしまうものをいつまで悔やんでも仕方ない」

「さっすがカイト！！ やっぱ過去にこだわらず前向きに生きなきゃいけないよね！」

「けっ！」

「で、どうするんだ？」

黙ってそのやり取りを聞いていたエマが、さすがに呆れたのか冷たい声で遮りカイトを見た。

「そうだな。今日はもうギルドも閉まつたろうし、どこかで野宿して明日もう一度ギルドに行って仕事を探そう。うまいこと、前払いが元手がなくても請け負える仕事があるといいんだけど」

「ええ！！また野宿〜」

ミーファがあからさまな不満の声を発したが、三人はそれを無視し昨日と同じく街の中央にある公園に向かった。

第一話 【2】

翌朝、街に活気が出始めた頃、カイトとジェイルは二人でギルドへと続く大通りを歩いていった。

エマはエルフ故かあまり人が多いところには近づきたがらず、ミーファは雰囲気嫌いだとギルドには付いてこない。

二人はギルドへと向かう道すがら、その背に奇妙な哀愁を漂わせながら、空腹のせいかわば無言で歩いていた。

「もう、腹の虫が限界だ……。こんな仕事をしているからいつ死んでもおかしくないが、餓死はやだな。なんとか先払いの仕事を探そうぜ……」

ジェイルが擦れた声で呟く。

「同感だな。しかし、前払いの仕事なんてあるかな？」

「あきらめるな。前向きに考えるんだ!!」

昨日ミーファに言われたことを気にしていたのか、ジェイルはさつきまでの口調と違い力強く言い放った。

「ま、まあ、なんとか探してみよう」

それから二人はまたギルドまで無言で進んでいった。

クレストの街にあるギルドは割と大きく、儲かっているのか建物も石造りの二階建てである。ギルドは依頼者とワンダラーの仲介料で成り立っていた。

中に入ると手前には小さな円卓が数個あり、既に他のワンダラー達が仕事の資料を読んだり、何かの相談をしている。二人は奥にあるカウンターに向かうとギルドの店主がきつい眼つきで睨んできた。店主もワンダラー上がりなのか、かなり体つきが良く髪の毛を剃りあげている。

「何度来ても、駄目なものは駄目だ。規則は守ってもらう」

昨日輝石が無いのに報酬をくれるようしつこく頼み込んだせいか、すっかり嫌われてしまっているようだ。

「いや、違うんだ。昨日はすまない。今日は新しい仕事を紹介してもらおうと思つて」

「すぐに仕事に入れて、報酬が高めで、前払いで、依頼人が女の仕事はねえか？」

「ねえよ。冷やかしならとつとと帰れ!!」
「チツ」

ジェイルは本気だったのかもしれないが、店主には冷やかしと受け取られさらに機嫌を損ねてしまう。既に磨かれたような頭には血管が浮き出ていた。

「ジェイル、余計な条件を追加するな……」

カイトはジェイルを後ろに下げると、自分が交渉に乗り出す。

「待つてくれ、そんな好条件じゃなくていいんだ。とにかくすぐに仕事に取りかかれて、出来れば前払いがいいんだが、少なくとも元手の必要ない仕事はないか？ 先立つものが無いんだ……」

カイトの切ない訴えに、店主は同情したのかカウンターの下から仕事内容が書かれた紙を取り出した。

「……急ぎの瘡獣退治の仕事なら一つある。装備が揃ってるなら元手はいらんだろう。報酬は……まあ、ちょっと特殊な契約だがうまくいけば高額だ」

カイトは出された紙にざっと目を通し、不明点を質問する。

「瘡獣の種類と数は？」

「不明」

通常、瘡獣退治は瘡獣が確認されてから依頼されるため、種類と大体の数は判明している。

「……他は無いのか？」

「数日後でいいなら隣町までの護衛と、……他には遺跡調査があるが、これは場所が遠いから元手が必要だ」

「数日も待てないし、元手も無いんだ……」

既に二日近く何も食べていない。これ以上日にちがたてばもう仕事をすること自体が困難になるだろう。

「仕方ないな。特殊な契約というの？」

「瘡獣退治なんだが、公的機関からの依頼じゃなくてな。個人契約だ」

「個人契約？ 奇特な野郎がいるもんだな」

ジェイルの感想も無理はない。通常、瘡獣が発生したら近くの街や村の代表者が税金で依頼するものだ。税金で依頼できるのに個人の金でワンダラーを雇って退治しようという者はそうはいない。

「場所が街から少し離れている上にあまり人が行かない場所らしい。それで断られたって話だ。くわしいことは依頼人に直接聞いてくれ」

二人は依頼人の居場所が書かれた紙をもらうとギルドを後にした。「街から離れてるって言うってたな…。そこまで辿り着けんのか？」

「それでも数日待つよりは、体力がまだ多少ある今仕事したほうがいいだろ」

ジェイルの切ない質問にカイトは哀しい答えを返した。

「一度あいつらの所にもどるか？」

「いや、直接依頼人のところに行こう。どのみちエマは来ないだろうし、ミーファが来るとややこしくなる…」

「…だな」

会うことになっている場所は依頼人の家だったが、ギルドから割と近く大通り沿いにあった。

「でけえ屋敷だな」

「ああ、貴族か豪商のようだな。貴族だといいたが」

店主に教えてもらった場所に着き、目の前の門から中を覗くと豪華な屋敷が見える。

カイトが貴族がいいと言ったのは、貴族は見栄をはって無駄に報酬が高いことがあるが、商人の場合はかなりケチなことが多いからだ。カイトは門の近くにいた使用人と思しき者にギルドから来たことを伝えると、中の広間に招かれた。

中は白く磨かれた壁と床に赤いじゅうたん敷かれ、その上にある

立派な長いすに二人は座り依頼人を待った。しばらく待っていると、奥の扉から目が痛くなるような濃い赤と青の民族衣装を纏い、首からいくつもの首飾りを下げ、何故か頭には緑のターバンを巻いた五十歳くらいの男がわざとらしい笑みを浮かべながら近寄ってきた。

「なんつー格好だ。悪趣味な…」

「おいおい。聞こえるぞ」

カイトはジェイルを止めると、立ち上がりあいさつと自分の名前を伝え、立ち上がらないジェイルを紹介した

「お主達か？ 儂はコイル・ナルド。この街で交易商を営んでおる」その瞬間、カイトとジェイルの願いは脆くも崩れ去りジェイルは天を仰いだ。コイルは握手を求めて来たので、カイトはなるべく表情に出さないように手を握り、互いに椅子に座った。コイルは椅子に深く座ると大げさな身振りでテーブルの上にあつた葉巻を吸い始めたが、二人には勧めてこない。その態度からこの男がケチであることにカイトは確信を持ったようだ。

「ギルドから依頼を受けてきたと思ってよいのか？ おぬし達だけか？」

ジェイルの態度が気に入らないのか、コイルは視線をカイトにか合わせて来ない。

「いえ、仲間はあと二人いますが、とりあえず依頼内容を聞くのは俺達だけで」

「そうか。では時間もあまりないので、早速本題に入ろう」

コイルは二人の前にこの街周辺の地図を広げ、湖らしき場所を軽く指で叩いた。

「この街から徒歩で半日程のところシリリ湖という小さいが美しい湖がある。その畔に儂の古い別荘があるのだが、もう何年も使っていない上に木造で見栄えがしないから立て直そうと思っておるのじゃ」

葉巻の煙をジェイルに吹きかけながら自慢げに別荘の話をしはじめる。ジェイルはその煙に切れかけているように見えたが、一応は依頼人ということと、空腹でなるべく動きたくないのとで何とか耐

えているようだ。

「それで？」

カイトはジェイルが暴れ出さないことを祈りつつ話を先に進める。「ふむ。数日前に解体業者に別荘の解体を依頼したんじゃが、中から物音がすると逃げ帰って来ての。中の安全が確認できるまでは引き受けないと言っただけおつた」

コイルは不機嫌そうに葉巻の煙を吹いた。

「では、俺達に別荘内部の調査と瘴獣がいた場合はその退治が依頼ということですね」

「いや、瘴獣退治だけが依頼じゃ」

カイトは依頼内容の確認をしたが、コイルは一部訂正する。

「？ いや、今の話では何かの音を聞いただけで瘴獣の姿は誰も見ていないのでしょうか？ ということは中に動物が入り込んだだけの可能性もあるのでは？ であればまず内部の調査が必要かと」

「そうじゃの。じゃが、依頼は瘴獣退治じゃ」

カイトは嫌な予感を感じたのか眉間に皺を寄せている。ジェイルもコイルに疑惑の目を向けた。

「ちなみに報酬はどのように？」

「瘴獣一匹につき、銀貨五枚。他には、まあ、馬車の往復運賃くらい前金で出してやる」

「いなかった場合は？」

「無しじゃ」

カイトは途中で予想していたようだが、改めて聞いて大きく肩を落とす。

「普通、こういう場合は調査料というものが報酬に入るのでは？」

そうしないと瘴獣がいなかった場合俺達はただ働きに」

「いやなら他を探す」

カイト達には他を探す余裕も体力も無い。ジェイルを見ると既に諦め顔で頷いた。

「……わかりました。それで契約しましょう」

カイトはまったく気のりがしていないようだったが、背に腹は変えられず仕方なく契約書にサインをし、馬車代を手にすると、エマとミーファが待つ公園に戻った。

第一話 【3】

公園に戻ると二人はベンチに座っており、エマは公園内で綿アメを売っている屋台を不思議そうに眺め、ミーファはそのエマに背もたれにしながらいつも通り魔法書を怪しげな笑みを浮かべながら読んでいた。

「エマ、残念ながら買う金はないぞ」

ジェイルの声に二人は振り向く。

「人はどうして綿を食べるのだ？」

ジェイルはエマをからかったようだがエマは食べたかったわけではなく、そもそもそれが何であるかがわからないようだ。

「綿じゃねーよ。あれは、まあなんだ砂糖みたいなもんだ。砂糖をああして綿みたいにして食べるのさ」

「砂糖？ なら砂糖を舐めればいいだろうに」

「いや、まあそうだけどよ。ああしたほうがうまそうだろ。気持ちの問題だ」

エマは理解できないという顔をしている。食べ物を必要以上に加工しないエルフ族には奇妙に思えるのだろう。

「仕事が終わったら買ってみるといいさ」

「仕事あったの？」

カイトの言葉にジェイルとエマの会話を笑いながら聞いていたミーファが反応する。ミーファはワンダラーの仕事は気にいらしていないらしい。理由は金ではなく、大きな魔法が使えるからのようだ。

「一応な」

「どんな？」

ミーファは目を輝かせていたが、その目にカイトは言いにくそうに口を開く。

「ちよつと嫌な感じの瘡獣退治だ」

「ちよつと嫌な感じ？」

「とりあえず場所を変えよう。仕事の場所までは馬車移動だから詳細はその中で説明する」

「馬車代あるの？」

「太っ腹な依頼人がくれたよ」

カイトは嫌味を込めて言ったが、交渉を知らないミーファは首を傾げた。

「ジェイル、エマ、行くぞ」

カイトは未だジェイルを質問攻めに行っているエマと、本人はまじめかもしれないが適当な説明をしているジェイルを呼んで馬車乗り場へと向かった。

「ええっ！！ じゃあ、どんな種類で何匹いるかもわからない瘡獣退治を引き受けたの？」

乗り心地が決しているとは言えな八人乗りの乗合馬車の中で説明を聞き終わったミーファが非難交じりに声を上げた。四人の他に二人の一般客がいたが、驚いてこちらを目を向ける。

「何匹いるかどころじゃねえ。いるかどうかもわからねーよ。しかもいなけりゃただ働きだ」

ジェイルは依頼人の顔を思い出したのか少し不機嫌になっている。「なんでそんな仕事受けたの？」

「それしか無かったんだ。しかし、瘡獣一匹で銀貨五枚は悪くない額だ。二匹もいればしばらくは食っていける」

「いなかったら？」

「公園の雑草でも食べるさ」

カイトの本気が冗談かわからない答えにミーファは死ぬほどいやそうな顔をしている。

「湖が見えてきたぞ」

カイト達の話聞いていたのかどうかかわからないが、ずっと外を見ていたエマが外を指差す。

「この辺りのようだな」

カイト達は馬車に止まってもらうと運賃を払い馬車を降り、街道から少し歩くと森の隙間から見えていただけだった湖が姿を現した。「きれい〜」

ミーファが感嘆の声を上げる。確かに湖面は鮮やかな青に日の光を反射し輝いている。

「なるほど、別荘地には持って来いだな」

「お前ら観光に来たんじゃねーんだ。行くぞ」

ジェイルは湖には特に興味も沸かないらしく、湖畔に見える別荘らしき建物にとつと行ってしまった。

「風情がないな。だが、観光じゃないのは確かだ。俺達も行こう」カイトはエマとミーファと共にジェイルの後を追った。

「ここか」

「結構でかいな。他人にはケチだが、自分には豪勢に使いやがる」

「まあ、商人はそういうものだろう」

別荘は聞いていた通り木造の平屋造りではあるが全面が白で塗られており、部屋数は十数部屋ほどはありそうな大きさと、湖を一望できるようにするためか家の周りに塀は無い。

「でも、ぼろくない？」

ミーファの言うとおり、庭と思われる場所は雑草が伸び放題、建物のガラスも割れ蜘蛛の巣も大量に張っており、確かに何かがいそいそ気配を漂わせている。

「まあ、数年使っていないらしいからな。――おらよっ！」

――バキッ――

ジェイルは入り口の扉を蹴り飛ばすと、扉は中央で折れ、ほこりを巻き上げながら中に向けて倒れた。

「ちよつと、壊していいの？」

「構わんだろ？ どの道建て直すつもりだって言ってたしな」

「あ、そう」

「人というのは乱暴なのだな」

「いや、エマ。ジェイルの行いを人族として一般化しないでくれ……」

エマの感想をカイトが慌てて訂正すると、ジェイルを先頭に四人は内部へと入った。中は広めの玄関らしき場所が広がっているが、内部は窓に板が打ち付けてあるためかかなり暗い。正面には奥へと続く廊下があり、その先は玄関からの光も届かず暗闇と化している。「光よ」

ミーファが光球を生み出しそれを自分の杖の魔石に吸収させ、杖をたいまつ代わりにするとジェイルに渡した。ジェイルはそれを受け取り、四人は正面の廊下をその両脇にある部屋を確認しながら奥へと進んでいく。

かなり長い廊下を奥に進むと突き当たりは右に直角に曲がっていた。先頭行くジェイルが角で曲がったところで急に足を止めたため、後ろを歩いていたミーファがジェイルにぶつかりそうになる。

「ちよつと！急に止ままないでよ！……」

「いるな」

ミーファの非難の声を無視し、ジェイルは正面を睨んでいる。

「ああ、そのようだな」

「何が？」

ジェイルとカイトの言っていることがミーファにはわからない。

「瘴獣だよ」

「なんでわかるの？」

「瘴気くせえ」

「人は瘴気のおいが嗅げるのか？」

ジェイルの比喩的な表現を間に受けたエマが驚きの表情を浮かべた。

「エマ……。頼むジェイルの言うことを真に受けるな。瘴気の気配を感じるだけだ」

「人族の言い回しは難しいな……」

「瘴気の気配なんてよくわかるね？ どこ？」

「細かい場所まではわからん。ひよっとしたら複数かもな」

ジェイルは笑顔で答えると、そのまま飯の種を探しにさらに進む。
「待て。何か引きずるような音が聞こえる」

また少し進んだところで、今度はミーフアの後ろ歩いていたエマが奥の方を指差した。

「聞こえる？」

カイトは耳を澄ましたが、何も聞こえない。

「エルフ族の長い耳はかざりじゃねーんだな」

同じく何も聞こえなかったジェイルが関心すると、エマはジェイルから杖を取り上げ自らが先頭に立って進んでいった。

……ズル ……ズル ……

一番奥の部屋まで来るとエマ以外の三人にも何かかなり重い物を引きずるような音が聞こえてきた。

「この部屋か」

ジェイルはエマの前に出ながら背中の中の大剣を抜くと、今度は慎重に扉を開けた。中はやはり暗闇だったが強い瘴気の気配が漂っていた。

そして、四人全員が中に入った瞬間、カイトは灯りを持っていたエマに何か接近する気配を感じる。

「エマ……」

……ドガツ！！ ……ズル ……ズル ……

後ろにいたカイトが咄嗟にエマの腕を引き抱き寄せると、エマが立っていた場所を蹴だらけ太丸太のようなものがすごい早さで通過し、その後ろの壁を激しく壊すとまた戻っていった。

「カイト、すまない」

「いや、それよりなんだ今のは？ ミーファ！」

「あいよ。光よ!!!」

ミーファが部屋の天井付近に大きめな光球を生み出すと、室内全体を明るく照らした。そして先ほどの丸太のような物の正体が姿を現す。

「いやー!!!」

その姿を見てミーファが悲鳴を上げ、カイトの後ろに隠れる。

「……………ミ、ミミズ…か？」

カイトも想像してなかった瘴獣に困惑の表情を浮かべた。

「長年ワンダラーをやってるが、ミミズの瘴獣なんて初めてだぞ。

これはついに俺も名付け親になれるか」

ジェイルは何故かうれしそうにそのミミズの瘴獣を見ている。ミミズの瘴獣といっても、見た目は確かにミミズそのものだが、長さは大人の身長のお三倍程、太さも大人の胴体の二分はありそうな巨大さであり、その体には何か体液のようなものを纏っているようだった。ちなみ初めて発生が確認された種類の瘴獣は、発見したものが名前を付けられる。

そのミミズが体の前半分を持ち上げこちらを見降ろすような格好を取り、伸縮自在と思われるその皺だらけの体は異様な脈を打っている。

「しかし、ミミズに見降ろされるのも奇妙なもんだな」

ちょうど正面にいるジェイルが巨大ミミズに大剣を向ける。

「ジェイル、気をつけるよ。どんな攻撃をして来るのかわからない」

「なに、俺様の長年のカンによるとこいつは打撃主体だな」

……………ブチャアツ!!!……………

ジェイルが自信満々に言った瞬間、ミミズは一瞬体をのけ反ると口と思われる場所から何か濃い茶色の物体を勢いよく大量に吐き出

しジェルに浴びせかけた。ジェルはまともになんかそれにくらぶと、
後ろの壁まで飛ばされその物体の中でもがいている。

「ジェル〜!!!」

ミーファが声を上げる。

「ぶはっ！ 大丈夫だ。毒性はなさそうだ。しっかしなんだこりゃ、
泥か？ しかも、くせえ!!!」

「えんがちょ」

「うるせえ!!!」

ミーファの間の抜けたセリフに、ジェルは叫ぶと立ち上がった。

「デカミミズめ。こいつも泥を食ってやがんのか」

「つまり今のはゲロを吐いたということか」

「きつたなっ!!!」

「ジェル、すまないが当分近寄らないでほしい」

カイトの正確な分析に、ミーファとエマが的確な感想を伝えると
ジェルがぶち切れた。

「おまえらあ!!!」

「落ちてけジェル！まずはあいつを倒すぞ！」

「あとで覚えとけよ」

カイトの言葉にもものすごく納得のいかない顔をしながらジェル
は立ち上がり、巨大ミミズに対して構えた。巨大ミミズは再度体を
のけ反らせると、ジェルに再度泥を吐く。

「不意打ちでなきゃくらうかよ!!! ぶった切ってやる!!!」

ジェルは余裕を持って横にかわすと床を蹴って一気に間合いを
詰め、飛びあがると上段に構えた大剣を巨大ミミズの頭らしき部分
目掛けて振り下ろした。

.....ニユルン.....

「なんだとっ!!!」

ジェルの剣は巨大ミミズのやわらかい体とヌメっとした体液の

せいで、まったく傷を与えることもなく滑りぬけてしまった。

「ジェイル！ 代われ、俺がやる！」

今度はカイトが瘡獣に対して間合いをつめ、腰の剣を抜くと瘡獣の胴体を横に一閃する。

・・・ニユロン・・・

が、同じく滑りぬけてしまった。

「こいつ……」

「見かけに寄らず、手強えーな」

カイトとジェイルはとりあえずエマとミーナがいる位置戻るが、剣が効かない相手に顔をしかめている。カイトが次の手立てを考えていると、背後にいたミーファの方から魔力の集中を感じた。

「よせ！！」

「なんで？」

咄嗟に掛けられた声にミーファは火の魔力の集中を解いた。

「ここは木造の館だぞ。俺たちまで焼け死んじまう」

「むむう」

「あの体液を魔法で乾かせねーのか？」

「無理無理。水ならともかく、あんなねっとりしたの風で乾かすのは何時間掛かるか……」

ミーファは手の平を振りながら答えたが、その表情に魔法が使えないことに欲求不満そうだ。

「カイト、どうするよ？」

・・・ビシッ！！・・・ ブシユッ・・・

ジェイルがそういつた瞬間、いつの間に組み立てたのか、エマが背負っていた弓を手に持ち矢を引き絞ると瘡獣目掛けて放った。そして、剣とは違い力が一点に集中した矢は見事に瘡獣の胴体に突き

刺さる。矢が刺さった部分からは泥と思われる液体が噴出した。

「よし!!……………つて、おい」

矢が刺さった巨大ミミズは何事もなかったかのように先ほど同じ体勢でこちらを見降ろしている。

「そういえば、ミミズの体の中はほとんど泥だったな……………」

「ええい！ これだから単純構造の奴はきらいだぜ!!」

ジェイルが叫ぶと、それに怒ったのかどうかはわからないが、巨大ミミズはまたもや体を反らせると今度は泥ではなく、そのままジェイルに体当たりしてきた。

「ぬお!! 危ねえ！ くそ、これならどうだ!!」

ジェイルはなんとかそれをかわし、剣を引き寄せる体重を掛けて一気に突いた。今度は見事に巨大ミミズの体に食い込み泥が噴き出す。剣を引き抜くと貫いた場所を体液が覆い泥の噴出が止まった。「くそつ!! 便利な体をしおつてからに!! しばませることもできねえのか!!」

……………ズル……………ズル……………

ジェイルが叫ぶと、巨大ミミズの背後にあるさらに奥へと続く扉から何かの音が聞こえてくる。

「……………おい、おい」

カイトは空腹に寄るものかもしれないが、背中に嫌な汗が流れるのを感じる。

「ここはこいつらの巣か？」

「……………ジェイル、出直さないか？ とりあえず、瘡獣の種類はわかっただけだから対策を練って仕切り直そう」

「賛成だな。空きつ腹でこいつらの相手はきついぜ」

満腹だと相手が出るのかはわからないが、ジェイルはカイトの提案に同意する。

「エマ、ミーファ！ 一旦引くぞ!!」

カイトの言葉にエマとミーファは頷き四人は部屋を飛び出した。追って来ることは無かったが、四人に向かって激しく泥を吐いている。先ほど、歩いて来た長い廊下を駆け戻ると、途中ミーファが声を上げる。

「ねえ、この建物って取り壊すんでしょ？」

「ああ、そう言ってたが」

「だよ。よし、外に出たらあたしにまかせて！ いい考えがある！！」

ミーファは自信たっぷりにそう言うと、一番最初に館から駆け抜けた。それに続いて三人が館を出るとミーファが叫ぶ。

「みんな！！ 館から離れて！！」

「へ？ なんでだ？」

ジェイルはそういいながらも言われたとおりに館から距離を置いた。それを確認したミーファは両手に全力の魔力を集中する。

「おい！！ やめろ！！」

「よせ！！」

「……それ、やめた方がよくないか？」

「火よ！！」

それに気付いたジェイルとカイトの静止とエマの疑問を無視し、ミーファは巨大な火球を館に向けてぶつ放す。ちなみにミーファは魔法兵や魔法騎士に匹敵するほど強い魔力を持っていた。ミーファから放たれた火球は見事に館に命中し、もとが木造であることも手伝い見事に館は大炎上した。ミーファはその炎を見ながら腰に手を当て仁王立ちしている。そして、その後ろでは涙を浮かべながらジェイルが両膝を付き、カイトはあまりのことに呆然と館を眺め、エマは呆れていた。

ミーファは後ろを振り返り得意げにピースサインを出す。三人の様子に不思議そうな表情を浮かべた。

「どったの？ あれならあのミニミズたちも逃げられず倒せたと思うけど」

称賛の声を期待していたのか、ミーファは不満そうだ。カイトとジェイルはミーファを見ておらず、ただ呆然と炎を眺めている。あまりのシヨックに言葉が出ない二人の言葉をエマが代弁する。

「輝石はどうするのだ？」

「……………あ！？」

ミーファは輝石のことはすっかり忘れていたようだ。

「いや、でも前と違って一応あそこにあるわけだし」

ミーファは慌ててなんとか言いつくろうと、燃え盛る館を指差した。そして、今度はカイトが声を絞り出す。

「……………輝石の色は？」

「え？ 黒でしょ？」

「炭の色は？」

「……………黒」

ミーファはやつとカイト達の態度に気付いたようだ。普段は周りの空気を読まないミーファもさすがに気まずそうだ。

「み、水の魔法で消して、みる？」

「やめろって。水なんか使ったら輝石まで流れてしまう」

「むぐ……………」

「なんとか、水を使わずに消せないのか？」

「陣魔法なら出来ないことはないけど、近寄れないから魔法陣が書けない……………」

「……………腹、減ったな……………」

ミーファのどうにもならないという返事を聞いた瞬間にカイトは空腹を思いだしたようだ。

「……………ご、ごめんなさい」

さすがのミーファも二度目のことに反省したような表情を浮かべた。ジェイル既に両手を付いて大粒の涙を流している。

「待つしか、無いか……………鎮火したら、探そう……………。これ以上仕事をする体力は無い」

「はい。がんばります……………」

「ジェイル、終わったことは忘れよう……前向きに生きるべきだ」
シヨックのあまり泣き続けているジェイルにカイトは膝を突きやさしく肩を叩いたが、ジェイルの体は巨大ミミズの泥と体液で異臭を放っており、後悔した。

「ミーファのバカヤロー!!」

ジェイルの哀しく恨みがましい叫びがリリ湖半にこだました。

その後、四人は別荘の自然鎮火を待つためにリリ湖の畔に座り、無駄に哀愁を漂わせながら美しい夕焼けを腹の虫と共に眺めた。

「夕日とは、どこで見てもその美しさは変わらないのだな」

エマは夕日の美しさに感動しているようだったが、残りの三人にはそんなことはどうでもよかった。

- - おしまい - -

第二話 【1】

「なんか儲かりそうなのはあるか？」

ジェイルは自分も座っている卓の正面で、同じく仕事内容がまとめられた資料に目を通していているカイトに聞いた。

ここは、都市同盟の一角を占める街クレスト、その大通り沿いにあるギルドである。そして、いつも通りジェイルとカイトが仕事を探しに訪れていた。二人はギルドのカウンターの上にある、通称「飯の種」と言われるギルドに依頼されている仕事がまとめられた資料を手に取り、ギルド内にある小さな円卓で割のいい仕事を探していた。

「瘴獣退治は無いな。やり易い仕事なんだが。とりあえず、すぐに取りかかれそうなのは、商人の隣町までの護衛つてのがあるが、移動となると支度金が高くつく。儲けは少ないだろうな。そっちは？」

「似たようなもんだが、割の良さそうな仕事の一つあった。俺の趣味じゃねえが、人物調査だ。依頼主はこの街の魔法士協会。報酬は書いてないがお役所系だから結構高いんじゃないか？」

ジェイルは資料の一枚をカイトに見せる。

「人物調査？ 俺も趣味じゃないな」

「だが、仕事を選べるほど裕福じゃねーしな。四人分の食いぶちを稼がにゃならん」

「・・・まあな」

ワンダラーのパーティで常時四人というのはかなり多い方である。通常は二人程で、仕事によっては他のワンダラーと組んで四、五人で、というのが一般的である。当然、人数が多ければその分生活費も掛かるため相当稼がなければならぬが、大きな仕事はそうそうあるわけもなく、そうなる回数と数をこなさなければならぬ。

「しょーがねー、これにしよう」

ジェイルはそう言いながら立ち上がると、人物調査の資料を片手

にギルドのカウンターに向かった。そして、店主に仕事受ける旨を伝え契約を交わすと依頼人の連絡先を聞きギルドを後にする。

「待ち合わせ場所は？」

「魔法士協会の中だ。行ったことねーな」

「今回はミーファとエマも連れて行こう。魔法士協会ならミーファが居たほうが信用度も高い」

「ああ、ミーファ自体に信用度があるかは知らんが……」

ジェイルは腕を頭の後ろに組みながらカイトを見た。

「あいつも、魔法士協会ではおとなしくしてるだろ……多分」

そう言いながらもカイトは心配そうだ。魔法士協会というのは、その名の通り魔法士達が作った協会であり、魔法士の登録から魔法の研究、教育を行っている機関である。登録されている魔法士に対しては、魔法士に犯罪の疑惑が掛けられた際の弁護も引き受けるため、魔法士からの信用度は高い。魔法が使える者は何か犯罪、特に放火などがあつた際は真つ先に疑われてしまうため、犯罪者として名が上がってしまうことが多い。

ジェイルとカイトは話しながら現在の拠点としてある安宿に戻ると、エマとミーファが使っている部屋へと入った。

「あれ、ミーファは？」

カイトは部屋の中の窓際にあるテーブルの席に座り、外の通りを眺めていたエマに尋ねた。エマは室内のためかいつもの緑のバンダナは巻いておらず、長い耳が露出していていつも以上にエルフラしい。

「風呂だ」

エマが部屋の内部にある浴室に目を向けながら答える。

「あいつは一体、一日何回風呂に入るんだ……」

「今日は三回目だ」

カイトの言葉を質問と受け取ったエマが真面目に答える。

「いや、そうじゃなくて……」

「？」

「いや、いい……」

カイトも質問した分けではなかった、エルフ族に人族の言葉の二ユアンスを伝えるのは難しく、諦めた。その間にジェイルがエマの向かい側の席に座り、カイトはベッドに腰かけた。この部屋はエマとミーファが使っている部屋で、ジェイルとカイトが寝泊まりしている部屋は別にある。

しばらく三人で話をしてしていると、浴室の扉が開き、中から大きめのバスタオルを体に巻いたミーファが、もうひとつのタオルで髪を拭きながら出てきた。

「きゃーっ！！！！！！」

ジェイルとカイトが部屋にいることに気づいたミーファは悲鳴を上げながら浴室に戻って行く。

「うるせえな。小娘の裸になんか興味ねえよ……」

「では、カイトのように見ないようにしたらどうなのだ？」

ミーファの姿に視線を逸らしたカイトとは違い、興味が無い割りには視線を浴室から離さないジェイルをエマが睨む。

「ふっ。見えるものは見る。男の本能だ」

ジェイルは何故か誇らしげで爽やかな笑顔をエマに向けた。

「人族の男というものは……」

「いや、だからなんでエマにとって人族代表がジェイルなんだよ……」

「…。ジェイルはどちらかというと特殊な部類だぞ」

「特殊って……」

ジェイルが反論しようとした時にミーファが浴室から顔だけだけした。

「変態。いるならいるって言いなさいよ」

「わるい。仕事の話があるんだ。早く着替えて来てくれ」

カイトが浴室の方を見ないようにしている目の前で、未だ浴室を凝視していたジェイルがエマに蹴られている。

「仕事？ ちょっと待つて。エマ、ベッドの上のあたしの服取
て〜」

エマは立ち上がると「やれやれ」と言いながらも、ベッドの上で
脱ぎ散らかされていたミーファの服を取ると手渡した。

「ミーファがある意味一番怖いもの知らずだな」

「ああ」

その行動にジェルとカイトが関心する。ちなみにエマは百年以
上生きていると思われるエルフ族である。

ミーファは浴室で着替えて、未だ濡れたままの髪をタオルで拭き
ながら出て来た。そのままベッドの横に行くと、自分の荷物から魔
石を取り出しなやら魔力を込めながらエマの隣に座ると、魔石を
自分の正面に置いた。

「……なんでお前の髪はなびいてるんだ？」

「ん？ これで髪を乾かしてるの」

ミーファが魔石を指差しながら答える。ジェルが正面のミーフ
アの髪が室内なのに風になびいているのが不思議だったようだ。

「魔石？ 風の魔法か……。便利なもんだな」

「でしょ。まあ、変態ジェルには無用なものだけどね」

ミーファはタオル姿を見られたことに相当怒っているようだ。

「変態じゃ……」

「本題に入るぞ。待ち合わせに遅れてしまっ」

ミーファの言葉に反論しようとしたジェルの言葉をカイトが遮
る。

「なんか俺、最近扱いが悪くねえか？」

「気のせいだ。それより、今回の仕事だが魔法士協会からの依頼で
人物調査だ。これから依頼人のもとに行くからミーファにも来ても
らいたいんだ」

「人物調査あ？ つまらなそう……あたしパス」

ミーファがあからさまに不満そうだ。おそらく魔法が派手に使え
そうもないところが嫌なのだろう。

「ふざけんな。むしろお前一人でやってこい！」

ミーファの言葉にジェイルがいらついた声を上げる。

「やーだよー！」

「てんめえ〜……」

「えーい、話が進まん！！ 誰がやるかはともかく、とりあえず話を聞け！！」

「人物調査とはなんだ？」

エマが頃合いを見計らい聞いてくる。

「そのままの意味だよ。特定の人物を調査するんだ。まあ、何か怪しいことでもしてるんだろう」

「……？」

エマはよくわからないといった顔をしている。

「まあ、やってみればわかる。で、今回の依頼主、さっきも言ったが魔法士協会なんだ。それで、とりあえず話を聞きにいくときにミーファにも来てもらいたいんだ」

「あー、ここの魔法士協会に登録してないよ。登録は地元でするから」

「そうだろうが、俺もジェイルも魔法士協会つてところは行ったことがなくてな。どうせヒマだろ？」

「ヒマかって言われたらまあ、、、しよ〜がないな〜」

「何故カイトには従う？」

ジェイルは不満そうだ。

「これが人徳だよ、ジェイル。エマはどうする？」

「私も行く。興味がある」

そう言うエマは立ち上がり、つられてカイトも立ち上がった。

「ちょっと待って、まだ髪が乾いてない……」

「……」

「……」

エマとカイトは座り直した。

第二話 【2】

「ここか？」

「そうっばいね。魔法士協会の旗が立ってるし」

カイトとミーファ、そしてエマの三人は街の西南にある魔法士協会の建物に来ていた。建物は三階建てで割と広く、屋根の中央には魔方陣と二本の杖が描かれた魔法士協会の旗がなびいている。ジエイルは話を聞くのは面倒だからと魔法士協会には来なかった。

三人は入り口の扉までくると、カイトが扉を叩く。

「すいませーん。ギルドで仕事を受けたワンダラーの者です」

少し待つと扉が開き、中から中肉中背でローブを纏った初老の男が顔を出した。

「おお、依頼していた仕事の件ですな。店主より連絡を受けています。よく来てくださった」

男は全員を握手をすると愛想良く三人を中へと招き入れ、一階の客間と思われる部屋へと案内された。部屋内部は中央にテーブルがあり、その両側に丈夫そうなソファが並べてある。案内した男はその片側に座って待つように言うと一度部屋を出た。しばらくして白髪の髪を肩まで伸ばし、顎にも白い髭を生やした、いかにも偉そうな老人と部屋に戻り、カイト達三人を紹介した。エマはいつも通りバンダナを巻いているため、エルフ族だということには気づいていないようだ。

「俺はこの協会の理事を努めているリガル・バウエンである」
リガルと名乗った男は三人の正面に座る。

「さっそくですが、ギルドの方では人物調査ということまでは聞いていますが、具体的な内容までは聞いていません。誰を調査するのですか？」

カイトはさっそく本題に入る。エマもこういうことに興味があるのか耳を傾けているが、ミーファは出された紅茶を真剣に吟味して

いる。

「うむ。調査して欲しいのは、この街の外れに住むオクラ・トマエールという男だ。魔法の研究者なんだが、そこで何を研究をしているかを調査して欲しいのじゃ」

「何の研究をしているの」

紅茶を吟味していたミーファが魔法の研究という言葉に反応する。

「いや、じゃからそれを調査して欲しいのじゃが……。ま、まあ実を言つと何を研究しているのかはわかつている。禁呪じゃ」

「禁呪……」

それを聞いたミーファは複雑な表情をしている。

「何故魔法士協会で調査しないのですか？」

カイトが質問する。この質問は重要である。こういうことを自分達で行わずワンダラーに頼む時は何か裏があることが多い。

「うゝむ。まあ、ちよつと訳ありなのだが仕事を頼む以上仕方あるまい。実はこの男、今は別件で破門となつてているが、元々は僕と同じこの協会の理事でな。この協会のやり方にも人物にも詳しいのじゃ。協会の方でも調査はしたのじゃが、正攻法では尻尾を出さん。

証拠が無ければ憲兵に引き渡すことも出来んで。それで、ギルドに調査を依頼したのじゃ。研究で済んでおればいいのじゃが、少々危ない男での。協会出身者の者が禁呪を使ったとなればこの協会の権威が失墜する。その前に何としても捕まえたいのじゃ」

「なるほど。つまり、正攻法じゃない手を使ってでも調べてこいということですね」

「……それは任せる。報酬は成功したら金貨六枚でどうじゃ」

金貨六枚は、人物調査としては破格の報酬である。だからこそ暗に手段は問うなというリガルの真意がカイトには伺えた。非合法なことをしてでも、というところがカイトには引つかかったが、金貨六枚という報酬に負けた。

「……わかりました。引き受けましょう。エマ、ミーファいいな」

「私は構わない」

「え？…あ、うん」

禁呪という言葉聞いてから無口になっていたミーファが微妙な表情をしている。カイトはなんとなく気になったが、とりあえずは無視した。

その後カイト達はオクラ・トマエルという男の館の詳しい位置を聞くと、魔法士協会を後にした。

「とりあえず、ジェイルのところに戻るか」

門を出た後に宿に戻ろうとしたカイトをエマが引きとめる。

「禁呪とは何なのだ？」

エマには先程の話がよく分かっていなかったらしい。

「いろいろあるが、ミーファに聞いた方早いだろ。なっ」

カイトは一番後ろを歩いていたミーファに話しを振る。

「え？ あ、うん。どうせ、ジェイルも聞いてくるだろうから、戻ったら教えるよ」

「どうしたんだ、ミーファ？ さっきから元気が無いな？」

「そ、そう？ そんなこと無いよ。あは、あはははは」

ミーファはあきらかにわざとらしい笑みを浮かべると視線を逸らした。

「…なんか、後ろめいたことがあるな」

「な、無いよ！！」

ミーファは否定したが、額から汗が吹き出していた。

「まあ、いいや。とっとと戻ろう」

第二話 【3】

「禁呪って何だ？」

宿に戻り寝ていたジェイルを起こすとさつきと同じ位置にカイト以外が座り、カイトはジェイルに魔法士協会で説明を受けたことを一通り説明した。それを聞いたジェイルは予想通りの質問を返してくる。

「だそうだ。エマも知りたがってるし、ミーファ、説明してやってくれ」

カイトは説明をミーファに任せると、自分は先ほどと同じくベッドに腰掛けた。

「カイトは知ってるの？」

「まあ、詳しいわけじゃないが知識としては持つてるよ」

「へへ、そうなんだ」

魔法が使えない剣士のカイトが魔法の知識、しかも魔法士でも知らない者がいる禁呪を知っていることにミーファは意外だったようだが、お互いあまりその辺には触れない方がいいと思ったのか、それ以上は聞かなかった。

「コホン。では、ちよつとだけ禁呪講義を」

ミーファは立ち上がり、得意気な顔で禁呪の説明を始める。

「禁呪っていうのは、まあ単純に言えば禁止されている魔法のことなの」

「禁止されてるの魔法？ そんなんあんのか？」

「うん。いくつかあるけど、有名なのは五つ。まず一つは自然魔法の一つで闇の魔法。これは公的機関以外では研究することも禁止されてるわ」

「なんで？ てか、闇の魔法って出来無いんじゃないか？」

ジェイルは魔法にはあまり詳しくは無いが、闇の魔法が実現出来ないくらいのは有名な話であり知っている。

「理論的には世界の構成要素の一つである限りは出来るはず。でも、出来た人間はいないと言われているね」

「出来ねえのになんで禁止されてるんだ？」

「光や火なんかとは違って闇って実体がわからないの。だから、使えないんだけど仮に使用してしまった場合、どうなるかわからない。ひよつとしたら世界が闇に飲まれてしまいかもしれない危険性を秘めてるの。だから研究そのものが禁止されてるわ。私はそういうのは良くないと思うんだけど、ばれるとかなりの罪になる」

「実体がわからない？」

魔法が使えないジェルには、ミーファの言っていることがいまいち理解出来ないようだ。

「そう。闇と聞いて思い浮かべるのはどうしても、黒だったり夜でしょ。でも黒は色であり、夜は時間。闇ではないわ」

「さっぱりわからん」

「ま、まあ。ジェルに理解出来るとは思って無いけど、、、で、今回のオクラとかいう研究者だけど、多分研究しているは闇の魔法ではないと思う」

「なんでわかる？」

「闇の研究は世界の構成要素を解明する研究の一環として、公的機関では行われている。魔法士協会もその一つだから、研究したいのなら魔法士協会であればいいと思うし。破門された事で続けられなくなったなら、研究内容をあのリガルって人が知っているはずだも
ん」

リガルはオクラの研究内容は禁呪ということ以外は知らなかった。
「ってことは他の四つってことか？」

「多分ね。他の四つは全部陣魔法で、通称マリオネットと言われる操りの魔法、スリープと言われる眠りの魔法、瘴気の召喚魔法であるサモン、そしてリカバリと言われる復活の魔法よ。そして、おそらく研究するのは前の三つのどれか。もしくは全部」

「どんな魔法なんだ？」

ジェイルは禁呪に興味が出て来たのか、身を前に乗り出して聞いている。エマも長い耳を傾けていた。

「全部名前のままだけど、マリオネットは人の精神に干渉して、まあ要は術者の意のまま操る魔法。スリープは相手を眠らせてしまう魔法。この二つは自由に使われてしまうと犯罪が横行してしまうでしょ。だから禁止されてるの。そして瘴気の召喚は何故禁止かは見当が付くでしょ」

「瘴獣を自由に作れるってことか」

「おお、ジェイル。本当に見当が付いたんだね。ちょっと関心」

ミーファは拍手をして、ジェイルを称えた。

「お前は、俺をなんだと…。だが、召喚の魔法はおもしろいな。使えれば仕事に困らねえ」

「自分で召喚して、自分で仕事に登録して、自分で退治すんの？」

「ああ、そうだ。便利だろ」

「…ま、まあ、割と平和的な使い道だね。でも、そういう使い道をするやつばかりじゃないだろうしね。瘴獣を召喚して戦争に使用したり、それを理由に街全体を脅迫したりなんてこともできるだろうし」

「なるほど、そんな使い方もあるか。気付かなかった」

ミーファの言葉にジェイルは素直に感心している。

「ジェイルってワンダラーの仕事以外には興味無いよね」

「ワンダラーの鑑だろ」

ジェイルは誇らしげに言った。

「まあ、いいけど」

「一つ良いか。研究していないと言っていた復活の魔法とは？」

ずっと黙って聞いていたエマが口を開いた。人族の魔法はエルフ族は使わなかったため興味が沸くようだ。エルフ族もエルフ族特有の魔法があると言われるが、何故かエマは使わない。

「復活の魔法が禁止されている理由はちょっと特殊で、危険というわけではなくて倫理上の問題なの」

「倫理上の問題？」

今度はエマの質問が始まった。

「そう。復活の魔法というのは、死者を生き返らせる陣魔法。神を冒瀆する魔法ということで、禁止されているの。ただ、禁止されなくても成功率はほとんど無いに等しいけどね」

「なるほど。神はともかくとして、自然の摂理に反する。確かに許される魔法では無さそうだな。しかし、成功率がほとんど無いというのは？」

エルフ族は人族が信仰する大地母神マテルを信仰しているわけでは無いため、理由は違ったがやはり死者の復活には反対のようだ。

「生き物が死ぬのはそれなりに理由がある。重い病気だったり、怪我だったり、寿命だったりね。肉体が生命活動を維持できない状態になってるから死んでるのに、精神や魂だけを魔法で呼び戻しても生き返ったりはしないわ。可能性があるのは、シヨック死とかの突然死ね。それでも魔法自体が非常に難しい上に準備に時間が掛かる。死んだ直後でもない限りはやっぱり肉体が受け皿になれない状態になってしまっし、都合良く準備万端な状況でシヨック死なんて無いでしょ。だからほぼ無理」

「そういうことか。……しかし、人を復活する魔法があるのなら、……殺す魔法もあるのか？」

エマの表情が厳しい。ジェルもミーファに視線を注いでいる。確かに存在するば恐ろしい魔法だ。

「……あるわ」

その二人にミーファは得意気な、しかも何故か笑みを浮かべながら答える。カイトも後ろで笑っている。

「ん？ でもさっき言ってた五つの禁呪の中にあっただけか？」

ジェルはそんな二人の態度に怪訝な顔をしつつも、さっきミーファの言った代表的な五つの禁呪の中に入っていないことが疑問なようだ。

「さっき言ったのは代表的なものだけだからね。他にこまこまとあ

るよ。その一つが死の魔法」

「死の魔法がこまごまとした部類なのか？」

エマは眉間に皺を寄せ、信じられないという表情をしている。

「うん。その他大勢の一つって感じ。何故なら成功しないから」

「そんなに難しい魔法なのか？」

「ううん。それほどでも。簡単では無いけど、マリオネットとかリカバリとかに比べたら全然楽よ」

「言ってる意味がさっぱりわからん」

「何故成功しないかというのと、諸説あるけど最近の研究で一番有力なのは生き物の死にたくないという精神の防衛本能が非常に強力だからと言われてるわ。それはすべての生き物対して言えることで、死の魔法を完璧に使っても虫を殺せた実績すら無いそうよ」

「効かない魔法だからその他大勢の部類なのか。だが、自殺志願者とかだったら効くんじゃねえのか」

「自殺志願者だって、頭で死にたいと思っただけで、生物としての本能が死にたいと思う分けじゃないから無理ね」

ミーファは人差し指を立てながら得意げに説明する。

「なるほど。ジェイルが男としての本能でタオル姿のミーファから目を離さないことと同じということか」

『それは違う』

エマが真顔で見当違いなことを言ったので、ミーファとカイトが真顔でツッコむ。

「ジェイルのは変態なだけ。まあ、そんな訳で、オクラってのが研究してるのは多分マリオネット、スリープ、サモンのどれかよ。もし、マリオネットとスリープを研究してるとしたら、私たちも掛けられないように気をつけないと」

「防げないのか？」

今までずっと話を聞いているだけだったカイトが口を開く。その声にミーファはカイトの方を振り向いた。

「まあ、陣魔法だから魔方陣の中に入りさえしなければ、とりあえ

ずは大丈夫よ」

「なあに、死の魔法が精神力で弾けるなら他も同じだろ？ だって俺様は掛からねえよ」

ジェイルは根拠の無い自信を見せる。

「まあ、そうだけど。無理だと思うよ。マリオネットはちよつと特殊な精神干渉だし、スリープは多分防げない。人は心の底では眠りを求めるからね」

「心配ねえよ。自分の心配でもしとけ」

ミーファはものすごい疑惑の目を向けている。

「おもしろそうだから俺も行こう。どうするんだ？」

ジェイルは立ち上がるとカイトに目を向ける。

「そうだな。正面から行っても答えてくれる訳も無いし、何か策を練らないとな。潜入するにしてもとりあえずは下見だな。これは俺とジェイルで行ってこよう。あまり多いと怪しまれるし、エマとミーファは建物の構造を見てもわからないだろ」

「む、失礼な」

「わかるのか」

「……何階建てかくらいは」

「私もそれくらいならわかるぞ」

「……ジェイルと二人で行ってくる」

カイトは疲れた声でそう言うと、ジェイルと共に宿を出た。

第二話 【4】

「あそこか」

カイトとジェイルは魔法士協会のリガルに教えてもらった館から少し離れた小路に来ていた。そこから間に数軒越しに調査対象であるオクラ・トマエルの館とおもわれる二階建ての建物が見える。

「だな。が、ここからじゃ構造がよくわからねえ。もう少し近づいて一回りしてみようぜ」

二人が館に近づいてみると個人の館にしてはかなり大きいほうで、木造二階建てでかなり年季が入っている。そして、館の周りには大人の身長の上二倍はありそうな塀で囲まれていた。二人はその塀の周りを怪しまれないように館からは視線を外して歩き始めた。

「この塀は厄介だな。無理に飛び越えると目立ち過ぎる」

「ああ、だが見張りの姿は無い。夜やるか？」

「まあ、忍び込むなら夜だが、証拠を掴むとなるとそれなりに館を調べて回らないといけないしな。さすがに中には何人かはいるだろうし、怪しい研究の証拠が見つけやすい所にあるとも思えない。そう長時間探すことはできないだろうから中の見取り図みたいなものが手に入ればいいんだが。こんな年季の入った建物では無いだろうな」

「無理やり侵入して、オクラつてのを見つけてふん縛って脅して吐かせるつてのは？」

「……吐けばいいが、吐かなかつたら俺たちはただの強盗になってしまうよ」

二人が正門のある側まで歩いてくると、馬車が一台二人を追い抜き正門から中へと入っていく。その馬車の横にある窓から、短い黒髪で顔は皺だらけの老人の姿が見えた。

「見たか？」

「ああ、あれがオクラだな。根が暗そうな奴だったから間違いないねえ」

「どつという根拠だ。だが、そのようだな。このまま正門を通りすぎよう」

二人は正門の前まで来ると、門は既に閉まっていて中を見ることは出来なかったが、ジェイルがあるものに気付く。

「おい、カイト。これだ」

親指で正門に何枚か張つてある紙を指す。その表情は楽しそうだ。

「ん？……本気か？」

「ああ、いい手だろ。怪しまれずに中に入れるし、動き回ることも可能だ」

「お前がやるのか？」

「んなわけあるか！ 条件にも合わねえ。エマが出来るとは思えねえから、ミーファだな」

「まあ、とりあえず本人に聞いてみるか？」

カイトはあまり気のりはしていないようだったが、他に手も見当たらないため何枚か張つてあつた張り紙を一枚剥がすと、とりあえず宿に戻ることにした。

「メイド！？ あたしが？」

ジェイルからオクラの館に張つてあつた張り紙を渡されたミーファが叫ぶ。今度は先ほどとは違いカイト達の部屋に集まつた。

「ああ。ナイスアイディアだろ。条件にもピッタリだ」

ジェイルはさつきから楽しそうだ。

「メイド募集（条件：住み込み。若い女性に限る。）…メイドとはなんだ？」

ミーファから張り紙を受け取つたエマがその張り紙を読み上げると、内容が理解できないためカイトに視線を送る。

「まあ、言つなれば家のお手伝いさんみたいなものだ。料理を作つたり、掃除したり、洗濯をする人を雇うんだよ」

「人族というのはそんなことも自分で出来ないのか…」

エマはため息混じりに呟いた。

「いや……そういうことでは。俺たちは自分でやってるし……」
カイトもため息混じりに呟いた。

「てゆうか、条件が怪しすぎない？というより、イヤらしすぎる…
…」

「わかってないな。それが男のロマンなんだよ」

ジェイルは何故が開いた窓から遠くの山を眺めて呟いた。

「お前、そればっかだな。だが、今回のこれは断ってもいい。すこ
し危険だ」

「え、なんで？ やるけど？」

「え、やるの？」

カイトはミーファに助け船を出したつもりだったが、ミーファは
何故か割とやる気だった。

「まあ、ちよつと条件が気になるけど結構興味あるし。やるよ」

「なんだ、お前メイドになりたかったのか？」

未だ遠い目をしていたジェイルにも聞こえたのか、拍子抜けして
いる。

「違っつて……オクラって奴の研究の方。まあ、危ないと思ったら
館を吹っ飛ばしてでも逃げてくるから大丈夫」

「おいおい。せめて扉を破壊するくらいにとどめてくれ」

ミーファが得意気に言った危険なことをカイトが制止する。

「まあ、俺たちも館の近くににいるから何かあったら大声で叫んでく
れ。乗り込んでいくからさ」

「りょーかい」

「だが、ミーファ。お前、メイドなんて出来るのか？」

どちらかというミーファはそういうことが出来なさそうに見え
る。

「失礼な。大丈夫。うちに結構居たし」

「うちに……」

「いた？」

カイトとジェイルが驚く。エマの表情は変わらない。

「お前、ひよつとしていい所のお嬢なのか？」

ジェイルが驚愕の目をミーファに向ける。

「え？……あは、あはは……今日はもう遅いから、行くの明日の朝でいいよね？ それじゃ、おやすみ〜」

ミーファはそういうと、逃げるように自分の部屋へと行ってしまった。

「怪しすぎる」

「なんだかよくわからないが、とりあえずミーファが潜入して調べるといふことなのか？」

エマが立ち上がりながら聞いてきた。

「まあ、そんなところだ」

「そうか、私も見てみたかったのだが仕方ないな。私もそろそろ部屋に行く」

「ああ、俺たちも今日は早めに休むよ。なっ」

カイトはジェイルの方を見たが、ジェイルは心外そうな顔をしている。

「なんで？ 俺はこれから街に繰り出してくる」

「……好きにしてくれ。俺は先に寝る」

エマとジェイルが部屋を出ると、カイトは風呂に入り早めに眠った。

「こんにちは〜！！ 誰かいませんか〜！！」

翌朝早く、ミーファは一人でオクラの屋敷に来ていた。途中までカイトと一緒にだったが、屋敷に近づく前に別れ近くに身を隠している。

ミーファは門の前でしばらく待つと、門が中から開かれ若い女性が姿を現した。メイドの一人のようだったが、それよりもその服装にミーファは驚愕したが、表情に出さずに用件を告げる。

「張り紙を見て雇ってもらいに来たのですが」

「ああ、メイドの件ですね。よくおいで下さいました」

メイドはにこやかにそう言うと、ミーファに面接があることを告げ中へと招き入れた。手入れの行き届いた庭を抜け、館の広間に通されしばらく待たされると、奥から黒いローブを身にまとい、白髪のボサボサ頭で顔に皺が何本も刻まれた老人、オクラが姿を現した。「お主か？」

「はい、メイド募集の張り紙を見まして、雇って貰えないかと」

ミーファは、らしくないほど愛想よく話す。

「条件は知っておるな？」

「はい、住み込みで問題無いです」

オクラはそれを確認すると、ミーファを頭のとっぺんから足の先まで舐めるように見回す。その視線にミーファは悪寒を覚え、額から汗が滴ったが表情は崩さず笑顔を向けている。

「合格じゃ。今日から働いてもらう」

「へ？」

オクラの言葉にミーファは間の抜けた声を出す。何を根拠に合格なのか聞きたくも無かったが、メイド経験を聞かれることもなく、断られた場合の泣き落とし方法まで考えたいたミーファは拍子抜けした。

オクラはそれを気にすることもなく、先程から部屋の隅で控えているメイドを呼ぶとミーファにメイドの仕事を教えるように伝え、とつとと部屋を出て行ってしまった。呆然としているミーファにメイドはてきばきと仕事内容を伝える。特に特別な仕事は無く、一般的なメイドの仕事のようだった。我に返ったミーファはとりあえず、荷物を取ってくるとうそをつき一度屋敷の外に出ると、カイトにそのことを告げ再度館へと戻っていった。

カイトはその後も予定通り、屋敷から叫べば聞こえる位置に待機した。

「そろそろ交代するぞ」

ミーファが館に戻ってから数刻程たつと、カイトのもとへジェイ

ルが交代にやってきた。

「順調なのか？」

「ああ、とりあえず明日の昼に館を抜け出して状況を報告に来るところになったよ」

「割とあっさりと進むな。楽でいいが」

「どうかな。何か見つければいいが」

そう言うときイトはジェルと見張りを交代し、宿へと戻っていた。

宿の部屋に戻ると、中ではエマがいつも通り外の通りを眺めていた。なじみの無い人族の生活はめずらしいことが多く、見ていて飽きないらしい。そんなエマにイトは声を掛けると現在の状況を説明した。

「そうか、何か禁呪の証拠は見つかると思うか？」

エマは窓の外を見たまま、質問返す。

「難しいだろうな。そう簡単に見つからないとの自負があるからメイドなんて募集しているんだろうし。だが、館の内部構造と人数、そして内部から手引きが可能になれば潜入もやりやすくなる」

「なるほど。では、我々も行くことになるのか？」

エマは窓の外からイトに視線を移す。

「多分な」

「それは楽しみだ」

笑みを浮かべながら再度視線を窓の外に戻した。

「……エマ、人族の生活って楽しいか？」

「ん？ まあ、エルフの生活よりは刺激的ではあるな。エルフの村は平和ではあるが、何も変わらぬ日々を何百年も淡々と続けているだけだ」

「へー。俺はそういう生活も嫌いじゃないけどな」

「人族程の寿命ならそういう生活も悪くはないのだろうが、我々には永遠の時がある。あまりそういう生活を続けると感情が希薄にな

るのだ」

「感情が希薄？」

「気にするな。お前たちには理解できないことだろう」

「？」

何かを思い出したのか、エマの表情は少し寂しげに見えた。

その日は翌日まで夜通しでカイトとジェイルが交代で見張りを行った。

第二話 【5】

「といった感じね」

「やっぱり簡単には見つからないか」

「うん。とりあえず、すぐに入れるような部屋にはそういうものは何も無かった」

次の日の昼、カイト達三人は館を抜け出して来たミーファと宿で合流し中の状況を確認していた。カイトとミーファのやり取りをベツドに腰かけて聞いていたジェイルがミーファをジッと見ながら突然口を開く。

「ミーファ、お前服の好みを変えたのか？」

その表情はあきらかに笑いを堪えている。

「違う！！ オクラの趣味！！ これがメイドの制服なの！！ あいつ超エロオヤジで、いやらしい目で人のことを舐めまわすように見るし、やたらと触るし、そのくせに名前は覚えなし！！ この恰好でここまで来るの超恥ずかしかったんだから！！」

ジェイルが気になるのも無理はない。ミーファの恰好は淡い赤の魔法士用とも思えるローブを来ているが、その丈は以上に短くふとももまでしかないため、足はほぼ全部出ている。靴下は履いてはいけないらしく、素足にふさふさの毛の付いた淡い赤色の靴を履き、頭にはフリルの付いた髪飾りをしている。

「笑うな〜！！」

「いつてえー！！」

ついに我慢できなくなって、吹き出したジェイルの顔面にミーファの蹴りが飛んだ。

「まったく……」

「？ 私はミーファの恰好は悪くないと思うが」

エマがジェイルが何がおかしいのかわからないという感じた。

「え？ そ、そう？」

予想外なことをエマにいわれ、ミーファは思わずエマの前で一回転してポーズをとる。

「可愛らしいではないか。エルフ族の衣装でこういうものは無いから私も着てみたい。それは丈が合わないだろうが」

エマとミーファでは身長がかなり違う。

「エマがこの衣装を……」

ジェイルは頭の中で想像しているのか、顔が徐々に怪しい方向にほころぶ。

「ジェイル……だらしな顔にさらにエロさが増してるよ……」

ミーファはほとんど軽蔑するような目でジェイルを見ている。

「って、カイト！！いつもならこういふ会話を途中で止めてくれるのに、なんで何も言わないの？」

「え？ あ、ああ、そうそう。そろそろ本題に」

カイトは言われて慌てて会話の軌道修正を行おうとするが、そんなカイトにミーファが疑惑の視線を向ける。

「カイト……まさか、あんたまで」

「いや、違う！ え……ちょっと頭の中で作戦をだ……そう」

そう言ったカイトの肩をジェイルが強く叩いた。

「いてーな」

「カイト！！ わかるぞ、お前の気持ち！！ 乳臭い小娘が着てもおもしろいだけだが、エマが着たら結構萌えるんじゃないかと思うその心！！ それこそが、男のロマンだ！！」

ジェイルが窓の外の何かを指差し声高らかに男のロマンをうたい上げるが、その後ろでミーファが眉間に皺をよせながら怒りに震えつつ、魔力を集中している。

「風よ！！！！！！」

「ぎゃー……」

……ドガッ……

ミーファの怒りの風の魔法でジェイルが二階の窓から外に吹き飛ばされた。

「ジェイル、大丈夫なのか」

窓際にいたエマが下でピクピクしているジェイルを見下ろしながら、心配そうに呟く。

「ま、まあ、これくらいでくたばるような奴じゃない」

カイトも下を覗き込んだ。

「カイト、あんたも飛ぶ？」

ミーファは額に青筋を立てながら、にこやかにカイトに問いかける。その手には既に魔力が集中されていた。

「いえ、結構です……」

「ミーファ、怖いぞ」

さすがのエマも、顔が引きつっている。

「ほ、本題に入ろう」

「どうぞ」

ミーファは魔力の集中を解くと、エマの隣りに座った。

「オホン。で、えーと、なんだったか。あ、そうそう、すぐ見つかる所には何もないんだよな」

「そう、でも怪しい所はあったよ」

「怪しい所？」

「うん。あの館、地下があるの。で、オクラの奴は夕方くらいから夜遅くまでその地下に籠ってた。見に行きたかったんだけど、地下に降りる階段に二人見張りがいて行けなかったの。怪しいでしょ？」

「怪しすぎだな。見張りつてのは？」

「傭兵か何かだと思う。武器は持ってなさそうだったけど、腕っ節は結構強そうだったよ」

「やはり、俺達も中に入る必要があるそうだな。ミーファ、今夜とか俺達を手引きできるか？」

「うん。夜遅い時間なら大丈夫。中はオクラとメイドはあたしを含めて五人、見張りの男は二人だけだと思うから。地下はわからない

けど、とりあえず出入りは無かった。メイド達は夜寝ちやうし」

「よし。じゃあ今夜侵入しよう。あまり長くやってても怪しまれるだけだ」

「りょーかい。じゃあ、今夜ね。あたしはそろそろ戻らないと。あまり抜けてると怪しまれるから。あ、見張りはもう大丈夫だよ。とりあえず危険は無さそうだから」

「ああ、わかった。気を付けてな」

「あいよ」

そう言つとミーファは連絡方法を二、三決めて宿屋を出るとオクラの屋敷へと戻って行った。

「……ジェイル、戻って来ないな」

「まだ、下でピクピクしているぞ」

エマが指差した方には、うつ伏せで足と手がピクピクと動いているジェイルの姿があった。

「……結構、効いたようだな」

第二話 【6】

その日の夜、オクラの館の正門とは逆側の塀の外で、カイト達三人は待機していた。カイトとジェイルは館の塀に背を預け、エマは二人の正面に立ち話をしている。

「体中が痛え。くそ、ミーファの奴」

「人族というのは丈夫なのだ。我々では骨折くらいはしていそうなものだ」

エマは素直に関心している。ジェイルは体中痛がってはいるが、まったくの無傷であることに驚いているようだ。

「いや、普通の人族は骨折してるって……」

「まあ、俺様くらいになると、このくらいはなんでもねえよ」

「というか、自業自得だしな。これで怪我したらカツコ悪いことこの上ない」

「自業自得ってお前な。俺はお前の心の声を代弁してたんだぞ」

「お前と一緒にするなよ」

「じゃあ、おめー本当にあの時想像してなかったのか？」

ジェイルの言葉に思わずカイトはエマを見た。エマは何を言っているのかわからないという感じでキョトンとしている。

「……そろそろ、時間だ。行くぞ」

「ごまかしやがったな……」

カイトはジェイルの言葉を無視し、塀にある裏口と思われる出入り口の近くに寄った。しばらく待っていると館側から裏口の扉を誰かが叩いた。

「来たぞ」

カイトも同じくその扉を叩く。すると扉が館側から開けられミーファが顔を出した。

「ごめん。ちょっと遅れた」

「大丈夫だ。中は？」

「オクラの姿が見えないけど、多分地下。後は見張り以外はみんな寝たよ。あ、ジェイル。無事だった？」

カイトの後ろにジェイルを見つけると、詫びれることもなく笑顔で話しかけた。

「当たり前だ！ まったく……」

「さて、中に行くか。地下室への場所は？」

「ついて来て。窓からも見えるから一旦外から見せるよ」

カイト達三人はミーファの後に続き庭へ入り、館の窓の一つで壁際によった。ミーファは声を出さずに中を見るように指で合図している。

「あれか……」

カイトが窓から中をそつと覗きこむと下へと続く階段の所で体つきの良い男が二人、あくびをしながら立っているのが見えた。それを確認するとカイトは他の三人に屈んで寄るように合図をする。

「傭兵だな。俺とジェイルでなんとかしよう。ミーファ、あいつらの気を引けるか？」

「出来ると思うけど、大丈夫？ 暴れると騒ぎになるよ」

「心配するな」

そつ言つとカイトは軽く笑った。

「まあ、まかせるけど。じゃあ、みんなはあつちに扉があるからそこから入って。鍵は開けといたから。入って真っ直ぐ進んで突き当たりを右がさっきの廊下。あたしは逆から入ってあいつらの気を引くね」

「ああ。じゃあ、後でな」

カイト達はミーファと一度別れると、ミーファに言われた扉に向かった。

「ここだな」

ミーファに言われた場所に来ると、館の裏口と思われる扉がある。「行くぞ」

カイトはジェイルとエマを見ると二人は無言で頷く。カイトが扉

を開け周りを警戒している間にジェイルとエマが音を立てないように内部へと入った。中はかなり暗いがカイト達もしばらく外で目を慣らしていたため、見る分には問題が無かった。ジェイルを先頭にゆっくりと進んで行くと、ミーファの言っていたとおり右に曲がれる角があった。そこで、ジェイルが後ろの二人を手で制し、ゆっくりと角の先をのぞき見ると二人の見張りの姿が見えた。

「いたぞ。ミーファはまだ来ていないな」

「距離は？」

エマを挟んで後ろにいたカイトが聞く。

「十二、三步つてところだな。お、ミーファが来た」

ジェイルからミーファが逆側から見張り達にこやかに近付いて行く姿が見える。

「……あいつ、色仕掛けしてねえか？」

「え？」

カイトもエマ越しにのぞき見ると、確かにミーファはにこやかにローブの裾を少しめくっているように見える。見張りの二人もカイト達に背を向けミーファに近づきなやら話しかけていた。

「色仕掛けとはなんだ？」

エマは見ても意味がよくわからないらしい。

「エマにも是非覚えてもらいたい男の気を引く高等テクニクだ」
ジェイルが真顔で答える。

「本当か？」

ジェイルの言葉はいまいち信用できなくなってきたのか、エマをカイトに確認する。

「男の気を引くテクニクには違い無いが、エマは覚えなくていい

……」

「そうなのか」

エマは何故か残念そうだ。

「それより、そんなに長くは持たないだろ。とっととやろう」

「だな。俺は左をやる。カイトは右の奴にいつてくれ」

「ああ」

ジェイルはカイトに見えるように指を三本立てると、一本づつ折っていく。そして、最後の一本を折ると同時に二人は飛びだし、音を立てずに一気に見張りに接近すると手刀を首筋打ち付けた。見張りの二人は悲鳴を上げることも無くその場で卒倒する。

「おお、すごい」

ミーファは音を立てないように拍手した。

「ミーファ、お前さつき色仕掛けしてただろ？」

「えっ？ うん。だって気を引くんでしょ？」

「お前……以外と自分に自信満々だろ？」

ジェイルの言葉に何故かミーファは胸を張る。

「当然！」

「そ、そうか……」

「そんなことより、ミーファ。近くに空いてる部屋は無いか？ こいつらを隠さないと」

ジェイルとミーファのやり取りの最中にエマと二人で持ってきたロープで見張りを縛ったカイトが割って入った。

「あ、ここがいいよ。倉庫になってる」

地下へと続く階段のちょうど正面の部屋をミーファが開ける。

「よし、ジェイル」

「おう」

カイトとジェイルは見張りの二人を倉庫に運び入れ、中に備品の一つとして積み重ねていた布できつめに猿ぐつわをし、柱に縛り付けた。

「さてと、行くか」

カイトの言葉に三人は頷くと、倉庫を出て階段から地下へと降りた。

「暗いな。窓が無いからか」

ジェイルが階段を下まで降り切ったところでその先の通路を見ながら呟いた。確かに通路の奥は闇に包まれている。

「明り付ける？」

ミーファが杖を構えた。

「やめとけ。相手が魔法士なら魔力を集中すると感づかれる」

ジェイルに止められミーファはしぶしぶ杖を腰に戻した。魔力は目に見えるものではないが、魔法を使うために魔力を集中するとその気配に気付ける者も多い。まして、魔法士であれば尚更である。

「このまま進むしかねえな。まあ、人の気配はしねえしいきなり出くわすこともねえだろ」

ジェイルを先頭にミーファ、エマ、そして最後尾にカイトが付き地下を進む。外の庭の下まで地下は続いているらしく、かなりの広さがあった。一度突き当たりの角を曲がったところでジェイルが明りが洩れている部屋に気付き三人を手招きした。

「あそこにオクラが居そうだな」

四人はそつと近づき、少しだけ空いている扉から中を除くと、中には黒いローブを来た老人が魔石の明りの灯された机で何かの本を読んでいるのが見えた。四人はそれを確認すると、一度その場を離れ角の所まで戻る。

「あれが、オクラか？」

「うん。間違いない」

カイトの問いにミーファが小声で答える。

「やっぱり、ここで何かの研究をしていることは間違いないな。さて、どうするか」

「証拠とは何を探せばよいのだ？」

エマがカイトに聞く。

「そうだな。おそらく研究成果を何かに書き留めているだろうから、そういうものが見つかればいいんじゃないか」

「手分けして探すか？」

ジェイルが言う。

「ああ、地下にはオクラ以外はいなさそうだから他の部屋を片っ端から見ていこう」

カイトがそう言うと、四人は別れ各々別々の部屋へと入って行った。

第二話 【7】

「この部屋には無さそうだな」

カイトが入った部屋へ使われていない部屋なのか、特に何かあるような部屋には見えなかった。カイトがその部屋を出ると、少し離れた部屋でジェイルが手招きをし他の三人を呼んでいるのが見えた。ミーファとエマはカイトよりも先にジェイルの部屋に向かっている。「どうした？」

ジェイルが調べている部屋に入ると、そこは先ほどオクラがいた部屋と似たような部屋だが机は無く、壁際にはいくつもの本棚が並べらおり、中央は何も無い空間になっている。

「この部屋の本、手書きの本が多い。研究成果を置いている部屋っぽいぜ」

「本当か。よし、この部屋の中の本を手分けして調べてみよう」
カイトの言葉に三人が無言で頷いた。そこにある本はジェイルが言うとおりオクラが今まで研究してきた事の成果が記されているようだったが、大半は合法的な内容だった。

「それっぽいのはねえな」

ジェイルが呟いた瞬間、すぐ隣りで別の本を見ていたミーファが突然大声を上げる。

「ああ！！ これ、うぐう・・・」

「ばかっ！」

ジェイルは急いで手でミーファの口を塞ぐと、ミーファはもごもごしている。

「ぶはあ。だ、だって、でも、見てこれ？」

ジェイルが手を離すと、ミーファはカイトとエマも呼び、持っている本を開いて見せた。が、見てもすぐにわからないようにするためか、古代文字で書かれていて三人には読めなかった。

「なんて書いてあるんだ？」

カイトの問いにミーファは深刻な表情をしている。

「こいつ、恐ろしい研究をしてる。これはマリオネットの応用で・
」

「誰じゃー!!」

ミーファが説明を始めた直後に部屋の魔石が灯り、扉の所に魔法士用の杖を持ち黒いローブを纏った皺だらけのオクラがいた。

「げ、ばれた。ミーファ、お前のせいだ」

「ごめ〜ん……」

ジェイルがミーファの頭を小突くとその頭をさすりながら軽く笑ってごかすが、突然オクラに指を突きつける。

「でも、もう関係無いわ。証拠は手に入れた。オクラ!! あんたの野望はこれでおしまいよ!! こんなおそろしい研究は続けさせられないわ!!」

ミーファは指を射している手とは逆の手で先程の本をオクラに見せている。

「お主は!! メイド五号!!」

「だれが五号だ!!」

「おのれ、さては魔法士協会のまわし者だったか! だが、それを見られた以上生きて返すわけにはいかんぞ!!」

オクラは部屋の中に入ると、自らの杖を前に出した。同時にミーファも本をエマに渡し、自分の杖に握る。

「ばかめ」

オクラはそう言うと、杖を床に付き魔力を込めた。すると、床の所々が青白く光出した。

「ん? この床、何か彫つてあるぞ?」

それに気付いたカイトが床を指差すと確かに大きな円に古代文字で何かが彫られている。

「へ、ああつ!! これ、やばい! みんな魔法陣の外に出て!!
マリオネットよ!!」

「遅いわ!!」

オクラは魔力が込められた魔法陣に『力ある言葉』を唱え、魔法陣の力を発動しにかかった。

「くそ!!!」

ミーファの声を聞いたカイトがミーファを担ぎ魔法陣の外へ飛び出す。しかし、エマは反応が遅れ、それに気付いたジェイルがエマを魔法陣の外まで付き飛ばした。が、自分が間に合わない。

「うがぁ!!!」

魔法陣の中でジェイルが苦しそうな声を上げる。

「ジェイル!!!」

助けられたエマが駆け寄ろうとするが、カイトがそれを止めた。しばらくその状態が続くと魔法陣から光が消え、ジェイルも魔法陣の中で虚ろな目をしながら立ち尽くしている。

「三人逃がしたか……まあ、いい。おい、大男！ そいつらを斬れ！ ただし、メイド五号ともう一人の女は殺すなよ。儂が後でたっぷり可愛がってやる。ひっひっひっひ」

オクラは不気味な笑い声を上げると、部屋から出て行ってしまった。

「おい、待て!!!」

カイトがオクラを追うとするが、ミーファがカイトの手を掴み制止する。

「まって、カイト!!! ジェイルが!!!」

ミーファの言葉にジェイルに目を向けると、背中に背負っていた大剣を抜き、あきらかな敵意をカイト達に向けていた。

「おいおいおい。本当かよ。ジェイル!!! 俺達がわからないのか?」

カイトの呼びかけにジェイルは答えない。

「多分、完璧にマリオネットに掛かっちゃった。解かないと、術者の言うことしか聞かないと思う」

「解けるのか?」

「解呪はできるはずだけど、私はやったことないよ……」

「知識は？」

「微妙に…無いことも無いって、うわぁ！」

…ギイン…

突然、ジェイルが一気に間合いを詰め斬りかかって来る。カイトは両側にいたエマとミーファを付き飛ばすと、腰のバスタードソードを抜いてその剣を受け止めた。

「ミーファ、しばらく俺がジェイルの相手をする！！ その間になんとかしろ！！」

カイトはジェイルと剣を合わせながら叫んだ。

「ええ！！ マリオネットの解呪って難しいんだよ！！」

「だからってジェイルを斬るわけにはいかないだろ！」

「そりゃそうだけど…。うゝん、わかった、なんとかがんばってみるよ。エマ！！ 手を貸して！ ここみたいに床が広くてまだ魔法陣が彫られていない部屋を探して！」

ミーファの言葉にエマが頷くと、二人で周りの部屋を探しにいった。

「さてジェイル、まさかお前とやり合うことになるとはな」

カイトは剣が合わさっている個所を支点に後ろに一度離れると、ジェイルもカイトを追い、今度は横に薙いで来る。

…ギイン…

カイトはそれを剣で受けると、両者は再度離れて対峙した。

「まったく、お前とは一度勝負してみたいとは思っていたが、こっちは手が出せないとはとんだハンデ戦になったな」

カイトは攻めることなく、ジェイルの斬り込みを防いでいるが、ジェイルの剣は両手持ち用の大剣であり、カイトは片手、両手のどちらでも使えるバスタードソードである。カイトの剣の方が使い勝

手はいいが、こと攻めに關してはジェイルの劍のほうはかなり強力である。それを攻めずに受け続けるのはかなり厳しいと思われた。

互いに様子見ためかしばらく対峙していたが、攻撃できないカイトをよそにジェイルは大劍を一度下げると今度は下からの斬り上げてくる。カイトはそれに対し劍を打ち付けて受けるが、抑えきれず体を浮かされバランスを崩してしまった。

「なんだと！！ この馬鹿力が！」

バランスを崩したカイトの首を目掛けて今度は大劍を横に薙いだ。カイトはそれをしゃがみこんで間髪かかず。

「危ないな。そっちは躊躇無しかよ」

第二話 【8】

「ミーファ!! この部屋空いているぞ!!」

エマの声にミーファがその部屋に掛け込む。

「あ、いい感じ」

「出来そうか？」

「ちょっと待って、え〜と……どうしよう。とりあえずわかることまで……」

ミーファはそう言うと、腰に付けている革の入れ物の中から、魔法陣を描くために持ち歩いている石灰岩を取りだし床に魔法陣を書き始めた。しかし、途中で手が止まる。

「う〜ん……あつてるのかな？」

ミーファは立ち上がり、部屋の端から端を行ったり来たりしながら何かを考えている。部屋の外では剣の打ち合う音が響いていた。

「ミーファ、急がないとあの二人が」

エマが心配そうな声を上げる。

「待って。間違つとジェイルを精神崩壊させかねないの」

「そ、そんなに危険なのか」

「精神干渉系の魔法はかなり危険よ。と、とりあえずエマ! あの二人をここまで誘導して!」

「わかった」

エマはミーファをその部屋に残し、カイト達の元に戻った。

「カイト! 向こうの部屋でミーファがジェイルを元に戻す準備をしている。なんとかジェイルを誘導出来るか？」

カイト達の元に戻ったエマが叫ぶ。

「わかった! なんとかやってみる。危ないから先に行つてくれ」
ジェイルの剣を受けながらエマに応え、カイトは徐々にミーファのいる部屋へと近づいた。ジェイルもカイトを狙っているため

その後が続く。カイトが打ち合いながらもミーファの部屋に入ると、ミーファはまだ部屋を歩き回っていた。

「ミーファ!! いいのか?」

「あ、あはは。早かったね……まだです」

ミーファはかなり引きつった顔で笑っている。

「おい! そんなに待てないぞ!!」

「わ、わかってる!! もう少し待って!!」

「カイト! 私も加勢するか?」

エマが自分の腰のレイピアを抜いた。

「いや、やめとけ。今のジェルには躊躇が無い。半端な技量では殺られるぞ」

「くっ」

エマは弓の腕は一流だが、レイピアは護身術程度にしか使えない。とても、ジェルの大剣を受けることはできない。

「ミーファ!!」

カイトが急かす。

「わかってるよ!! ちょっと静かにしてて!! え〜と、操られているということは、恐らく自分の思考を制限されているんだと思うから、え〜と、自我を失ってるのかな……」

ミーファはブツブツいいながら部屋を行ったり来たりしている。

「う〜ん、まさか自我が崩壊しているの? いや、だったらただの獣だし、剣技なんて使える訳無いから……でもそれは、制限されても同じかな? それに、制限されてるだけなら私達のことを覚えていないのも変だし……う〜、そうか、別な擬似的な自我を埋め込まれて、元々の自我を押し込まれているのかも。だとしたら、元の自我を呼び戻すためには……」

ミーファは必至でマリオネットの解呪を考えているが、その間もカイトとジェルは激しい戦いを繰り返している。

ジェルが大剣でカイトの腹部目掛けて横に薙ぎ払うのをカイトが後ろに下がってかわす。かわされた剣が壁にぶつくと、ジェイ

ルはさらに踏み込み跳ね返った反動を利用し今度はそのままカイトのふともも目掛けて打ち下ろした。

「おわっ！！」

――ガツ――キーン――

カイトはあわてて、自分の剣を床に突き立てそれを防いだ。

「まったく、自称百戦錬磨は伊達じゃないな」

カイトの言うとおりジェイルの実戦だけで鍛え上げられてた剣技は、一見荒削りで大雑把にも見えるが隙がなく狙いも正確だった。何よりも両手持ち専用の大剣を片手でも軽々と振るうその力は驚異的とも思えた。

ジェイルはその後も無言のまま剣を振り上げると一気にカイトの頭部目掛けて振り下ろした。カイトがそれを剣で受けたがその瞬間に刃が欠けその一つがカイトの顔を傷つける。

「チツ。ドワーフ作の業物で結構高いんだぞ。後で弁償させてやる。しかし、これは受けるだけではもたないな」

さらにジェイルが突いてきた剣を横に弾くとカイトは後ろに飛んで間合いを取った。

「ジェイル。悪いがこっちも本気を出させてもらっぞ！ うまくさばけよ！！」

そう言うときカイトは踏み込み剣を振り上げると、攻勢に出た。右斜め上から首を目掛けて斬りつけると、ジェイルは剣を左手に持ち、それを剣のガードの部分で受け止めると無造作にカイトの剣ごとそのままた下におろし、空いている右手でカイトの顔面を殴りに掛かる。カイトはそれをかわすと左手と首を使ってジェイルの右肘の関節を極め、そのまま投げに掛かるがジェイルは自ら前に飛んで一回転してそれを外した。そして、着地でバランスを崩したジェイルにカイトが剣を振り上げ叩き下ろすとジェイルはそれを剣で受けるが、カイトはその瞬間に足でジェイルの腹部を蹴り後ろに飛ばす。さらに

カイトが前に踏み込もうとするが、ジェイルは飛ばされたまま剣を横に薙ぎ、カイトの追撃を許さない。

「すごい……。あの二人、これ程の腕だったのか……」

傍らでその攻防を見ていたエマが感嘆の声を漏らす。

「しかし、これでは……ミーフア！　まだ掛かるのか？　カイトが本気になってしまった。このままでは決着が着いてしまう……！」

「え？　決着って？　どゆこと？」

部屋を端から端を行き来していたミーフアは突然声を掛けられたが、魔法陣の事で頭がいっぱいでカイト達の戦いを見ていなかったらしく何の事かわからない。

「どちらかが無事では済まない！」

「ええっ！！　なにそれ。ちょっと待って。もう少しで何かわかりそうな気がする」

「急いでくれ」

エマはミーフアを急かすが、ミーフアも未だ解呪の答えが見つからない。

「わ、わかった。えっと、自我を戻すとなると……自我は生まれてからの経験によって築かれるものだから、ジェイルの本来の自我は過去の経験に基づいて成り立っているはず。……ろくな経験じゃなさそうだな……ってそうじゃなくて、それが表に現れてこないということとは……どゆこと??　う……ん……過去の経験は、そっか記憶だ。過去の記憶を封じ込めて、オクラの下僕となるような簡易的な記憶を植付けられるのかもしれない。だからオクラの言うことに従い、私達のことは思い出せないのかも。ということは、過去の記憶を呼び戻せば本来の自我が前に出てマリオネットは解けるかもしれない！　う、自信は無いけど、やるしかない！」

ミーフアは途中で止めていた魔法陣を再度書き始める。

「ミーフア！　出来そうなのか？」

「うん、多分……」

エマの問いにミーフアは自信の無さか小声で頷く。その後、魔法

陣の記述を再開してからしばらく順調に書いていたが、途中で手を止め頭を抱えた。

「あれ、ねえエマ！ 記憶って古代文字でどう書くんだっけ？」

「え？ 私に聞いてるのか？ 人族の古代文字など私を知るわけないだろう」

「だよね……。あ、思い出した」

エマの焦りをよそにミーファは割とマイペースに魔法陣を書き進める。そして、書き終えると魔法陣用に細かく砕かれた魔石を要所に置いた。

「出来た！！ カイト、ジェイルをこっちへ！！」

「なんだ出来ちまったのか。もう少しでジェイルと決着が着けられそうだったんだが」

カイトはミーファの呼び声におどけて見せるが、カイト、ジェイル共に既に体に数か所切り傷を負っていた。カイトの言葉に二人の戦いを傍らで見ていたエマは冗談には聞こえずイラつきを見せる。

「馬鹿なこと言っていないで早くこっちへ」

「冗談だよ。二人とも端に寄っていてくれ。行くぞ」

カイトはジェイルに一度切りつけると、魔法陣の中に飛んだ。ジェイルもそれを追って魔法陣に入る。カイトはそれを確認すると魔方陣から出ようとしますが、ジェイルは渾身の力を込めてカイトに剣を振り下ろした。

-. -. ガギイン ツ -. -.

「ぐお！」

カイトはなんとかそれを剣で受け止めるが、ジェイルは離れずそのまま押し切ろうと力を込めて来たため、その場を動けない。

「カイト！！ 離れて！ 魔法陣の外へ！」

「だめだ。力を緩めると押し切られちまう」

「しょーがないな！！」

ミーファは片膝を付くと魔法陣の端に自らの杖を立て、魔法陣に魔力を込める。すると、それに呼応するように魔法陣と要所に置かれた魔力が青白い光を放つ。

「おい！！ 俺ごとやる気か？」

「大丈夫！ マリオネットに掛かって無ければ影響は無い……と、思う」

「思いつて何だ！！ 信じてるぞ！！」

「……………」

「何とか言ってくれ！！」

「一言だけ言っておくね！！ 私、解呪なんてやったことないから！！」

「何の念押しだ！！ 余計不安になるだろ！！」

「えーい！！ 大の男が細かいことを気にしない！！ いくよ」

ミーファさらに魔法陣に魔力を込め、力ある言葉を発する。

『自己を形作る崇高なる精神よ、汝を封じる仮初めの記憶を滅し、過去の記憶と共に蘇り給え！！』

ミーファの普段の声とは違い魔力を含んだ不思議な響きのある声で力ある言葉を唱えると、魔法陣はさらに強い光を発した。

「ぐわあ！！ なんだ、これはっ！！！！」

カイトとジェイルは合わせていた剣を互いに落とすと、カイトは片膝を付き、ジェイルは天を仰ぎながら共に頭を抱えている。

「うがあああっっ！！！！ マ……キア……」

ジェイルは悲鳴を上げると、そのまま両手両膝を付いて倒れ込んだ。

第二話 【6】

「ちょ、ちょっとやばかったかな……」

二人の様子を見たミーファとエマは若干引いている。

「カイト、ジェイル、大丈夫か」

エマが二人に駆け寄りると、ミーファもそれに続きカイトの近くで座り込んだ。

「ああ、なんとか。なんだ、今のは？ 昔の事が一気に頭を駆け巡ったような感じだ」

カイトはまだ、頭を抱えている。

「ホントに？ じゃあ、多分魔法自体は成功してる。そういう魔法だから」

「先に言えよ。死ぬ直前の走馬灯かと思ったよ。ジェイルは？」

三人はジェイルを見ると両手両足を付いた態勢で頭を横に振っている。

「……ジェイル？」

ミーファがジェイルに声を掛ける。

「ミーファの魔法か？ てめえ何しやがった！ くそ、頭が痛てえ。何だ今のは？」

ジェイルの言葉を聞いた途端ミーファは立ち上がりジェイルに駆け寄ると、その腹を思いつき蹴り飛ばす。

「いてえ！！ 何しやがる！！」

「何しやがるじゃないでしょ！！ あんたねえ、あんなだけ大口叩いていて何あっさりマリオネットに掛かってんのよ！！」

「へっ？」

ジェイルは間の抜けた声を上げた。

「へっ、じゃないーいーい！！ あたし達に斬りかかってカイトと斬り合って大変だったんだからね！！」

ジェイルは周りを見ると、自分の大剣が下に転がっているのを見

つけ、胡坐をかいて座り直すと記憶をたどる素振りを見せた。

「そっぴや、薄らとカイトと戦っていたような気もするな」

「気がするじゃないでしょ!!!」 『俺は精神力が強いから大丈夫』
とか、あたしに『自分の心配してる』とか言つてたくせに！ 自分
が掛かってどうすんのよ!!!」

日頃ジェイルにからかわれているミーファがこそとばかり言い
返している。ジェイルも反論できないらしく、額に青筋を立てなが
らも我慢していた。

「カ、カイト。止めたほうがいいのではないか」

その様子を見ていたエマが未だ頭を押さえているカイトに制止す
るように求めた。

「いいんじゃないか。まあ、ジェイルにも油断があつたらうし」

「しかし、ジェイルは私のせいでマリオネットに」

エマは自分を助けたために逃げ遅れたジェイルに申し訳なく思っ
ているようだ。

「ん？ ジェイルが何も言わないんだから、そんなことは気にする
必要は無いよ」

「しかし……」

「仲間で助けただけの、助けられただけの言つてたらきりが無いだろ」

「カイト……」

未だミーファはジェイルに小言を言っているが、ジェイルも我慢
の限界に来たのか突然立ち上がった。

「あんの根暗野郎!!!」

そして、その怒りは何故かオクラに向かう。立ち上がったジェイ
ルは大剣を拾い上げてその部屋を出るとオクラを探しに行つてしま
った。

「ちょ、ちよつとジェイル!!! この館危ないって!!! そちら中
に魔法陣があるから!!!」

ミーファも慌ててジェイルを追いかけた。

「俺達も行くか」

「あ、ああ。だが、オクラは逃げたのではないか？」

カイトは立ち上がると、エマもカイトに続く。

「逃げちゃいけないさ。というより、オクラが俺達を逃がせないはずだ。どこかで高見の見物を決め込んでるんだろ。ジェイルのマリオネットが解けたことで、罫でも仕込んでるんじゃないか」

カイトとエマは先に出た二人を追って部屋を出ると廊下を見渡したが、既に二人の姿は確認出来なかった。

「さて、どこにいったのやら」

「また部屋を一つ一つ見ていくのか？」

「ああ、だが無闇に中に入るなよ。どうやら、いくつかの部屋は既に魔法陣が彫られているようだからな」

「わかった」

エマとカイトは部屋を確認しながら地下を進んでいくと、少し先の左に曲がる角から青白い光が見えた。そして、その直後にミーフアの声が上がる。

「ジェイルのあほー!!」

「……なんだ？」

エマが光の方を見る。

「今の光、陣魔法の光に見えたが……まさか、ジェイルのやつまた……エマ、行くぞ」

カイトは光が見えた方向に向かって走り出し、エマもそれに続いた。角を曲がるとすぐ近くの扉が開いているのが見え、中から人の気配がする。カイトが中を覗くとミーフアと部屋の中央で横たわるジェイル、そしてそのジェイルのすぐ近くに黒いローブを纏った老人、オクラが立っていた。

「ジェイル!!」

「カイト、気をつけて。魔方陣が彫られてるの！ 陣の中に入らないようにこつち来て！」

ミーフアに言われてカイトは床を見ると、確かに何かの魔方陣が彫られている。カイトとエマはその魔方陣内に入らないようにしな

がら部屋の内部に入ると、ミーファと合流した。

「どうしたんだ！ ジェイルに何が？」

ジェイルは部屋の中央に横たわったまま起き上がらない。

「オクラがこの部屋にいるのを見つけたんだけど、ジェイルが危ないって言ったのに『ぶっ飛ばす』って言いながらいきなり踏み込み込んで……魔方阵の餌食に」

「ジェイルは魔法に疎いから…… ジェイル、大丈夫なのか」

「大丈夫。これスリープの魔方阵だから寝てるだけ」

「そうか。じゃあ、とりあえずジェイルは放っておこう」

「いいのか、それで……」

エマが心配そうな声を上げた。

「大丈夫だ。危ないと感じたら勝手に起きるよ」

「どういう意味だ？」

「あいつもアホじゃないってことだ。どの道ジェイルが魔方阵の上にいる以上手が出せないしな。それよりオクラをなんとかしよう」
カイト達が話している間にオクラはジェイルから少し離れたが、魔方阵からは出ようとしない。

「くつくつく。マリオネットが解くとは。メイド五号がそれほどの魔法士とは予想外じゃったよ」

「だから、五号って言うな……！」

「くくく。さあ、その男を助けないのか？」

オクラはジェイルを杖で指し、あからさまに魔方阵に入るように誘う。

「まいったな。ジェイルが人質になっちゃった」

「なんとかジェイル起こせないかな？」

「起こすだけならすぐ起こせるが、魔方阵内にいる限りはまた眠らされるだけだろ」

「近づかずに起こせるの？ 魔法での眠りは通常よりも深いから声とかじゃ無理だよ？」

「知ってる。まあ、それより魔法でオクラを倒せないのか？」

「え、あ、うん。やってみる」

ミーファは腰の杖を取りオクラに向けた。

「火よ!!!」

ミーファの声に呼応し、杖の先端の魔石から火球がオクラに向かって飛来する。

「そんなもの、儂には効かぬよ。霧よ」

オクラはその火球が届く前に杖を掲げると、杖から濃い霧が発生しオクラの周辺を覆った。火球はその霧に触れると消えてしまった。「なんだ、消えたぞ」

「あいつ、意外と強いかも。霧は水の魔法の応用で、結構高等な魔法なの」

ミーファはオクラを見ながら悔しそうな顔をしている。

「なるほどね。魔法士協会元理事の名は飾りじゃないわけだ」

「私が射るか？」

エマは既に背負っていた愛用の弓を組み立てていた。

「ああ、やってみてくれ」

カイトがそう言うとエマは矢を一本引き絞り、オクラの足目掛けて放ったが、オクラは微動だにしない。

「無駄だよ。風よ、そして火よ!!!」

オクラが発生させた風で矢の方向が変えられ矢はオクラの後ろの壁に突き刺さった。その直後にオクラから放たれた火球がカイト達に飛来する。

「風よ!!!」

その火球をミーファは発生させた風で横の石壁にぶつけると火球は石壁の一部を焦がし消えた。

「むむむ。あの速度で別系統の魔法を連発できるなんて……」

ミーファは悔しそうな表情をしている。どうやらミーファにはそこまでの連発は出来ないようだ。しかし、オクラもそれ以上の連発をして来ないところを見ると、ミーファや弓を使えるエマがいる以上あまり自分から攻めたくないのか、あくまで魔法陣に入るように

誘っている。

「うゝむ、間合いがこれだけあると魔法士は厄介だな。かといって間合いを詰めるわけにもいかないし」

「くつくつく。地上への扉は既に閉めた。お主らは逃がさぬよ。特に五号とその金髪娘は私の研究の実験材料にしてくれる。くくく」
オクラの表情には余裕が伺える。間合いを詰められることが無ければ、自らの魔法に自信を持っているのだろう。

「勘弁してよ……あんたのあんな研究の材料にされるなんてまっぴらゴメンよ!!」

ミーファは本気で怒っている。

「さつき説明の途中だったが、あいつの研究ってなんだんだ？」

「最悪の研究よ。あれが成功したらと思うと……」

ミーファは恐怖のためか肩を震わせた。

「あんたは絶対ここで倒す!!」

ミーファはオクラに杖を突きつけた。その表情には並々ならぬ決意が伺える。

「なんだかよくわからんが、とりあえずやばそうだな。しかし、どうするか。俺、この間合いでの攻撃はできないんだよな」

「うゝん、あたしもあいつと魔法勝負はあまり自信がないな……」

ミーファは基本的に自分の魔法にかなりの自信を持っているが、オクラの技量程ではないのかめずらしく弱気になっている。それでも、何か手は無いかと部屋中を見まわしていると、急に何かを閃いたのか手を打ち合わせた。

第二話 【10】

「あ、いいこと思いついちゃったかも。ねえ、エマ。三本くらい連続で矢を撃てる？」

「出来ないことは無いが、また風で防がれるのではないか？」

「それでいいの。あいつの集中力を乱してくれれば」

「わかった。やってみよう」

何かを思いついたミーファは二人の前に出る。エマはカイトの影で矢を三本準備するとミーファの合図をまつた。

「くつくつく。何をしても無駄じゃよ。嵐よ!!!」

その様子にオクラが先手を打ってきた。オクラが杖を掲げると、水を含んだ風がカイト達三人に吹き付ける。

「きゃあ!!!」

ミーファは吹き飛ばされそうになるのをカイトが支えるが、風に水分が含まれているため、通常の風よりも重く、カイト自身立っているのがやつとの状態でそれ以上何も出来ない。

「ぐう、混成魔法まで使うなんて!!! ここまで出来る奴がなんであんな研究を」

混成魔法とは二つの自然魔法を同時に使う技術であり、かなり高度な魔法である。今オクラが使った魔法は水の魔法と風の魔法を同時に使用し風に水分を含ませて威力を増していた。

「くつくつく。お主にはわかるまい。ロマンというものが!!!」

「何がロマンよ!!! 今よ、エマ!!!」

オクラが発生させた嵐が止むのを待つてミーファが叫んだ。エマはその言葉にすぐさま反応し、オクラに向けて矢を連続で三本放つ。「ばかめ。無駄だと言っておろう。風よ!!!」

放たれた矢の方向を変えるためにオクラは風を発生させたが、三本連続で飛来してくるため、先ほどよりも長く魔法を維持させられている。

「バカはあんたでしょ！！ 魔方阵は描いた本人じゃなくても使えるのよ！！」

ミーファは魔方阵の端に片膝を付くと、杖を付きたて魔法陣に一気に魔力を込めた。

「な、なんじゃと！！ お主、禁呪の言葉を知っておるのかっ！！」「うるさい！！ 余計なことは言わなくてよし！！」

ミーファはオクラに何か口止めをすると、さらに魔方阵に魔力を込め、力ある言葉を発する。

『人の中枢たる魂よ。万物との繋がり今一時忘れ、深遠なる安らぎを求めよ！！』

ミーファの声に反応した魔方阵はさらに輝きを増した。

「しまっ……くかぁー」

魔方阵の中にいたオクラは倒れこむとそのままいびきをかいて寝てしまった。

「……え、終わり？」

その様子を見ていたカイトは拍子抜けしたように声を上げた。

「まあね」

そう言うミーファは胸を張って得意気だ。

「なんだか、最近出番が無いな……」

ミーファとは対照的にカイトはどこことなく寂しげだった。

「さて、ジェイルを起こすとするか」

三人はジェイルに近づくとミーファはジェイルの悪口を言ったり、髪を引っ張ったり、顔を軽く叩いたりするが起きる気配がない。

「やっぱ、簡単には起きないよ」

「まあ、もとより寝起きが悪いしな」

「どうするのだ？ 担いで連れて行くのか」

「いや、起こすよ。危ないから少し離れてくれ」

「危ない？」

「どづいつことだ？」

エマとミーファはカイトの言っていることがわからなかったが、言われたとおりカイトと共にジェイルから少し離れた。

「まあ、慌てるなって」

カイトはジェイルの方を向き直ると、目を閉じた。そして、次に目を開けた瞬間、部屋の空気が一変する。その空気の変化にジェイルは跳ね起きると背中の大剣の抜いた。エマもその気配に気付き、カイトから離れると腰のレイピアに手を掛ける。

唯一ミーファだけは何事かわからずキョトンとしている。

「……カイト？」

エマはカイトに怪訝な表情を向ける。

「わるいわるい、エマも気付けるとは知らなかった」

「何だ今の殺気は？ カイト、おめえか？」

大剣を構えたジェイルは、周りに注意を払い殺気が消えていることを確認すると剣を背中の中の鞘に収めた。

「ああ、お前が起きないんでな。ちょっと荒っぽく起こさせてもらったよ」

「……何が、何なの？」

ミーファは未だ何が起こったのかわかっていない。

「なるほど。カイトの言っていた危なくなったら勝手に起きるといっうのはこういうことか」

「なんだか頭がぼーっとするな。俺、眠らされてたのか？」

ジェイルは三人に寝ぼけた顔で近付いてくる。

「まったく、油断しすぎだ」

「すまねえ。魔法士は苦手だぜ。オクラの野郎は？」

「そこでミーファが眠らせた」

ジェイルはカイトの差した方を見ると、オクラが眠っているのが見えた。ミーファがやったと聞きまた小言を言われるのかとジェイルがミーファの方を見ると、ミーファはエマと話していた。

「ねえ、エマ。何が何なの？ 何で何もしてないのにジェイルは起

きたの？」

一人話しについていけないミーファはエマに助けを求めている。

「気付かなかったのか？ カイトがジェイルに対して殺気を放ったのを？」

「殺気？」

「ああ、その殺気に気付いてジェイルが飛び起きたようだ」

「全然……それって気付けるものなの？」

「我々エルフ族はそういったものには敏感だが、私は寝むつていたら気付かない。人族は気付くのが普通なのかどうかはわからない」「普通じゃないと思うけど……」

ミーファはエマの説明を聞いて何が起こったのかは理解したようだが、驚きと疑惑の表情を浮かべた。

「ミーファ。で、結局オクラは何を研究してたんだ？」

カイトから声を掛けられ、ミーファはそちらを振り向いた。

「え？ ああ。ああ。それが、かなり恐ろしいというか、おぞましい魔法よ」

「マリオネットとスリープじゃねえのか？」

ジェイルもカイトに続く。

「違うよ。というか、マリオネットとスリープはある意味完成された魔法だから、それ自体を今さら研究することは無いの。オクラが研究していたのはマリオネットを応用した魔法よ」

「応用？」

「さっきの本があつた部屋に行こう。そこで説明するよ。……説明するのもおぞましいけど」

ミーファの表情にはまた恐怖の色が浮かんだ。

四人はさっきのオクラが書いたと思われる本が置かれている部屋へと戻ると、ミーファは先ほど手にした本を開いて三人に見せた。

「いや、だから古代文字だから俺たちは読めないんだが……」

「あ、そっか。ここにこの魔法の名前が書いてあるんだけど……」

ミーファは開いたページの最初の方に書いてある太字を指差した。

「なんて書いてあるんだ？」

ミーファは恐怖の表情を浮かべながら、そこに書かれてある文字を呼び上げた。

「……若い女を惚れさせる秘法」

「……………は？」

三人の間の抜けた声が重なる。

「こんな恐ろしい魔法を研究しているなんて……幸い、まだ完成はしていないみたいだけど」

ミーファは自らの肩を抱き、震えている。

「いや、確かに恐ろしい魔法ではあるが……、秘法って……」

「人族の男の頭の中はそれだけなのか？」

「俺に魔力が無いことが残念だ……」

呆れているカイトとエマ、興味を示しているジェイルをよそに、ミーファは声を張り上げる。

「何をのん気なことを言ってるの！！ もしこれが成功したら、この街の若い女の子はみんなオクラの虜になってしまうのよ！！」

「うらやましい限りだ」

「あほう！！」

「痛てえ」

ジェイルの言葉にミーファは思わず足を踏む。

「しかし、ミーファ。お前、魔法士学校でも教わらない禁呪をよく見ただけでわかるな。そういうえげさっき禁呪を使わなかったか？」

「えっ……。いや、えくと、魔法士のたしなみってやつ……」

ミーファは人さし呼びを頬の横に立て、にこやかにごまかそうとするが、額にはびっしり汗を書いている。

「お前……依頼内容を聞いた時から態度がおかしかったが、普段ニヤケながら読んでる魔法書って……」

「ニ、ニヤケながらって失礼な！……だって、合法的な魔法は大体勉強しちゃったし、禁呪っておもしろいんだもん。でも、使ったのは初めてだよ！ 今回はそれで助かったわけだし……」

ミーファはわざとらしくいじけて見せる。

「別にお前がそれで何かしでかすとは思わないから構わんが、ほどほどにしとけよ」

「カイト、甘えよ。ミーファだって年頃の女だぞ。好きな男を虜にする魔法の研……」

-. -. ゴインッ! -. -.

「お前、杖で……」

ミーファがジェイルの頭を杖で殴りつけると、悲鳴も上げられないほど痛かったらしく涙目でうずくまった。ちなみにミーファの杖は金属製の高級品である。

「ま、まあ、とりあえずこれで証拠は見つけたわけだし、それを魔法士協会に持っていけば、オクラは憲兵に捕まってもう研究を続けられないだろ。オクラもしばらくは起きないだろうからとっと魔法士協会に報告しよう」

カイトがジェイルに同情の目を向けながらそう言うと四人は館の外に出た。外は既に夜が明けて明るくなっていたため、その足で魔法士協会へと向かうことにした。

第二話 【11】

「……と、いうこと訳だったんです。それで、その研究の証拠がこれです。他にもオクラの館の地下に魔方陣が刻まれていましたから、それらも証拠になるかと」

魔法士協会に戻った四人は依頼内容を聞いた部屋と同じ部屋に通されると、カイトが理事のリガルにオクラが研究していた内容と、その証拠となる本を手渡した。

「やはり、それ系の魔法であつたか……」

リガルは予想通りと言つた反応を示した。

「それ系？ 知っていたんですか？」

「いや、研究内容自体を知っていたわけではないが、そういった事を研究しておるのではないかとは思つとつたよ」

「??。……ちなみに、差し支えなければオクラが魔法士協会を破門になった理由というのを教えて頂けませんか。たしか依頼内容を聞いたときには『別件で』と言われていたということは、ここで秘密裏にこの研究をしていた訳ではないようですが？」

「うゝむ。魔法士協会の汚点でもあるのだが……。まあ、解決してもらうたし良からう。実はな、オクラの奴めは優秀な男なのだが、エロジジイでな。協会の女の子にはむやみに触るわ、更衣室は覗こうとするわ、拳句の果てには理事の権力を振りかざし協会職員の女性用ローブをやたらと丈の短いもの変えてしまっておつた。それで、あまりにも職員からの苦情が多くて、やむなく破門にしたのじゃ」

「……女の子の敵ね」

ミーファの冷たい声が響く。しかし、その隣りでジェイルはその話真剣に耳を傾けると、部屋の窓から青空に浮かぶ雲を眺め呟いた。

「オクラってなあ、あの歳になつても男のロマンを追いかけていたのか。わかる、わかるぜ。……俺もそうやって歳を取りたいもん……」

…くお！！」

ジェイルはオクラに共感を示し、自らの思いを語ろうとしたがミ
ーファに拳で叩かれ、頭を抱えた。

「これは、人族の特殊な例と考えていいのか？」

「当然だ……ジェイルも含めてな」

さすがのエマも内容が内容だけに人族として一般化することは出
来なかったようだ。

「ふむ。お主達ご苦労であった。約束通り報酬を払おう」

そう言つとリガルはカイトに報酬の金貨六枚を渡した。

「どうも」

カイトはそれを受け取ると握り締めた。リガルは証拠の本をめぐ
り中身を確認すると、一瞬目を見開いた後に予想外な事を口にした。
「うむ。ではこの研究は協会の方で引き継ごう」

「引き継ぐなあ！！！！！！！！ 火よ！！！」

リガルの言葉にミーファはその本を取り上げ空中に投げると火の
魔法で燃やしてしまった。

『あああああつ！！！！ もつたいない！！！！』

リガルとジェイルの叫びが重なる。

「どあほう！！！！」

ミーファの蹴りがリガルとジェイルのみぞおちを正確に捉え、二
人は同じ格好でうずくまった。

「……証拠、いいのか？」

「まあ、魔方阵もあるから捕まえるのには問題ないだろ？ 報酬も
もらったし、宿で山分けするか」

カイトとエマは未だ言い合いをしている三人を残し、魔法士協会
を後にした。

くおしまい

第0話 出会い（ミーファ編） 【01】

ここは都市同盟内の最北にある街コーファン。都市同盟でも数少ない南の海に面していない街である。海に面していないため物流が陸路のみとなり、大量の物資輸送が出来ないためそれ程発展しているわけでは無いが、北のロビエス共和国と都市同盟を繋ぐ街道沿いにあるため人の往来は多く、宿泊拠点にもなっているため貧困の街というわけでもない程の街である。

その街のはずれにあるギルド内で、二人の男女が言い争いをしていた。男はギルドの奥にあるカウンター内にいる体つきの大らかな老の男でこのギルドの店主、女はカウンターを挟んで店主に詰め寄っている十台半ば程の少女である。

「なんで！！ ギルドの仕事は誰でも請け負えるんでしょ！！」

「そりゃそうだが、だからといって失敗することがわかってる奴になんて紹介できるか！ ギルドの仕事は遊びじゃねえんだ。依頼人に対してうちが紹介することになる。失敗することがわかってる者なんて紹介したらうちの信用に関わるだろうが！ だから、こつちの仕事なら紹介するって言ってるじゃねえか」

店主はそう言うと、カウンターのの上に置かれたついさっきその少女に見せたばかりの仕事内容が書かれた紙を指差した。

「だーかーら！！ 迷子の子猫探なんて嫌よ！！ そもそも報酬が銅貨一枚って！！ 子供のお小遣いじゃないんだから！！」

「子供じゃねえか……」

店主が据わった目で女を見ると、女は額に青筋を立てた。

「子供じゃない！！ これでもれっきとした大魔法士よ！！」

「自分で『大』をつけるな……だいたい魔法で攻撃出来るほどの魔力はあるのか？」

「当たり前でしょ！！ これでも魔法学校ではトップクラスの成績だったんだから！！」

「魔法学校ねえ……で、その大魔法士様は実戦の経験はあるのか？」
店主はあからさま馬鹿にした視線を女に送る。

「……」
店主は先ほどから女が請け負わせてくれと言っている仕事内容が書かれた紙を指差した。

「ねええんだな。あのなあ、嬢ちゃん。こういう瘡痍退治つてのは命の危険が伴うんだ。ワンダラー経験も実戦経験も無い奴が請け負うような仕事じゃない。まして嬢ちゃんみないな毛も生えてねえよ。うなガキに任せられるわけ……」

「生えてるもん……！」

女はそう言う顔と顔を真っ赤にして、下を向いた。かっとなり思わず反論してしまったが、言った瞬間に我に返り恥ずかしくなったよ。うだ。

「……そ、そうか。そりゃあ悪かった」

店主も思わぬ反論に後ろにたじろいだ。周りで聞いていたワンダラーと思われる者たちは大笑いしている。

「ま、まあ、どっちにしるこの仕事の仲介はできねえよ。他の仕事にしな。こういう仕事は実戦経験を積んでからにするんだな」

店主はそう言うのと、女の後ろからカウンターに近づいて来た男の二人組に目を移した。

「こりゃあ、ジェルさん。仕事をお探しですかい？」

店主は二人組みの一人、赤い髪を後ろに流し、右の頬に十字の傷があり、背も高く大柄で背には大剣を背負い、いかにも傭兵風の男に声を掛けた。

「ああ、昨日飲み過ぎて懐が寂しくなっちゃった。なんか儲かる仕事はねえか？」

ジェルと呼ばれた男は女の横に立ち、カウンターに片肘を付いた。ジェルの横には薄茶色の髪をした男が立っている。背はジェルより少し低く、ジェル程では無いが体つきは良く腰にはバスタードソードを差しており、ジェルとは違ったタイプの剣士に見

える。その男はジェイルの横にいた女に視線を送ると軽く微笑んだが、女はそれに応えることなく頬を膨らませている。

「ちようどいいのがありますぜ。ちよつと前にこの街の役人から瘴獣退治の仕事が来たんで」

店主は女の前に置かれてあつた紙を取るとジェイルに渡した。

「ちよ、ちよつと！ それは私が！！」

女は非難の声を上げたが、店主に睨まれるとさらに頬を膨らましたが、そのままギルドを出て行ってしまった。

「あの娘は？」

ジェイルの隣にいた男が店主に聞いた。ジェイルは特に興味が無かったのか店主から渡された仕事内容が書かれた紙を見ている。

「あれですか。それが、よくわからないのですが、突然ここにやってきてこの瘴獣退治の仕事をやれせると。うちも別に請け負える仕事に規則を設けてるわけじゃねえが成功する見込みの無い奴には紹介できませんからね。だめだって言ってるのずつとここで粘ってやがって。ほとほと参ってたんでさ」

「あの娘、ワンダラーなのか？ そうは見えないが」

「いや、違いますよ。実戦経験は無いらしいです。魔法が使えないようでしたから、まあ魔法学校でちやほやされて、腕試しでもしたかったんじゃないんですかね。どっちにする実戦の厳しさを知らないガキですよ。まあ、毛は生えているようですが」

店主はそう言うといやらしい笑みを浮かべたが、聞いた男は特に表情を変えることなく女が出て行ったギルドの扉に目を向けた。

「銀貨十枚か……結構いい額だな」

店主と隣の男との会話を聞いていたのかいないのかわからないが、ジェイルが突然口を開く。

「何の瘴獣なんだ？」

隣にいた男もジェイルの持っていた紙を覗き込むと、その問いにジェイルではなく店主が答える。

「近くの洞窟で発生した蛇の瘴獣退治でさ。種類はキルサーペント

のようですが、毒持ちの亜種なんでこの報酬金額のようです。既にこの街の者にも被害にあっている奴がいて急ぎでお願いしたいと「キルサーペントとは蛇の瘴獣で、大半は毒を持っていないが、ごくたまに毒を持ったものが発生する。」

「毒持ちか…… やっかいだな」

「だが、この報酬金はおいしいぜ。二人で分けても一人銀貨五枚だ。当分飲み代には困らねえ。カイト、やるだろ？」

ジェイルは報酬の金額に満面の笑みを浮かべながら、隣にいるカイトと呼ばれた男に向き直った。

「まあ、俺は別に構わないが」

「じゃあ、決まりだな。こいつ受けるぜ」

ジェイルはそう言うと、持っていた紙を店主に手渡した。

「さすが、ジェイルさん。了解しやした。依頼主からは報酬は預かっていますんで、こいつは直接行って頂いてかまいません。よろしくお願いします」

店主はそう言うと、契約書を差し出しジェイルがサインをした。

その後、店主に瘴獣のいる洞窟の詳しい場所を聞くと、二人はギルドを後にした。ギルドを出ると、既に日は大分傾いており二人の影も身長の数倍ほどに伸びている。

「退治は明日だろ？」

カイトは隣にいるジェイルに尋ねる。

「ああ、今からいったんじゃ夜中になっちゃう。明日の朝一で行こうぜ」

二人はギルドのある通りを、拠点にしている安宿に向かって歩き始めた。

「そこのおじさん達……！」

ふいに後ろから先ほどギルドで言い争いをしていた女と思われる声が掛けられた。が、カイトとジェイルはそれに気付かなかったのか、何も反応せずにそのまま歩いている。

「ちょよ、ちょっとおじさん!!」

女はあわてて二人を追うが、二人とも反応を示さない。

「ちょっと!! 聞こえてるんでしょ!!」

かなり接近して声を掛けてもやはり反応しない。歩幅が違うせい
か、女は早足で追いかけている。

「なんで、ん~~~~、お兄さん達待つて!!」

「なんだい、お嬢ちゃん」

ジェイルはいきなり振り向くと、女に声を掛けた。隣のカイトも
立ち止まり、女を見ている。その光景に女は若干引いている。

「……なんて、単純なの」

女は呆れ気味にそう言うと、突然胸を張った。

「さっきの瘴獣退治、受けたんでしょ？ 私、手伝ってあげてもい
いよ！ 報酬は銀貨五枚!!」

「いらん」

ジェイルは即答すると、二人はまた歩き始めた。

「ちょよ、ちょっと、話くらい聞いてよ。見たところ二人とも剣士で
しょ？ 私、魔法士だよ。しかも超優秀な」

カイトは必死で付いてくる女にさすがにかわいそうと思ったのか
足を止めた。ジェイルもそれを見ると面倒くさそうな顔をしたが、
同じく足を止める。

「手伝いはいらねえと言ったろ。しかも、銀貨五枚つて……あほか」

ジェイルは睨むことはなかったが、面倒くさそうな表情のまま再
度拒否した。

「まあ、聞いてよ。私、これでも大魔法士よ！ 自然魔法、陣魔法、
回復魔法なんでも使えるんだから!!」

「で？」

ジェイルは冷たく言い放つ。

「え、でつ……で。す、すごくない？」

ジェイルの思わぬ反応に、女に先ほどまでの勢いが無くなった。

「魔法は全て同じ魔力が元になってんだから、魔力を持ってさえい

れば知ってるかどうかはともかく三つとも使えるのは普通だろ？
だいたい、ワンダラーをやってる魔法士は大抵使える」

ジェイルはさらに冷たく言い放つ。隣のカイトはジェイルのあまりの冷たい態度に苦笑いをしていたが特に口は挟まなかった。

「む。でも、魔力の量は結構あるよ！ 学校じゃ陣魔法の成績だつてトップだったんだから！」

「学校つてお前な……瘡獣退治は遊びじゃねえんだ。一度も実践したことの無いやつなんか役に立つか！」

「それはギルドでも言われた！！ だくから、経験するために私も連れてつて！ 絶対足なんか引つ張んないつて。むしろ、あなた達が私の足を引つ張らないか心配なくらいよ！」

「あほか！ 他をあたれ！」

その後もジェイルと言い合いを続けていると、さすがに見かねたのかカイトが横から二人を手で制した。

「なあ、お嬢さん」

「ミーファ！！」

女は掛けられた声に、ジェイルとの言い争いで熱くなっていたせいもあるだろうが、怒鳴るように名乗ると、カイトは一瞬驚いたが言葉を続けた。

「じゃ、じゃあ、ミーファ。申し訳ないがジェイルの言う通り連れには行けない。確かに君は優秀な魔法士かもしれないが、今回の瘡獣は危険な相手だからやはり経験が無いと厳しい。もしどうしても瘡獣退治がやりたいならい、他のバジリスクとか弱い瘡獣が発生した時にでもした方がいい」

カイトは優しい声で言ったが、ミーファは引き下がる様子が無い。「そんなのいつ発生するかわからないのに待つてられないよ。大丈夫だから連れてつて！」

「そう言われても、命の保証は出来ない」

「命の保証をして欲しいなんて言っていないでしょ！！ 私があなた達の命を保証してあげるわ！！」

ミーファは得意気な顔をして大きく胸を張った。しかし、その態度がジェイルをさらに苛立たせる。

「お前よ、何度も言うが瘡獣退治は遊びじゃねえんだよ。命のやり取りもしたことねえような毛が生えたばかりの小娘が首を突っ込むようなことじゃない!!」

先ほどギルドで聞いたことだが、ジェイルはこういう事はよく覚えてる。ミーファはその言葉に顔を真っ赤に染めて言葉を失っている。年頃の女の子にそれはつらいと思ったのかカイトが割って入った。

「言葉は悪かったが、君のためだ。腕試しがしたいならそのうち機会があるさ」

「腕試しじゃない!!」

ミーファは大声でそう言うと、来た道を帰っていった。

「なんか怒らせてしまったな」

カイトは去っていくミーファの後ろ姿を見ながら呟いた。

「気にすんな。ガキにいちいち気を使ってられるか。それより、めでたく仕事も決まったし今日は有り金全部飲んじゃおうぜ!」

「……お前の飲みに付き合うつろくなことがないんだが」

「いいじゃねえか、付き合え!!」

ジェイルは嫌がるカイトの首を抱えると、宿の近くにある酒場へと連行して行った。

第0話 出会い（ミーファ編） 【02】

「頭が重い……」

「弱え奴だな。あの程度で」

「あの程度つて……外に出たら既に薄明かりが差してたじゃないか」
「ん？ いつも通りだが？」

「そ、そうか……」

ギルドから仕事を請け負った翌日、カイトとジェイルはコーファンの街道を歩いていて。朝早くから瘴獣が発生した洞窟へと行く予定だったが、昨晚に酒場で夜明けまで飲んでしまった為、大分日も高くなつてからの出発になっていた。ほぼ毎日酒場に通っているジェイルは特に普段と変わらないが、たまにしか行かないカイトはつらそうな表情で頭を抑えている。

二人は街の外へと向かって歩いていて、前方の街から外の街道へと続くあたりに人影が見えた。その人影に近づいて行くと、昨日連れて行けと粘っていたミーファが道の真ん中で腕を組んで仁王立ちしている姿だった。腰には何が入っているのかわからないが、小さく淡い紅色に染められた皮袋を下げ、さらに短い魔法土用の杖も差している。

「……ジェイル」

「目を合わすな。通り過ぎるぞ」

二人がミーファにかなり接近すると、ミーファが突然声を上げた。
「遅い！！ どれだけ待たせるつもり！！」

どうやら、昨日カイトとジェイルの会話を聞いていたらしく、朝早くにここを通ると思つてずっと待っていたらしい。しかし、二人はその言葉を無視し、ミーファとは目を合わせないで両側から通り過ぎると街を出た。

「ちよつと……」

ミーファは慌てて追いかける。

「む……」

ミーファは交渉は無理と悟ったのか、二人の後ろを黙って付いていく。しばらく一定の距離を保ったまま洞窟に向かつて三人は歩いていたが、さすがにカイトとジェイルは困った表情をしている。

「……どうするよ？」

ジェイルは手に持っていた仕事用の道具が詰まった大きめ皮袋を肩に背負い直すと、隣を歩くカイトに呟いた。

「あきらめそうに無いな。帰れと言っても帰らないだろうし……連れて行くか」

「本気かよ？」

「仕方無いだろう。このまま付いてこられて、後ろで瘴獣に襲われて怪我でもされたら寝覚めが悪い。だったら近くにいた方が守りやすいだろ？」

「……まあ、寝覚めが悪いのは確かだな。……つたく、厄介な奴に絡まれたぜ」

ジェイルはそう言うのと肩に背負っていた皮袋を地面に置き、後ろを振り向いてミーファを手招きして呼ぶと、ミーファは小走りに二人に近づいて来た。

「連れてってやる」

ジェイルはぶっきらぼうにそう言うと、ミーファはまた得意気な笑みを浮かべる。

「んふふふ。やっと私の必要性に気付いたようね」

「やつぱ、やめねえか？」

ジェイルはカイトに嫌そうな目を向ける。

「そつだな……」

二人は再度歩きはじめそうになったのをミーファが慌てて二人の腕を掴んで食い止めた。

「ちよちよちよ、待って。うそうそ、冗談。お願い、連れてって！」

さすがにこれ以上この態度は得策では無いと感じたのか、ミーフ

アは慌てて訂正する。

「……俺達から離れるなよ」

カイトの言葉にミーファはプライドに触ったのか額がひくついたように見えたが、おとなしく頷いた。

「先に言っておく。報酬は無いからな」

「なんで!! 山分けでしょ!! あなた達が銀貨五枚で私が五枚!!」

ジェイルの言葉にミーファはすかさず抗議の声を上げた。

「ふざけんな!! なんで俺とカイトが二人で五枚なんだよ!!」

おまけで付けてくるお前に報酬なんて渡せるか!!」

「ふざけてんのはそっちでしょ!! 報酬もらえないんじゃないややる意味ないじゃん!!」

「腕試しがしたいだけならそれで別にいいだろうが!!」

「腕試しじゃないって言ってるでしょ!! お金が必要な!!」

もう宿泊費がほとんど無いんだから!!」

「宿泊費? お前、宿に泊まってんのか? だったら家に帰ればいいじゃないか」

「い・や・だ!!」

強面のジェイルにも臆することなく言い合いをするミーファにカイトは関心していたが、きりがなさそうな雰囲気になってきたので二人にまた割って入った。

「二人とも落ち着けよ。日が暮れてしまう。ジェイル、本人も手伝う気はあるようだし、少しくらいはいいんじゃないか?」

「おいおい、本気かよ?」

カイトの言葉にジェイルは信じられないと言う顔をしている。

「ももとの報酬が多いんだ、少しくらいやっても損にはならないだろ?」

「まったく、カイトは甘えよ。しょーがねーな、銀貨一枚なら手を打ってやる」

「はあ? 一枚って!! どんだけケチなの? じゃあ、四枚!

！」

「なんで三人でやるのに足手まといのお前が一番多いんだよ！！
だったら二枚だ！ これ以上は譲れねえ！」

「足手まといじゃないって言うてるでしょ！！ じゃあ、三枚！！
これなら対等でしょ？ 私もこれ以上は譲れない！！」

「対等ってところがおかしいだろうが！！ そもそも俺達はお前を
必要としていない！！」

「またも言い合いが始まってしまったことにカイトは頭を抱えると、
再度調停に乗り出した。

「落ち着けよ。だったらこうしよう。基本的な分け前としてはミー
ファは銀貨二枚。但し、働きによってはもう一枚追加。これでどう
だ？」

「うーむ、もう一つ条件付きだな。まったく役に立たなかつたら報
酬は無しだ」

「んふふふ。私がつたく役に立たないなんてことは有り得ないか
らその条件でいいよ」

「よし、じゃあとりあえずは一緒に仕事をする仲間だ、改めて名乗
らせてもらおうよ。俺はカイトだ」

「……ジェイルだ」

ジェイルは納得していない感じだったが、渋々名乗った。

「私はミーファ・ツ……、ミーファよ！ ミーファでいいよ！」

「よろしくな、ミーファ」

カイトはミーファに手を差し出すと、ミーファもそれを握り返し
た。

「よろしくね、カイト。それと一応、ジェイルも」

カイトには笑顔で挨拶をしたが、ジェイルには据わった目を向け
ると、ジェイルも同じような目で見返した。

「行くぞ！」

ジェイルは地面に置いていた皮袋を背負うと、先に歩き出した。
「やれやれ、大人気ないな」

「本当だよね」

「……ほら、行くぞ」

カイトとミーファもジェイルの後を追った。

「しかし、腕試しじゃないんだとしたらなんで瘡獣退治なんかした
いんだ？」

瘡獣が発生している洞窟へと向かう道すがら、カイトは隣りを歩
くミーファに訪ねた。

「言ったでしょ。宿泊費がもう無いの。今日中にお金を手に入れな
いと宿を追い出されちゃう」

「いや、だったらジェイルの言うとおり家に帰ればいいじゃないか」
カイトの言葉にミーファは睨みつけた。

「いやよ！ 私はもう独立したの！ これからは一人で生きて行く
の！」

「……独立ね。まあ、別にいいが」

カイトは疑惑の眼差しを向けたが、それ以上は聞かなかつた。確
かにミーファくらいの年齢で親元を離れて独立というのはそう珍し
いことではない。しかし、それは宿屋や酒場などで住み込みで働く
という形式が主であり、いきなりワンダラーを始める者はそうはい
ない。

「まあ、銀貨二枚でも手に入れば十日くらいの宿代にはなるだろ」

「え？ なんないよ。二、三日程度でしょ？」

「二、三日程度？ お前、どこに泊まってるんだ？」

ミーファの答えにカイトは驚いている。

「ん？ コーファンの街にあるコンフォートって名前の宿だけど」

「コンフォートっ！！……お前、そこかなりの高級宿じゃないか」

「……ばかじえねえのか？」

黙って聞いていたジェイルもさすがに呆れる。ちなみカイトとジ
ェイルが泊まっているチープルという名の安宿は銀貨二枚あれば余
裕で十日以上泊まれる。

「ばかってどうゆうことよ!」

「なんで金も無いのにそんな高級宿に泊まってるんだ? チープルなら長い事住めるだろうに」

「チープルも一応行っただけど、あそこお風呂が汚い共同浴場しか無いんだもん。そんなところに泊まれないよ」

「風呂つて……そんなところに泊まってるワンダラーなんていないぞ……」

「稼げばいいんでしょう?」

「そんなところの宿泊費が維持できるほど高い報酬の仕事なんてそうは無いだろ?」

「え? そうなの?」

「ミーファ、ひよっとして瘴獣退治以外のワンダラーの仕事もやったこと無いのか?」

「……昨日初めてギルドに行っただけ」

「……」

「……」

カイトとジエイルは呆れて言葉も出ない。

三人は街道をしばらく進んでいくと途中で道をそれ、森の中へと入っていった。ギルドの店主に聞いた場所は、ここからも少し森の奥に入ったところにある切り立った崖に開いている洞窟とのことだった。

第0話 出会い（ミーファ編） 【03】

「これか？」

ジェイルは森を進んだ所にあつた崖に開いている洞窟の前で立ち止まった。

「そのようだな。聞いていた場所とも合う」

「結構大きい洞窟だね」

ジェイルの横にカイトとミーファも並んだ。そして、ジェイルを先頭にその洞窟へと足を踏み入れるとすぐにまたジェイルが足を止めた。

「やっぱり、暗えな。まったく見えねえ」

「ああ、森の上の上に日差しが逆だしな」

洞窟に一步踏み込んだだけでも、中は相当な暗さだった。森の中でただでさえ光が届き難い場所の上に日差しが洞窟のある崖の向こう側になっているため、中にはまったく光が差し込まなかった。しかし、カイトとジェイルの後ろでミーファは二人が見ていないにも関わらず、また得意げに胸を張った。

「お二人さん。お困りのようね。まあ、二人が頼むなら私が明るくしてあげてもいいよ？」

ミーファの恩着せがましい言葉にカイトは頭を抱え、ジェイルは額に青筋を立てる。ジェイルはミーファを無視し、背負っていた革袋から携帯用の松明を取りだし魔石で火を付けるとカイトと共に中へと進んで行ってしまった

「ええ！ ちょっと〜!!」

ミーファは慌てて追い掛ける。

「ねえねえ。待ってよ！ 魔法の明りの方が、見やすいってば！」

先程のミーファの言葉に前の二人は少々いらついていたのか、何も答えず前を進む。ミーファもこのままでは本当に自分が必要とされないかもしれないと言う危機感を感じたのか、少し焦りの色を見

せると腰に差した杖に持ち魔力を集中した。

「光よ！！」

ミーファが魔力を解放すると、杖の先端に取り付けられた魔石がその魔力を吸収して輝きはじめ辺りを照らした。ミーファはそのま杖をかざしながら二人を追いかける。

「見て見て！！ ほら、明るいし広範囲を照らせるでしょ！！」

ミーファの必死のアピールを二人しばらく無視していたが、あまりのしつこさに渋々振り向いた。

「使って欲しいのか？」

ジェイルは冷たく言い放つ。

「んぐ。べ、別に」

ミーファはなんとか強がってそっぽを向いた。

「まあ、せつかく魔法士が一緒にいるんだ。ここはミーファに甘えようぜ。確かに松明の火よりもこっちの明りの方が見やすい」

カイトはミーファから杖を受け取ると、ジェイルに渡した。ミーファは言葉にこそ出さなかった表情はうれしそうだ。

「しょうがねえな」

ジェイルはミーファから杖を受け取ると、松明を消して皮袋にしまつと奥へと歩を進めた。洞窟の中は暗く、魔法の光が届く範囲以外は暗闇に包まれていたため、ジェイルは前方に注意を集中しながら無言で歩を進めたが、ミーファは沈黙が嫌なのかひたすらカイトとたわいもない雑談をしたり、ジェイルの悪口を言っている。カイトも周囲の警戒を怠らなかったが、ミーファの会話に付き合いながら歩を進めた。

- - - ボチャツツ - - -

「きゃあッ！！」

突然ミーファが悲鳴を上げる。洞窟は途中から地面に水が張っており、それに気づかず歩を進めたミーファが驚いたのだ。

「ちよつと言つてよ!!」

「何を？」

先頭に行くジェイルにミーファは抗議の声を上げる。

「水っ!! 濡れちゃうじゃん!! 杖、ジェイルが持つてるからこつちはあんまり見えないんだから!!」

「はあ？ ただの水じゃねえか」

ジェイルは呆れた声で返すと、構わずそのまま進んでいった。

「え、ちよつと。このまま進むの？」

取り合つてくれないジェイルを諦め、今度は後ろを歩くカイトに訪ねる。

「ん？ 他に道はないだろ？ 大して深くもないしな」

張っている水は足首以下の深さしかない。

「ええっ……この靴高かったのに」

ミーファはぶつぶついいながらも、ジェイルが持つ光が届く範囲に入るように早足で着いて行く。しばらく黙つて着いていいいたが、暇になったのかわるを歩くカイトとまた話し始める。

「ねえ、カイト。カイト達はもうどれくらいワンダラーやってるの？」

「俺か？ 俺はまだ最近だ。ジェイルは相当長いらしいが」

「え？ そうなの？ もうずっとやってるのかと思つた。じゃあ、その前は何してたの？」

カイトがベテランのワンダラーに見えたのか、ミーファはかなり意外そうな顔をしている。確かにカイトはその物腰からこの世界に入つて長そうな雰囲気はある。

「……、ミーファは何で家に帰りたくないんだ？」

カイトは質問には答えずに、逆に質問で返す。

「あ、あたし？ あたしは……、別にいいじゃん。それより、質問に答えて無いよ！」

「ミーファが教えたなら教えてやるよ」

「むう……。じゃあ、いいもん」

ミーファは質問に答えないカイトに頬を膨らませると、ジェイルに追いつこうと先を急いだ。その時、前方のジェイルから叫び声上がる。

「バットだ!! 伏せろ!!」

カイトはジェイルの声にすぐさま反応すると、前方にいたミーファの頭を押さえつけ共に伏せた。その瞬間、頭上を何かかなりの速度で通りすぎる。

-. -. バシャッ!! -. -.

「.....わりい」

カイトがミーファを無理やり押さえつけたため、ミーファは伏せたというよりも転び、水浸しになってしまった。ミーファはなんとか起き上がると肩を小刻みに震わせていた。

「.....カイトーッ!!」

ミーファが怒りに震わせながら立ち上がると、後ろからジェイルが走り寄りミーファを壁際にどかした。

「ちょ、ちよつと」

ミーファは抗議したが、ジェイルは無視。苦情を言われなくて済むと思ったのか、カイトもそれには触れずジェイルに尋ねる。

「なんだ、今のは? かなり高速で飛んでったが」

「バットだ。天井にぶら下がってやがった」

ジェイルは笑みをこぼしながら答える。

「バットか。また、この場所にお似合いな瘡獣だな」

バットとは蝙蝠の瘡獣で、もともと蝙蝠の多いこういつた洞窟で発生していることがある。

「ああ、だが儲けた。輝石を売れば収入も増える。今日はついでにせ」

普通、瘡獣に出くわした場合はついてないのだが、ジェイルにとつてはついているようだ。

バットは後方のかなり離れた位置で天井にぶら下がり、赤く光る眼をこちらに向けていた。カイト達からは二つの眼のみが不気味に見える。

「しっかし、狭くてやり難いな。カイト、やれるか」

「ああ」

「え？ なになに？ 瘡獣なの？」

前にいるカイトとジェイルが邪魔で見えないため、ジェイルの横からミーファが顔を覗かせてきた。好奇心からか、既にローブがびしょぬれなことは忘れていているようだ。

「邪魔だ。引っこんでろ」

ジェイルは冷たくそう言うつと後ろに押しつけた。

「ちよつと」

ミーファが抗議の声をあげた瞬間バットが天井を離れ、凄まじい速度で三人に向かってきた。カイトは一步前になると、腰の剣に手を掛ける。そして、バットがカイトの間合いに入った瞬間、剣を抜き放つと一撃でバットの翼の片側を切り落とした。翼を片方失ったバットは壁に激突し、水が張っている地面でバシャバシャともがいた。

「きゃつ。うわ、きもつ」

ミーファがもがくバットに近くになると、バットはさらに激しくもがく。それを、ミーファは興味津々といった表情で眺めていた。

「危ないぞ。どんな攻撃をしているかわからん」

「え、バットつて飛びながら牙で攻撃してくるだけじゃないの？」

「図鑑で読んだよ」

「そういうタイプが多いっただけだ。亜種なんていくらかでも発生する。今回のキルサーペントだって亜種だろ」

「へ」

カイトはミーファを後ろに下がらせると、剣をバットに突き立て止めをさした。バットは消滅し、その場に残された輝石をカイトは拾い上げると自らの革袋に入れる。

「つてか図鑑つて。ミーファ、瘡獣見たことないのか？」

「……………いや、無くも無いかもしれないかな。あは、あはは」

ミーファは訳のわからない曖昧な返事も返すと、とぼけた顔で視線を逸らした。

「ますます使えねえ野郎だな」

ジェイルは呆れた顔で呟いたが、その声にミーファが突っかった。

「ジェイルに言われたくない！！ ジェイルだってカイトにやらせて何もしてないじゃん！！」

「あほか！！ 俺の武器はこういうところでは使い難いだけだ！！」

ジェイルの武器は両手持ち用の大剣で背中に背負っているため、狭い場所では抜剣もしづらい。カイトのバスタードソードも狭い場所では決して扱いやすいわけではないが、腰に下げているため抜剣には問題なく、先程のような芸当が出来る。

「どうだか。怖気づいたんじゃないの？」

「誰がバットごときに怖気づくか！！」

二人の非難の応酬に、カイトは光るミーファの杖をジェイルから奪うと無視して先へと進んだ。ジェイルとミーファは非難し合いながらもそれに続く。

ジェイルとミーファのやり取りを尻目に奥へと進んで行くと、突然辺りの闇が濃くなった。いや、正確に言えば、杖から発せられる光が横の壁に反射しなくなったため、そう思わせた。つまり、光が壁まで届かないほどの空間に出たのだ。それは横だけでなく、上も正面も同じだった。

第0話 出会い(ミーファ編) 【04】

「いそうだな。いい場所だ」

カイトの呟きにジェイルも前が出る。

「ああ、ぶんぶん匂いやがる」

「ん？ 何が？ カイト、おならでもしたの？」

「違う……瘴気の気配が濃くなった。おそらく、キルサーペントがいる」

緊張感の無いミーファの声に調子を崩されながらもカイトが答えた。

「うそ！ どこ？」

ミーファは構えたが、辺りは闇に包まれているだけで何も見えな
い。

「……ほんとにいるの？」

疑惑の目をカイトに向ける。

「多分な。しかし、こう暗くては厄介だな」

「おい、魔女っ子、広範囲を照らせねえのか？」

「誰が魔女っ子だ！！ 大魔法士！！ まったく！！」

「で、照らせないのか？」

「うん。とりあえず、やってみるけど」

ミーファは両腕を前に伸ばすと魔力を集中した。

「光よ！！」

ミーファが叫ぶと、両手の前に光球が現れ辺りを照らす。ミーファはそれを慎重に操ると、ゆっくりと上昇させ身長の数倍くらいまでの高さになったところで、今度は前へと進めていく。カイトはそれを関心しながら見ていたが、ジェイルは納得せずに悪態つく。
「もつと明るく出来ねえのか？ あれじゃ大して見えねえじゃねえか」

ジェイルがミーファに注文すると、光球は消えてしまった。

「ちょっと！！ 話しかけないでよ！！ 魔石無しで魔法を維持するのがどれだけ難しいかわかってるの！！」

「お前の能力が低いだけじゃねえのか？」

ジェイルはわざとらしく言うのと、ミーファが睨みつけた。実際、魔石無しで魔法を長時間維持するのは相当難しい。魔力の消耗もさることながら、維持している間は常に実体をイメージし続けなければならぬため高い集中力が必要である。ジェイルは小馬鹿にしたが、むしろこの若さでこれだけ維持できたことにカイトは関心していた。無論ジェイルもそのことはわかっているが、性格から小馬鹿にせずにはられない。

「ジェ〜イ〜ル〜……あ、いいこと思いついた！！」

何か恨みの籠った声を発していたが、途中でこちらもわざとらしく胸の前で手を打つと、カイトに向き直る。

「カイト！ さっきのバットの輝石貸して」

「輝石？ ああ、構わんが、魔石にするのか？」

「まあね。それだけじゃないけど」

カイトから輝石を受け取ると、ミーファはいたずらっぽく片目をつぶって見せた。

「おい！！ それ使っちゃうのかよ！ もったいねえ！」

「このサイズじゃ売っても大した額じゃないでしょ！」

魔力を吸収する輝石は街の魔石屋で高く売れるが、輝石に魔力を吸収させ魔石と化したものは、使用済み扱いで売れなくなってしまふ。

ミーファは輝石を両手で握ると、魔力を集中する。

「光よ！！」

ミーファが声を発すると今度は先ほどとは違い光球に発現せずに、発せられた魔力は輝石へと吸い込まれ光輝く光の魔石へと変化した。

「おし。カイト、これ砕ける？」

「砕く？」

「そっ」

「あ、ああ」

カイトは意味もわからずミーファから光の魔石を受け取り、代わりに杖をミーファに返すと剣を抜いてその柄で魔石を強く叩き砕いた。隣りではジェイルがぶつぶつ言っている。

カイトはかなり細くなるまで何度か叩いた。

「こんなもんか？」

「おお、いい感じ。貸して」

カイトは砕いた魔石をミーファに返すと、ミーファはそれを両手の手の平にのせた。

「風よ！！」

ミーファを中心に渦を巻いた風が発生し、手の平の上の細かく砕かれた光の魔石を四方へとまき散らす。辺りにちりばめられた魔石の発する光で、かなり広範囲に渡って見通せるようになった。

『おおおっ！』

カイトとジェイルは思わず、感嘆の声を漏らしたがジェイルはすぐさま口をつぐむ。ミーファを見ると、案の定得意満面の笑みで振り向いた。

「んっふっふっふっふ。諸君、あたしの有能さがわかったかな？？」

「くう、油断したぜ！」

「何をだ？……」

ジェイルは思わず感嘆の声を漏らしてしまったことを悔やんだ。

カイトがそれに呆れていると、ふと魔石の光とは違う光を四つほど、視界の端に捉える。

「ジェイル……」

「ああ。二匹はいやがるな。こりゃあ、報奨を釣りあげねえといけねえ」

ジェイルも既にそちらに視線を向けている。

「複数も込みだからあの金額なんじゃないのか？　そもそも何匹なんて指定も無かったろ？」

「複数とも書いてなかったから交渉の余地はある！」

「ま、まあ、好きにしろよ。で、どうする？」

「俺とお前で一匹づつでいいんじゃないかねえか？」

カイトの問いに背中の大剣を抜きながらジェイルは答えた。

「それは構わないが……」

カイトは後ろにいる、聞き耳を立てながら未だ得意げな顔をしているミーファに視線を向けると、ミーファが口を開いた。

「ちょい待ち、おじ、お兄さん方。大事な大戦力の主役を忘れちゃいませんか？」

「俺のことか？ それなら問題無い。ちゃんと勘定に入ってる」

ジェイルは事も無げにそう言うと、ミーファの額に青筋が立つ。

その間にも、二匹のキルサーペントはこちらの様子を伺いながらジリジリと間合いを詰めてきていた。

「私の実力も知らないくせに……！ 見てなつつつ ちょ、変態！」

ミーファが話している最中に突然ジェイルがミーファを抱きかかえると、横に飛んだ。カイトは逆側に飛んでいる。ジェイル達が着地すると同時に三人がいた場所の地面の石が弾け飛んだ。

「な、何!？」

ミーファはジェイルに腰を片手で抱えあげられた状態でジェイルの頭にしがみつきながら、何が起こったのかわからず弾けた場所を見つめている。

「まったく、敵が目の前にいるのに油断してんじゃないやねえよ」

「むぐつ。ちょっとよそ見しただけ!! で、何が起こったの?」

「尻尾でなぎ払ったんだよ」

既にキルサーペント達はミーファが作り出した明るい地面の領域まで侵入していた。尻尾でなぎ払った方は蛇を単純に人の倍程の長さで太さにしたような姿をしており、もう一匹はそれよりも小ぶりだったが、その頭は平たく横に長くなっただけで菱形のような形をし

ており、尻尾の先には鋭い棘がついていてこちらが毒持ちのキルサーペントのようだった。

「ジェイル！！ こっちは引き受ける。そっちはまかせたぞ！」

「ああ」

カイトは自分に近いところにいた毒持ちの方と対峙しながらジェイルに叫ぶ。

「さてと、とつとと片付けるか」

「け、結構大きいね……」

ミーファは近づきつつあるキルサーペントを見ながら呟いた。

「ん？ そうか？ キルサーペントってこんなもんだぞ。びびったのか？」

ミーファを地面に下ろすと、ミーファはキルサーペントを見上げながら唾を飲み込んだ。

「むっ、誰が！！」

ミーファは強がると杖を構えたが、ジェイルが肩を掴んで下がらせる。

「そこで見てる」

「ちよつと！！」

ジェイルはミーファの苦情に耳を貸さず、大剣を振り上げてキルサーペントに向かって突っ込んでいく。それに対しキルサーペントは頭を持ち上げ、一瞬反るような体勢になると大きな口を開き霧のようなものを吐き出した。ジェイルはとっさにそれをかわすが、臭いからその霧の正体に気づくと後ろに下がる。

「やべっ」

「な、何？」

「毒霧だ！ こいつも毒持ちだ」

ミーファの問いにジェイルは振り向かず答える。

「毒霧？」

「まじいな。充滿させられると逃げ場を失う」

地上などの広い空間であれば直撃しなければ大した攻撃ではない

が、ここのような密閉された洞窟内では霧は脅威となる。

「どうすつかな」

ジェイルは対策を考えていると、後ろからミーファがジェイルの腕を掴み後ろに下がらせる。

「そこで見てて」

先ほどジェイルにやられたことを今度はミーファが得意げな顔でやり返す。

「お、おい、それ以上いくと毒霧の中に入るぞ」

ジェイルの言うとおり、風の無い洞窟内ではキルサーペントが吐き出した毒霧はそのままその場所に漂っていた。キルサーペントはその毒霧の向こう側で二人の様子を伺っている。

「毒霧といっても、霧は霧。ただの水蒸気でしょ」

そう言うと、ミーファは杖を毒霧に向けた。

「火よー!!」

ミーファが声を発すると、杖から大きな炎が噴出し毒霧に直撃する。すると、毒霧は炎によって熱せられ互いに消滅した。

「お、おお」

ジェイルはまたも思わず声を漏らした。

「ジェイルはそこでおとなしく私の戦いっぷりでも見学してて」

「……」

ミーファの言葉にジェイルは額に青筋を立てながら、とりあえずは見学を決め込むことにしたのか、大剣を鞘に収めると手頃な岩に腰掛けた。

「お手並み拝見といこうじゃねえか」

キルサーペントはミーファを中心に円を描くように移動しながら、牙をむき出し威嚇を繰り返している。ミーファも注意深く相手を見ながら相手の尻尾の間合いに入らないように距離をとっていた。

しばらくそれが続いた後、先にミーファが動く。

「火よ!!!」

先ほどよりも大きな炎がキルサーペントに襲い掛かる。しかし、キルサーペントはそれをかわすことなく

またも頭を反らすと、こちらも先ほどよりも大量に毒霧を吐き出し炎を相殺した。

「にゃ、にゃにおう!!!」

「……まあ、毒霧を火で相殺出来るってことは、逆を言えば火は毒霧で相殺できるってことだからな」

「ぬぐぐぐ。瘡獣のくせに!!!」

ジェイルの小ばかにしたような声にミーファは悔しそうだ。

「次の手はあんのか？ 無いなら代わるか？」

「まだあるもん!!!」

ミーファは叫ぶと再度杖を構える。

「水よ!!!」

今度はキルサーペントの頭上に大量の水が出現すると、一気にキルサーペントに浴びせかけた。まともにくらったキルサーペントはびしょ濡れになる。

「……………で？」

ジェイルの冷たい言葉がミーファに刺さる。

「い、いや効くかな」と

キルサーペントは突然のことに一瞬怯んだが、犬のように体を震わせ水を払うと再度ミーファを威嚇する。

「アホか。濡れさせるほどの水ならともかく、元の蛇が水に弱くな

いのにキルサーペントが水に弱いわけないだろ」

「むむむう」

「なんかもつところ、風とかでズバっと切り裂いたりできねえのか？」

「砂とか何かを巻き込むならともかく、風だけでそんなこと出来る分けないでしょ！！ しかもあいつの鱗硬そう出し、砂くらいじゃ切れないよ……」

「じゃあ、選手交代だな」

ジェイルは立ち上がると、ミーファの隣に立った。

「あつちもそろそろケリが着きそうだ。こつちもいそがねえとな」

ジェイルが視線を送った先ではカイトが毒針を持つキルサーペント相手に戦いを繰り広げている。既にカイトによって、毒針は折られ仕上げに掛かっているようだった。

「すごつ。一人で……」

「いや、別にこつちも一人でも構わんのだが……」

「むつ。じゃあ、毒霧どうすんの！！」

「ぐつ。ちつ、しょうがねえお前にも手伝わせてやる」

ジェイルは恩着せがましく言ったが、実際キルサーペント自体はともかく毒霧は厄介だった。

「しょうがない、手伝ってやるって、うわぁ！！」

ミーファも負けじと恩着せがましく返そうとするが、その瞬間にまたも今度はジェイルはミーファの腰紐をつかむと、後ろに飛ぶ。

……ドゴツ！！……

先程と同じくキルサーペントの尻尾が二人がいた地面を叩く。

「だから油断するなつての！」

「ジェイルが変なこと言うからでしょ！！ って下ろして！！」

ミーファは腰紐を掴まれたため、ジェイルに荷物のように持たれている。ジェイルは手を離すとミーファが地面に落ちた。

「痛っ!! ちよつと、優しさはないの? 絶対モテないでしょ?」

「どあほう! モテモテだ!!」

「うそつくな!!」

よくわからない二人のやり取りの最中に、逆に場違いと化したキルサーペントの威嚇で二人とも我に返る。

「で、どうするの?」

ミーファがジェイルに問いかけた。

「そうだな。火でやつを攻撃してろ」

「それだけ? でも、相殺されちゃうよ」

「それでいい。相殺してくるってことは火に弱いことは間違いない。だから無視出来ないだろ? その隙に俺が叩つ切る」

「ええっ!! ジェイルがおいしいところ取りなの!!」

「……じゃあ、他に案は?」

「ジェイルが毒に犯されるのを覚悟で突っ込んでっつて、あたしがその隙に燃やす」

「……御免ごうむる。行くぞ!! あまり近づき過ぎるなよ!!」

「あ、ずるい!!」

ミーファの本気が冗談かわからない提案を却下すると、ジェイルはキルサーペントの側面に回りこむ。ミーファはそれを非難しながらも杖を構えると、立て続けに火の魔法をキルサーペントに向けて放った。それに対し、キルサーペントも相殺すべく毒霧を吹きかけている。

ジェイルは気づかれないように間合いを詰め寄りながら隙を伺う。しばらくその状態が続いた後、ミーファが大きめの炎を放ち、キルサーペントも負けじと大量の毒霧を吐き出した瞬間、ジェイルは大剣を振り上げると大きく飛び上がった。

「おりゃあっ!!」

……ズバツ!!……

ジェイルが大剣を振り下ろすと、一撃でキルサーペントの首を撥ね飛ばす。キルサーペントの持ち上げていた上体は力なく崩れ、その体は撥ねられた首と共に消滅し、その後に輝石を残した。ジェイルはそれを拾い上げるとミーファに見せながら近づいた。

「ちよろいね」

「ハア、ハア、だ、誰のおかげかな？ ハア…ハア…」

さすがに魔法の連発はきつかったのか肩で息をしながら腕をだらしと下げジェイルを見返す。しかし、ジェイルはそれには答えず、かわりにミーファの頭を軽く二度叩くとミーファの横を通り過ぎた。

「ちよつとお！！」

ミーファは振り向くと、後ろに既に戦いを終えて見物していたカイトがいた。

「そつちは随分てこずつたようだな」

カイトの手にも輝石が握られている。

「ちよつとな。毒霧吐きやがった」

「毒霧！？ そいつは厄介だったな。ミーファは大活躍なようだったじゃないか？」

ジェイルの横で汗だくで未だ呼吸の荒いミーファに微笑む。

「でしょ！！ やっぱりカイトはよく見てる！！」

「まあまあだな。とつとと帰ろうぜ」

ジェイルはそう言うと、出口へと向かって行ってしまった。

「まあまあ、ね」

ジェイルが先程までの態度とは違うと思ったのか、カイトが笑みを浮かべながらジェイルの後に続く、その隣ではミーファが納得していない感じだった。

「ちよつと、どう思う？」

「ん？ まあ、ジェイルだからな。素直にお礼とか感謝が言えるやつじゃない」

「納得いかない！」

ミーファはジェイルに走りよると、言い合いをしながら出口へと向かっていった。

「ん〜!! やっぱ地上はいいねえ!!」

洞窟を出ると、日はだいぶ傾いていたがまだ沈むまでには数刻はありそうな時間帯になっていた。ミーファ伸びをすると淀んだ洞窟の空気を肺から追い出すように深呼吸を始めた。

「とつとと街に戻るぞ。日が暮れちまう」

「ちよつと待つて!!」

既に街へと歩き始めていたカイトとジェイルを追いかけると三人は共に歩き始めた。道中ミーファは自らの活躍をカイトに語っていたが、ジェイルは特に否定もせず尾ひれがついたと思われる部分だけをつ込んでいた。

三人は街に戻るとすぐにギルドへと向かい完了報告と証拠の輝石を店主に渡した。

「さすがに早い仕事ですな。確かに確認しました」

そういうと契約書の確認欄に店主が署名し仕事が完了した。店主が顔を上げるとジェイルの後ろにいたミーファに気づき嫌そうな顔を浮かべる。ミーファはそれを見ると舌を出してやり返した。

「小娘!! またきやがったのか!! お前に出来る瘡獣退治なんかねえぞ!!」

ミーファの態度が気に障ったのか店主は声を張り上げる。ミーファはジェイルの前に出ると、カウンターに置かれた輝石を指差しこちらも声を張り上げた。

「あたしも瘡獣退治に参加したの!!」

「……………へ?」

店主は間の抜けた声を出すと、ジェイルを見た。

「……………まあ、成り行きでな。それより報酬は?」

「え、ああ、すいやせん。すぐに」

店主は訳が分からないといった感じで一度その場を離れると、報酬の入った皮袋を持って再度現れた。ジェイルはそれを受け取り中を確認すると受け取りのサインをして三人はギルドを後にする。

「じゃあ、分けるぞ」

ジェイルはそう言うはずカイトに、そしてミーファが遠慮なく突き出した手に報酬を乗せた。

「ちよつと、と、と、あれ？ いいの？」

ミーファは多くても二枚しか貰えないと思って、受け取った直後に文句を言おうとしたが手の上に銀貨が三枚乗っているを見て拍子抜けしたようだ。

「まあな、文句はねえだろ？」

「え、いや、あ、う、うん」

ミーファは勢いを削がれ、素直に頷いた。ジェイルの隣ではカイトが笑いを堪えている。

「じゃあな」

ジェイルはそう言うカイトと共に、ミーファに背を向け拠点の安宿へと向かって歩き出す。

「え、ちよつと待ってよ。どこ行くの？」

「あん？ どこって、宿に戻るんだよ」

ジェイル達は足を止めると振り向きながら答えた。

「ねえ、あたしも仲間に入れてよ！」

「はあ？ 何言ってるんだ？」

「おいおい」

ミーファの思わぬ提案にジェイルとカイトは呆気に取られた。「だって、正直今回の仕事で一人で瘡獣退治は難しいっていうのはよく分かったし、それに二人とも結構強いみたいだから」

「結構……」

「……強い」

ジェイルとカイトは呆れた顔でミーファを見る。それでもミーファは話を続ける。

「それに、二人だって魔法士が仲間にしたほうがいいでしょ？ 絶対相手まといにはならないよ？」

「……………どうするよ？」

ジェイルは助けを求めるようにカイトを見る。

「まあ、魔法士としての実力はそこそこあるようだが、しかし……」

「そこそこ……………」

カイトの言葉に今度はミーファが額に青筋を立てるが、状況を考えてさすがに文句は言わない。

「そもそもミーファ。家に帰らなくていいの？」

「いいの！！ 私は独り立ちしたの！！ そんなこと言っなら二人だって家に帰らなくていいの？」

家にことには触れられたくないのか、ミーファはむきになって声を上げる。

「俺はそもそも家なんかねえよ」

「んぐ……………」

ジェイルの答えにミーファは言葉につまりカイトを見た。カイトは渋い顔をしている。

「……………ジェイル、任せるよ」

カイトとしても触れられたくないことだったのか、ばつの悪い顔を見るとジェイルに投げた。

「マジかよ。うゝむ、確かに魔法士がいると仕事の幅が広がるし、仲間に欲しいところではあるんだが……………しかしなあ」

ジェイルも本気で困っているようだ。ワンダラーの仕事をする上で魔法士がいるのといないのでは、引き受けられる仕事にもかなりの違いが出てくる。ジェイルとしても仲間に欲しいところでもあり、またミーファの魔法はジェイルも認めるところではあったが、それでもミーファは若すぎ、経験が不足しているところが気になるようだった。

ジェイルが迷っているとみたミーファは、ここぞとばかりにさらに押しを強める。

「絶対に足手まといにはならないよ!! 今日だってちゃんと活躍したでしょ!! 他にもいろいろ出来るんだから!!」

ミーファはジェイルの正面に立ち腰に手を当て背伸びをしてジェイルに迫る。

「……わかった、わかった。そのかわり、仕事の邪魔になると思ったら解消するからな」

ジェイルはミーファの押しに降参するように両手を挙げると、ミーファの仲間入りを承諾した。

「やったっつ!! 絶対足手まといにならないって。まだまだ、陣魔法とかもいろいろ使えるんだから!!」

ミーファは飛び跳ねて喜ぶと、片目を瞑った。

「まったく……。ま、これからは仲間だ。よろしくな、ミーファ」
ジェイルは半ば呆れながらも、自ら手を出し握手を求めた。ミーファも素直にその手を握り返す。

「よろしくね、ジェイル!」
続いて手を差し出してきたカイトの手もミーファはしっかりと握り返した。

「よろしくな」
「うん。カイトもよろしく!!」

カイトは心配な面もあるようだったが、ミーファのうれしそうな顔を見ると特に何も言わなかった。

「で、これからどうするの?」
「どつつて、別にどうもしねえよ。余った銀貨でカイトと飲みに行くくらいだ」

「えっ、聞いてないが……まさか、銀貨一枚分飲むつもりじゃないだろうな?」

「昨夜、ジェイルの飲みにつき合わせれたてひどい目にあったカイトは嫌そうだ。」

「飲むに決まってるじゃねえか。余った金は使っちまうに限る」
「マジかよ……」

カイトは心底嫌そうに肩を落とす。ちなみに一晩で銀貨一枚分飲むのは二人でも相当至難の業である。

「え、飲み屋？ あたしやだ！！ 食事にしようよ！！」
「賛成」

カイトがすかさず同意する。

「いや、別にお前は来なくても構わないんだが…」

「なんで！！ 余った銀貨だって私も使う権利あるでしょ！！」

「ぐぐつ、じゃあ、どこがいいんだよ」

ミーファの抗議にジェルは反論出来ずに仕方なく同意する。

「コンフォートの一階にお洒落な食堂があるからそこにしようよ！
銀貨一枚あれば三人でもいいコース料理が食べられるよ！！」

「おお、いいな」

カイトもジェルの飲みにつき合うくらいならミーファの案に賛成のようだ。しかし、食べ物よりも酒が飲みたいジェルは嫌そうだったが、カイトも同意してしまったため渋々了承し、三人はコンフォートへと歩みを進めた。

「そうだ、二人ともお金が入ったんだから、コンフォートに引越してきなよ。近くにいたほうがいいでしょ？」

「ふざけんなつ。あんな高いとこ住めるか！！ お前がこつちに引越して来い！！」

「やだよ、あんな共同浴場しかないところ！！」

ミーファの提案をジェルは拒否し、今度はさすがにカイトもジェルと同意見のようだ。

「さすがにあそこは無理だよミーファ。どうしてもあそこがいいなら、しばらくは別々の宿に泊まろう」

「え、そんなの仲間っぽくないじゃん」

ミーファはワンダラーのパーティを、ひと昔前に多くいた冒険者のパーティと混同しているようだったが、拠点を構えて仕事をするワンダラーにとっては同じ街にさえすれば、特に同じ場所に住んでいなくても支障は無い。それでも、何か納得がいかないのか、ミ

「ミアは地面の石を蹴りながらぶつぶつ言っていると突然顔を上げる。

「そつだ。次の仕事はいつ？」

「あん？ まあ、明日もギルドには行ってみるが、とりあえずは懐も暖かいし、適当な仕事が見つかるまでのんびりだな」

「ええっ！ あたし、2、3日しか持たないんだけど……」

「いや、だから引越せつての……。だいたい、今回みたいな高給な仕事は月に一回もねえからな」

ジェイルは呆れている。カイトもそれに続く。

「ミアミア、断言するがワンダラーの仕事じゃコンフォートに住み続けるのは不可能だぞ」

「え、ワンダラーって儲かないんだねえ……」

「コンフォートに住み続けられる仕事なんてねえよ……」

ジェイルはため息をつきながら呟いた。

「むう、じゃあせめて部屋にお風呂がついてるところを拠点にしようよ」

「部屋に風呂がある安宿なんてこの街には無いよ」

「う、ん、じゃあある街に引越そう……」

「はあ？」

ジェイルとカイトの声が重なる。

「あほか、簡単に言うな。拠点の移動には金も掛かるし、この街の飲み屋のツケも精算しなきゃならねえし、口説いてる最中の女だつて諦めなきゃならねえんだぞ……」

後半は完全にジェイルの都合だったが、拠点の移動には移動中の食費や荷物を運ぶための馬代や馬車代で資金が必要なのは確かである。カイトは同じ理由とは思われなくなかったようだが、とりあえずジェイル側と同意見のようだった。

「だって、せつかくワンダラーやってるんだし、いろいろな街を見て回りたいじゃん。」

やはり冒険者と勘違いしているミアミアはそれでも食いで下がる。

「いや、だから、ワンダラーってそういうもんじゃないんだが……」
カイトが呟いたが、ミーファの耳には入らない。

三人はそのままコンフォートの食堂で食事の最中も延々とこの会話を繰り返したが、結局ミーファに押し切られ、数日後にクレスト方面へと移動していったとき。

くおしまいく

第三話 【1】

「おもしろそうなの無いね」

都市同盟の街クレストのギルド内にある円卓に座るミーファが呟く。

「……おもしろそうかどうかで探すな。稼げそうなのを探せ」

正面に座るジェイルは仕事内容が書かれた資料、通称『飯の種』から視線を外すことなく答える。

今日はめずらしく、ジェイルとミーファの二人でギルドへと仕事探しに来ていた。普段ミーファはギルドの雰囲気嫌いだと言ってきたことはほとんど無いが、ここ数日仕事もなく暇を持て余したためにジェイルに着いてきていた。いつもジェイルと共に来るカイトは所用と伝言し朝からどこかに行っており、エマはいつも通り拠点の安宿に残っている。

「いいじゃん別に。お金に困ってるわけじゃないし、たまには楽しい仕事しても」

少し前に行った人物調査の仕事がかなりの高報酬だったため、めずらしく懐が暖かい状況が続いている。それでも、そろそろ次の仕事をと思っていたのと、ミーファの暇発言によりここに来ていた。

「アホか。遊びでやってるんじゃないぞ。まじめに探せ！」

ジェイルはやはり顔を上げず、真剣な表情で『飯の種』をめくる。「むう」。じゃあ、ジェイルはどんなの探してんの？

「移動が少なく、楽で、報酬が高くて、依頼人が若い美女で、後はオプシオンで酒の飲み放題がついてるような仕事」

「……どこがまじめなの？」

ミーファは大きな目を極限まで細めてジト目でジェイルを睨んだ。「目標を高く設定しているだけだ。そこから妥協出来るところを削っていくんだよ」

「妥協ってどの辺を？」

「そうだな。移動距離、最悪楽でなくてもいいさ」

「……そこ？ 若い美女は残るんだ？」

「最近はおっさんの相手ばかりだったからな。そこは外せねえ」
「自分もおっさんじゃん」

……ピシッ ……

ミーファの言葉にジェイルの額に青筋が立つ。

「ごちゃごちゃ言っていないで探せ！」

「まったく……、若い美女なら目の前にいるでしょうが……」

ミーファの呟きに、ジェイルはわざとらしくあたりを見回す。
「どこだ？」

……ピシッ ……

今度はミーファの額に青筋が立つ。

二人は互いの間に無意味に張りつめた緊張感を漂わせながら『飯の種』をめくっていると、ミーファが一枚の紙に目を止め熟読し始めた。

「ねえ、ジェイル。これは？ おもしろそうなのに、かなりの高給になるかも！」

「どれ？」

ジェイルはミーファが差し出した紙を覗き込んだ。

「遺跡調査の護衛い？ しかも、銀貨四枚ってどこが高給だよ！」

「うちは四人いるんだぞ。一人一枚じゃ小遣い程度じゃねえか」

ジェイルは呆れた顔を見ると、パタパタと手を振った。

「チツチツ。ちゃんとここ読んで」

ミーファは人差し指を上げ横に振ると、その指で紙の下の方を指差して読み上げる。

「ここ、ここ。『尚、財宝の類が発見された場合は、報酬としてそ

の二割程を進呈する』。すごくない!!」

「……却下」

テンションが激しく高まっているミーファとは対照的に、冷めた目でそれを見ていたジェイルは紙を指で弾いてミーファに返した。

「なんで!?! トレジャーハントだよ、トレジャーハント!! 宝探しだよ?」

ミーファはジェイルの態度に、心底以外そうだ。

「あんな、俺も若い頃はこういうのに食いついて何度かやったことがあるが、十中八九何も無いぞ」

「え、そうなの? なんで?」

「大抵の遺跡は何年も前に調査済みだったり、既に盗掘されていたり、ひどいのだと遺跡の情報を元にその場所に行ったが、情報自体がセネタでそもそも何も無かったりするのがオチだ」

ジェイルは既にこの話には興味無さそうに自分の持っていた『飯の種』に視線を戻しながら答えた。

「え、でも遺跡の名前が書いてあるし、何も無いってことはないと思うんだけど?」

「名前が付いている時点で既に調査済みじゃねえか。ダメだ」

「夢が無いな。何か新情報を掴んだのかもしれないじゃん!!」

「ないない」

ジェイルは手を振ると、ミーファは口を膨らませた。

「むう、ちよつとまって! あたしたちパーティ組んでるんだからジェイル一人で決めるのおかしくない?」

「むぐつ。じゃあ、どうすんだよ」

「カイトとエマの意見も聞いて決めよう!」

「はあ? 宿に戻って聞くのか? めんどくせえな」

「ダメ!!」

ミーファが一向に引きそうに無いため、ジェイルは諦め顔で口を開く。

「わかった、わかった。ただし、経験者の俺の意見は尊重してもら

うぞ。賛成反対が同数だった場合はこの件は無しだ」

「いいよ、絶対二人は行くって言うてくれるはず!!」

ジェイルとミーファは『飯の種』を店主に返すとギルドを後にした。

・・・ バタンツ ・・・

「エマ!!」

ミーファは宿の部屋に入り呼びかけると、いつも通り窓辺で椅子に座り外の通りを眺めていたエマがミーファの方を振り向いた。

「宝探し行きたいでしょ!!」

エマの前にあったテーブルに両手を付くと単刀直入にエマに詰め寄る。

「宝探し? ……特に宝には興味は無いが」

ミーファの迫力にエマは一瞬驚いたが、あまり表情を変えることなく答えると、ミーファはテーブルの上につ伏した。

「わっはははは。これで二票で同数以上が決定だ! ってことで無しだ! そもそも、仕事内容は宝探しじゃなくて、遺跡調査の護衛だろうが!」

「遺跡?」

エマには何のことなのかまったくわからないようだ。

「うん。遺跡調査の護衛の仕事があったの。で、宝が見つかったら二割くれるって」

ミーファはテーブルに突っ伏したまま、か細い声で答えた。

「人族の遺跡か。それは興味があるな。見てみたい」

・・・ ガバツ ・・・

エマの言葉にミーファが勢いよく起き上がる。

「でしょー!!」

「へっ?」

復活を遂げたミーファの横でジェイルは間の抜けた声を出した。

「じゃあ、行くよね?」

「うむ、私は構わないぞ」

エマの言葉にジェイルは片膝を付くと、ミーファはそのジェイルの顔の正面に指を二本立てて見せ付ける。

「んっふっふっふ。二票獲得!!」

その指がゆっくりと開きVサインに変わったところで、ジェイルが立ち上がった。

「まだ、カイトがいる!! あいつは大丈夫だ」

ジェイルはくやしそうな表情を浮かべると、カイトが常識的判断を下すことを祈った。

しばらくカイトを待ちながら、ジェイルとミーファは言い合いを続け、エマはそんな二人を眺めながらミーファの入れた紅茶をすすっている。また部屋の扉が開きカイトが入ってきた。

「ただいま。ああ、二人とも帰ってきてたのか。なんかいいのあったか?」

カイトが部屋の中でミーファとジェイルを見つけると声を掛けながら三人がいるテーブルへと近寄るが、辿り着く前にジェイルとミーファが立ち上がりカイトに詰め寄る。

「カイト!! 宝探し行くでしょー!!」

「遺跡調査のおまけだぞ!! そんなもんいかねえだろ!!」

二人の迫力にカイトは二歩ほど後ずさる。

「な、なんの話だ?」

カイトもエマと同じくまったく意味がわからなかったが、ミーファが説明を加える。

「宝探しの仕事があったの!! しかも、なんとお宝の二割を進呈してくれるんだよ!!」

「宝探しじゃねえ！！ 遺跡調査の護衛だ！！ しかも、二割つてのは見つかったら話だからな！」

カイトはさらに一步後ずさる。

「つ、つまり、遺跡調査の護衛の仕事があつて、何か見つかったら報酬として二割くれるということか？」

「約束された報酬は銀貨四枚だ！！」

ジェイルが補足する。

「よ、四枚？」

カイトも報酬が少ないと感じたようだ。

「そうだ！！ 宝なんてあると思うのか？」

「え？ 宝？ いや、それは……」

カイトがジェイルの勢いに押されていると、ミーファが割って入りジェイルの鼻先に指を突きつけた。

「ジェイル、これだから歳とつて夢を無くした男は…… そういうところがおっさんのの！！ カイトはどうなの！！」

ミーファは背伸びをしてカイトに詰め寄る。

「……お、おっさん。……ジェイル、俺も宝はあると思うぞ」

カイトは真顔で答える。

「てんめえ、おっさんと思われたくないだけだろ……」

ジェイルは歯を食いしばりながらカイトを睨んだが、その隣でミーファが胸を張った得意のポーズで勝ち誇っている。

「これで三票！！ 決定ね！」

ジェイルは肩を落とした。

「カイト、おめえは正しい判断をすと思つてたんだが……」

「え？ ま、まあ、エマも賛成のようだし、たまにはこういうのもいいんじゃないか？ ……は、はは」

カイトもジェイルの意見に賛成だったのか、後ろめたさを感じる。ジェイルから視線を逸らした。

「じゃあ、あたしギルドにいつて契約してくるね！！」

ミーファはそう言うと、部屋を出てギルドへと走って行ってしま

った。

「めずらしいな、自分からギルドに行くなんて」

「ぜってえ、徒労に終わるぞ……」

ジェイルは疲れた表情でミーファが出て行った扉を眺めた。

「ふむ。ミーファの入れてくるれる紅茶はいい味わいだな。教わり
たいものだ」

エマの場違いな呟きにジェイルは肩を落とした。

第三話 【2】

翌日の夕方、四人は昨日ギルドの店主から地図をもらったミーファの案内で、依頼主の家へと向かっていた。エマはいつも通り頭にバンダナを結び、エルフ族特有の長い耳を隠している。ドワーフ族とは違い都市同盟ではまずエルフ族を街中で見かけることはないため、外を歩くときはこうしていないと注目を集めて大変なことになる。

「あ、ここ、ここ」

街の中心部から大分離れ家もまばらになってきたあたりで、その内の一軒をミーファが指で指した。

「なんか、普通の家だね」

家を見たミーファがぼつりと呟く。その家は木造平屋の一軒家で、特に狭いというわけでは無かったが裕福そうにも見えなかった。

「銀貨四枚だからな」

ジェイルが呟く。未だ納得していないようだ。ミーファはそれを無視すると入り口の扉の前に立ち扉を叩いた。

「すいませ〜ん！！ ギルドから紹介されて来ましたワンダラーの者です！！」

そのまましばらく待っていると、中から年のころは六十半ば、灰色のローブを纏い大分白髪が混じった髪を短く刈り、歳相応の皺を顔に刻み込んだ男が扉を開ける。

「おお、待つておっ……た、よ？ ……ああ、護衛は後ろの二人か。お主達は？ ギルドの者か？」

扉を開けた男は、目の前に立っていたミーファを見ると護衛するワンダラーには見えなかったのか一瞬眉間に皺を寄せたが、後ろに立っていたジェイルとカイトを見てミーファとエマはギルドの人間でここまで案内してきたと思ったようだ。

「違います！！ 私達もワンダラーです！！」

ミーファは自分とエマを指し声を張る。

「お主達も!? ま、まあ、良いが」

どう見ても少女のミーファと、華奢で二十台を少し過ぎたばかりに見えるエマに疑問に思ったようだが、屈強そうなジェイルとカイトを見て安心したのか、特にそれ以上は触れなかった。

ちなみに、エマはそう見えるだけで実際は『不老なるエルフ族』であり、実年齢はその男よりもはるかに上である。

「しかし、ということは四人か……報酬は銀貨四枚なんじゃが?」
「それは問題ありません」

男が予想したよりも人数が多かったのか報酬が銀貨四枚であることを心配したようだが、それにミーファが答え男も安心する。後ろではジェイルが「おおありだよ」とこぼしている。

「じゃあ、とりあえず中へ」

男はそう言うのと四人を家の中へと招き入れた。中に入ると、居間と思われる場所へ案内され、男は六席あるテーブルに四人を座らせ、一度部屋を出ると人数分の紅茶を持って再度現れ紅茶を配り自分も空いている席に座った。

「いや、待つとつたよ。ギルドには大分前に依頼したんじゃがなかなか受けてくれる者がおらんでな」

「だろうな」

ジェイルの返事にカイトが、テーブルの下で足を踏む。ジェイルが顔をしかめるが、男は特に気にしなかったようだ。

「まずは自己紹介をさせてもらいます。私はカイト、隣がジェイルとミーファ、ミーファの隣にるのがエマです」

カイトは男に一人ずつ紹介すると、ミーファは軽く頭を下げたがジェイルはむくれており、エマはそういう習慣がないのか紅茶を飲んでる。カイトは若干引きつるが男が気にした様子は無かったの
で胸を撫で下ろした。

「ふむ。よろしく頼むよ。わしはガリエル・トランドじゃ」

ガリエルと名乗った男は、愛想が良くとても人あたりの良い人物

に見えた。

「さっそくですが、依頼内容の詳細を伺えますか？」

カイトが本題に入る。

「そうじゃの。ギルドでも聞いてるかと思うが、遺跡調査を行いたくての。やってもらいたいのには道中と調査中の護衛じゃ。遺跡の場所はこの街から北に馬車で半日程のところにあるタリアアマル遺跡じゃ」

「どのような遺跡なんですか？」

カイトの問いにガリエルはうれしそう笑顔を作る。学者なのだろう、自分の成果を語る機会がうれしいようだ。ミーファとエマも興味があるのか注目しているが、ジェイルは興味無さそうだ。

「三百年程前までこの辺りを納めていたタリアアマル公園の遺跡で神殿跡と思われる。三年前にわしが見つけて遺跡の調査権を持つておる」

その後もしばらくガリエルは研究成果を語ったが、途中でミーファが我慢できなくなったの割って入る。

「宝物が見つかったら二割もらえるんですね!!」

ミーファはそれを確認したくて仕方が無かったようだが、話を途中で遮られたガリエルは少し不満そうだ。

「う、うむ。そうじゃの、きちつと二割として分けられるかはわからないが、何か見つかった場合は相応の礼を渡すつもりではおる」

「中にはいろいろあるんですね!!」

ミーファは目を輝かせている。宝物が欲しいというよりも宝探しがしたいようだ。

「前回の調査の時はかなりのものを見つけたの。古文書が主じゃったが、祭壇や宝物庫もあつての。宝物庫の中には当時の金貨や宝石類、他には祭壇用なのか金で出来た像などもあつたの」

「ほら、ジェイル!!」

ミーファは興奮しているようだ。しかし、その声掛けにジェイルは冷たい目を向ける。

「あほか。宝物庫が『あつた』ってことは、もう無えってことだ」
「え……!？」

ミーファが興奮した表情のまま固まると、ゆっくりとガリエルの方に向き直った。ガリエルと目が合うと、ガリエルはぼりぼりと頭を掻きながら申し訳なさそうに口を開く。

「う、うむ。いろいろあつたんじゃが、そのままにしておく盗掘の恐れがあるからの、ほとんどのものは持ち出して今は街の博物館に寄贈してそこに飾られておる。神殿の中はほとんど空じゃ」

ミーファはあからさまに肩を落とし溜め息をつく。

「す、すまんの。なんなら博物館の招待状を書こうか？ わしの招待状があればただで入れるが……」

ミーファが宝物が見れずに落ち込んだと思ったのか、ガリエルはそう提案したがミーファの代わりにカイトが首を振った。

「いえ、お気持ちだけで結構です。しかし、既に調査済みの遺跡を何故わざわざ再調査に？」

カイトは軽く頭を下げると、もとからやる気の無いジェイルと、完全に消沈してしまったミーファを尻目に話を進める。唯一エマは未だ興味を失っていないのか話に耳を傾けていた。

「それじゃが……」

そこまで言うと、ガリエルは立ち上がり後ろの本棚にあった所々が破けている古ぼけた紙を一枚取り出しテーブルに広げた。

「前回の調査の後、そこで発見した古文書をずっと研究しておったのじゃが、その過程でこれを発見したんじゃ」

ジェイル以外の全員がその古紙に視線を落とす。古紙には何かの図形のようなものが描かれており、所々に文字のようなものが書かれている。

「これは？」

カイトの問いにガリエルは答える。

「神殿の見取り図と思われるのじゃが……合わんのじゃよ」
「合わない？」

今度はミーファが問いかける。失われた興味が復活しつつあるようだ。

「うむ。大方はわしが見た神殿と一致しておるのじゃが、この一画……」

ガリエルは古紙に書かれている神殿の入り口と思われる側の反対側、一番奥の区画を指した。その場所は入り口から続く廊下の突き当たりを左に曲がったさらに突き当たりにある不自然の区画だった。「この場所は存在しなかつたんじゃ」

「つまり隠し部屋があると！」

ミーファの目に輝きが増す。

「それはわからん。そもそもこの古紙の用途がわかつておらん。建築時の設計図の可能性もあるし、完成後の案内図かもしれない。設計図だとすると、建築時になんらかの理由で作られなかつただけかもしれない。しかし、案内図であるならば完成当初は存在したが、その後なんらかの理由に閉じられた可能性もある」

「ガリエル殿の読みは？」

「後者の可能性が高いと思うておる」

「つまり、後から閉じられたと？」

「うむ。この見取り図には神殿を建築する上での物理的な情報が一般的に不足しておる。例えば、廊下の長さや壁の厚み、角度、広さなどの数値的な情報が書かれていないんじゃない。いくら今とは建築技術が違うとはいえ、そういったことを表さずに神殿が建築出来るとは考えにくい。じゃから設計図の可能性はかなり低いと思うんじゃ。内容から察するに、誰向けかはわからんが案内図のように見える。現に各部屋の用途だけは書かれておる」

カイトはもう一度古紙に視線を移すと、確かに各部屋と思われる場所に何か書いてあったが、現在使用されている文字ではなかったため、読むことは出来なかった。

「これ、何の文字？」

ミーファがふと呟く。

「ん？ 古代文字じゃないのか？」

カイトは書かれている文字が古代文字だと思っていたのか、ミーファが読めていないことに以外だったようだ。

「違うよ。似てるけど……なんだろう？」

「ふむ。微妙な時代じゃからの、これは古代文字から現代の文字への変換期に使用されていた文字での、使用された時代は短いからわしのような研究者でもなければわからんよ。しかし、大したことは書いとらん。宝物庫や倉庫といった用途が書かれておるだけじゃ。

しかし、先程の二画には何も書かれておらんのか。これも奇妙なことじゃ」

「へ〜」

ミーファはまじまじと見ている。元から旺盛な知的好奇心を刺激されたようだ。

「でも、そうだとすると何か見つかる可能性大だね！！」

ミーファは顔を上げると目を輝かせたが、そこにジェイルが突然割って入ってきた。

「もういいんじゃないか？ 話は大体わかっただろ。で、じいさん。要は俺達にそこまでの行き帰りと調査中の護衛をしるってことだろ？」

ジェイルは興味の無い話に飽きてしまったのか、金にならない仕事はさっさと終わらせたいのか、強制的に話の締めに入るとミーファは不満なのかむくれた。

「うむ。人里から離れておるのでな、瘴獣退治が行き届いておらんで。前回の調査の時にも瘴獣と遭遇したので。今回は用心のために護衛を雇うことにしたのじゃ」

「対象はじいさん一人でもいいのか？」

ジェイルはめんどくさそうだ。

「いや、助手を一人連れて行く。助手といっても娘なんじゃが……使いにしとつたんじゃが、もう帰ってきとる頃かの」

そう言うのと立ち上がり、入って来た扉を開けると首だけ外に出し

あたりを見まわした。

「娘？」

ジェイルの眉が跳ね上がる。扉の方ではガリエルは娘を見つけたのか、声を掛けていた。

「お〜い、ファステイナーや、遺跡調査の護衛の方達が来とるからお前もあいさつしなさい」

ガリエルがどこかに向かってそう言うと、「はい、ただいま」という澄んだ声の返事が遠目に聞こえてくる。少しすると扉から歳の頃なら二十代半ば程、明るく真っ直ぐな蒼色の髪は腰まで伸びており、白い肌の整った顔立ちに髪と同じ色の大きな瞳に掛けられた眼鏡が知的さを感じさせる女性が現れた。部屋に入り深くお辞儀をし、魅力的な笑顔を四人に向けてと口を開いた。

「ガリエルの娘で助手をしております、ファステイー……！？」

いつの間席を立ったのか、カイトですら気付かない内にジェイルはガリエルの娘ファステイーナに近付くと手を取っていた。ファステイーナは驚いてジェイルを凝視したまま固まっている。

「……いつの間に」

カイトは気付けなかったことに驚き、ミーファとエマは頭を抱えている。ジェイルは鼻先が触れ合う程顔を近付けた。

「お嬢さん。お嬢さんの身の安全はこのジェイルが必ず護って見せます」

ジェイルは普段見せない爽やかな笑顔と共にそう言うと、カイトの気のせいかわジェイルの歯がキラリ光ったように見えた。

「は、はいいい」

ファステイーナは完全に怯えている。

「ちよ、ちよ、ちよ……」

「ああ、か、彼流のあいさつですから大丈夫ですよ。は、はは……」
カイトの前ではガリエルが慌てているのをカイトが何とかごまかした。

「……カイト、いいの？」

隣りではミーファが呆れている。

「……まあ、やる気が出たようだし、とりあえずいいんじゃないか……」

カイトは席を立ちジエイルを引き離すと、遺跡へは明日の朝出発することと、道中必要なものはガリエル側で用意することを確認し、四人は家を出た。

「それでは、明日の朝に街の北出口でお待ちしております」

カイトは家の出口まで見送りに来たガリエルとファステイーナに一礼する。

「う、うむ。よろしく頼むの」

ガリエルの顔は未だ引きつったままだったが、カイトは気付かない振りをした。ファステイーナは先ほどの笑顔に戻っており、笑顔で見送ってくれた。

「とりあえず明日だな。なかなかおもしろそうな仕事じゃないか」

ガリエルの家から大分離れたところまで来たところで、カイトがそう言くと四人がそれに答えた。

「ああ……眼鏡美人か、悪くない」

「そうだね。あたし、絶対遺跡の謎を解いて、宝物を見つけてみせるよ！」

「うむ。人族の遺跡か、いったいどのようなものなのか……」

三人の答えにカイトは頭を抱える。

「………仕事、護衛だぞ」

こうして四人は、軟派、宝探し、遺跡見学、そして護衛というそれぞれ思いと、カイトの胸に若干の不安抱えつつ、翌日、タリマル遺跡へと向かうことになった。

第三話 【3】

ガリエルの家に行った翌日の朝、カイトは待ち合わせ場所に向くためにいつもよりかなり早めに起きた。ベッドから起き上がり軽く伸びをし隣りのベッドに目をやると、いつもは今頃はいびきをかいて寝ているジェイルの姿が無い。カイトは不思議に思ったが、とりあえず着替えると剣を腰に差した。すると、浴室からかすかにジェイルのものと思われる鼻歌らしきものが聞こえて来る。

「風呂か？ 朝風呂なんてめずらしいな。ジェイル！！ 先に外で待つてるぞ」

カイトは浴室にいると思われるジェイルに声を掛けると、中から「ああ」という返事が返って来たため部屋を出ると、そのまま拠点の安宿の外に出た。入り口のそばでは既にいつもの緑のバンダナを頭に巻いたエマが待っていた。

「おはよう。あれ、エマだけか？ ミーフアは？」

「うむ。魔法陣用の魔石と輝石が無いとかで、魔石屋に行ってしまった。すぐ戻るそうだし」

「そっか」

魔石屋とは瘴獣を倒した際に残される輝石を専門に扱う店で、輝石をギルドやワンダラーから買い取りそれをそのまま販売したり、火や光の魔法を込めた魔石として販売している店である。

「ジェイルは？」

「めずらしく風呂に入ってるみたいだったから先にきた。すぐ来るだろ」

カイトの答えにエマは無表情に首を傾げた。エマは昨日とは違い腰にはレイピアを差し、背中には組み立て式の弓の入った革袋と矢を背負っている。

二人はしばらく話をしてっていると宿からジェイルが姿を現し、カイトと同じ質問をしてきた。

「待たせたな。あれ、ミーファは？」

「魔石屋だそうだ。魔法陣用の魔石と輝石を仕入れてるんだとよ」
「へ〜。あいつ、今回は随分とやる気だな」

「……………お前もな。いつから仕事前に髭を剃るようになった？」
ジェイルを見ると顔の髭を剃り眉毛も整えられ、髪型も基本的に後ろに流している形は変わらないが整えられている。普段のジェイルは仕事があるうと無かろうと、無精髭を生やし、髪は適当に後ろに流しているため、別人のように爽やかに見えた。

エマも小声で「やれやれ」と呆れている。

「ふ、イケてるだろ。カイト、お前には譲らねえ」

ジェイルは人差し指と親指を伸ばした状態で顎に充ててポーズを決めた。

「……………何をだ。まったく」

カイトは呆れて頭を垂れると、今度はエマが何かを脇に抱えている事に気づく。

「エマ、それは？」

カイトはエマの抱えてる物を指差した。

「ん？ これか？ これはスケッチブックだが。珍しいものが見れそうなのでな」

「……………エマ。もう一度言うが仕事は護衛だからな」
「？」

カイトはもう一度うなだれた。エマはそれを不思議そうに眺めたが、エマとしてはふざけているわけではなく、そもそも『護衛』の意味がわかっているかが微妙だった。

「まあ、いいじゃねえか。護衛だったって別に狙われているわけじゃねえ。瘡獣がいたらって話だろ？ 気楽に行こうぜ！！」

ジェイルはカイトの背中を叩くと大声で笑った。そうこうしていると、ミーファが魔石屋からかけ足に戻って来るのが見えた。

「ジェイル、うるさいよ！！ 遠くまで笑い声が響いている」

「ミーファ、おかえり。こんな朝早くに店開いてたのか？」

「開いて無かったから、裏の家の方に回って何とかお願いして買って来たよ」

ミーファは腰の革袋を外しカイトに渡すと、カイトは中を革ひもをほどこいて中を見た。

「結構買ったな」

「うん。瘡獣退治じゃないし、何があるかわかんないからね。でも、結構かかっちゃった。仕事で使ったから割り勘にしてね！ はい、これ」

ミーファはカイトの鼻先に領収書突きだした。

「ぐっ。ま、まあ仕方ないか……後でな」

「よし、そろそろ行こうぜ！」

昨日とは違ってかわってやる気満々のジェイルが他の三人を急かす。いつもなら割り勘にツッコミそうだが、今日はそんなことは気にならないようだ。

「そうだな。そろそろ待ち合わせ場所に行こう」

四人はジェイルを戦闘に待ち合わせ場所である、街の北出口へと向かった。

北出口に到着すると、ガリエルとファスティーナはまだ来ていなかったため、四人はしばらく待つことになった。北出口は文字通りクレストの街の北側にあり、出口といっても特に何かがあるわけではなく、クレストの街を東西南北に走る大通りの南北の北端というだけである。ここより先には建物等は無く丘陵地帯に街道が続き、その先には山が見えた。

しばらくすると、街側の通りから二頭立ての大き目馬車がカイト達に向かって来るのが見えて来た。御者台には昨日と同じような服装をしたガリエルとファスティーナが乗っている。その馬車が四人の目の前まで来ると停止した。

「みなさん、おはようございます」

ファスティーナは馬車から下りると、四人に軽く頭を下げたあ

さつをしてきたため、四人はそれに応えた。ジェイルはさらに握手している。

「おお、すまんの。待たせてしもうたか」

ガリエルは馬車に乗ったまま軽く手を上げた。

「大きい馬車ですね」

カイトは馬車を見ると、ガリエルは軽く笑う。馬車の荷台は遠出用の荷物と思われる大き目の革袋と空の木箱以外は無い。

「うむ。何が見つかるかわからんからの。貴重な物だけでもそのまま持って帰れるように借りて来たんじゃ。これなら全員乗って行けるし」

ガリエルはそう言うのと全員に乗るように促した。ファステイナはガリエルの隣りに乗ると、カイトはガリエルの代わり手綱を操ろうと申し出ようとしたが、ジェイルに後ろから首を掴まれると無理やり後ろに引つ張られ、転びそうになる。

「ぐお！！ 何をする……」

ジェイルは何事も無かったかの如く、ガリエルと代わるとファステイナの横で手綱を取っていた。

「カイト、大丈夫？」

「いや、なんかもう、いや。後ろに乗ろう。ガリエル殿も後ろへ」

カイトは、半ば強制的に代わられて娘が心配なのか、おろおろしているガリエルを共に乗るように促した。

「いや、しかし……」

ガリエルは娘が心配そうだ。

「大丈夫です。駄目だと思ったら私が責任を持って引きずり降ろしますので」

「う、うむ」

ガリエルは尚も心配そうだったが、とりあえずカイト達と共に後ろに乗った。

全員が馬車に乗ると六人は一路タリアマル遺跡へと出発した。タリアマル遺跡までは馬車でも半日程掛かるため、到着するのは夕方

近くなると思われた。

「タリアマル遺跡って結構有名なの？」

しばらく世間話で談笑していたが、ミーファはかなり遺跡に興味を持ち始めているらしく唐突に遺跡の話に切り替えたが、ガリエルもむしろその話がしたかつたらしく笑顔で快く応えてくれた。

「有名じゃよ。この辺りでは一番大きな遺跡じゃからの。といっても観光地となっておるわけではないから研究者の間ではじゃが」

発見者が自分であることも手伝ってか、ガリエルは誇らしそうだ。「どういった遺跡なのですか？」

カイトも会話に加わる。

「昨日も説明したが、三百年程前までこの辺りを支配していたタリアマル公国時代のものでな、遺跡は公国を納めていた大公家専用の神殿のようで、竜が祭られておった」

「竜！？ マテルではないの？」

マテルとは大地母神マテルのことでの大陸で一般的に信仰されている大地の神であり、女神と言われている。

「いや、竜信仰だったようじゃ。じゃが、それ自体は驚く程のことじゃない。今でこそ下火じゃがこの時代は竜を信仰している者は割とおったからの。今でもかなり少なくなってはいるが、おらんことも無いしの」

「しかし、現物信仰とは今の時代ではかなりめずらしいですね」

「当時は戦乱の世で、竜は戦いの神とされておったからの」

カイトの言う現物信仰とは、実際に存在するもに対する信仰である。大地母神マテルも存在すると信じられているが、目撃した者はいない。

「しかし、信仰についてはわかりましたが、公国というのがよくわかりません。王国ではなく公国ということは……」

「そこじゃー!!」

カイトの言葉を遮るようにガリエルは突然声を張り上げる。

「そこがタリアマル公国最大の謎なのじゃ。タリアマル王国であれ

ば、何のことはない昔この辺りを治めていた王国というだけなのじやが、今まで見つかった文献によるとこの辺りを治めていたのは、カトレイティアといわれる大公家とある。その当主の一人が書き残した文献も残っておるのじやが、自らも王ではなく大公を名乗っておるのじや」

「ということは王は他にいたってこと」

ミーファも身を乗り出して聞いている。エマも人族の国家の仕組みについてはわかっていないようだったが、それ故か表情に変化は無いが真剣に聞いているようだ。

「普通に考えればそうじやの。王とは自ら名乗るものだが、大公とは自ら名乗るものではなく王から賜るものだ。ということとはカトレイティア家に大公位を授けた王が別にいたと考えられる。だが問題はここからじや」

ガリエルの言葉にも熱が籠る。

「カトレイティア家やタリアマル公国に関する文献はそれなり残っておってな、その研究も進んでおるのじやが、王に関する記載は未だ見つかっておらんのだ」

「見つかっていない？」

ミーファはガリエルの勢いの乗せられてか、興奮してきているようだ。

「そうなのじや。何故に歴史から消されておるのか？これがわしの主な研究テーマであり、死ぬまでには解き明かしてみせるつもりじや！」

ガリエルは拳を握りしめると空を仰いだ。

「タリアマル公国……」

「どうした、エマ？」

不意に呟いたエマにカイトが振り向くと、エマはめずらしく眉間に皺を寄せ何かを考えている。

「ああ、いや、何か聞いたことがあるような気がするのだが。なんだったか……」

「聞いたことがある？ エマが？」

カイトは驚いた。エルフ族が人族と交流を持つことは少なく、この大陸ではダルリア王国くらいである。それでもそれほど強いつながりではない。エマ自身も人族の場に出てきてから日も浅く、それ程人族に精通しているようには見えないが、タリアマル公国に聞き覚えがあることが不思議だったようだ。

「いや、気にしないでくれ。気のせいかもしれない」

エマはいつもの表情に戻ると、回りの景色に視線を移した。カイトは首を傾げたが、特に気にするといったこともなくミーファに視線を移すと、ミーファはガリエルの手を握り何故かタリアマル公国の謎を共に解き明かすことを誓っている。

ジェイルはというと、業者台でファステイナーから同じような話に耳を傾け、真剣な表情で聞いていたが、大半は聞き流していると思われた。

その後もガリエルのこれまでの研究成果などを聞きながら、六人はタリアマル遺跡へと馬車を走らせて行った。

第三話 【4】

クレストの街を出て、昼を回り太陽が傾き始めてから少しした頃、馬車は森の間を通る道を走っていた。街を出た頃は遠くに見えた山が今は間近に見える。

「そろそろ道を逸れるぞ」

ガリエルはそう言うのとジェイルに方向を指差し、ジェイルもそれに従い馬車の向きを変えると道を外れ森の中を進み始めた。

「ここからどれくらい掛かるのですか？」

「そうじゃの、二刻程だったと思うが」

「結構遠いね」

ミーファ座ったままの体勢で腕を伸ばして伸びをする。

「そうじゃの。これでも遺跡から一番近いのがクレストの街じゃからのお。人通りもほとんど無い上にこれだけ人里から離れておるとこの辺りで発生した瘴獣は退治されることもなく野放しなんじゃよ」

「確かにこれだけ人が無いと依頼する人もいないでしょうしね」

カイトは周りを見回した。

「さっきの道ってあのまま進むとどこに通じてるの？」

「あの道はロビエス共和国まで通じ取るよ。わしが子供の頃はロビエス共和国の商隊がそこそこ往来しておったんじゃが、山越えの上途中に街も無く厳しい道のりじゃからの、都市同盟が成立してからは皆コーファンの街に迂回するようになってな、とんと使われなくなってしまうたわい」

「へ」

ミーファは通ってきた道に視線を向けたが、既に木々の陰に隠れ見えなくなっていた。

しばらくすると、馬車の前方に切り立った崖が見えてきたところでジェイルが馬車を止めた。

「おい、じいさん。行き止まりだぞ！」

「あ、よいのです。崖まで進んでください」

ガリエルのかわりに隣にいたファステイナーが答えると、ジエイルは言われたとおり崖まで再度馬車を進めた。

「ここでもいいのか？」

「はい。みなさん到着しました」

ファステイナーは後ろを振り返りながらそう言うと、ガリエルは全員を馬車から降ろした。

「ここ？」

「遺跡なんてどこにあんだ？」

ミーファとジエイルは周りを見回したが崖の他には森しかなかった。

「こつちじゃよ」

ガリエルが移動したため全員がその後を付いていくと、崖に開いた洞窟の所で足を止める。その洞窟の入り口には鉄格子の扉が取り付けられており、頑丈そうな施錠までしてあった。

「洞窟の中なの？」

「いや、中といえば中じゃが、どちらかというの外かの」

「??？」

「まあ、中に入ってみればわかる。すぐそこだ」

ガリエルは施錠を外すと洞窟に入る。それにカイト達が続くと、十数歩程度先には出口が開いており薄明かりが見えた。中を進み洞窟を出ると周囲を崖に囲まれたかなり広い空間になっていた。

「すごい！！」

ミーファが感嘆の声を上げる。崖に囲われたその空間の中央には最奥の崖から直接突き出たように神殿が建っていた。上空を見上げると空まで吹きぬけており、崖の上の木々の枝がかなりせり出している。神殿自体は一階建ての石造りで、周りを巨大な柱が囲みその少し内側に入ったところが壁となっている。柱と壁には細かな彫刻が施され、所々欠けているもののそれがより一層歴史的な重みを感じ

じさせた。

「すごいな」

カイトもその壮麗さに見入っていた。

「なかなかのもんじゃろ」

ガリエルも二人の反応に満足そうに頷いた。

「よくこんなもん見つけたな」

ジェイルの言うとおり遺跡こそ巨大だが、この場所は外からはまったく見えず崖の高さも相当あり、木がせり出しているため、周りの山に登ったとしても神殿どころかこの穴自体も見えそうになかった。

「本当に偶然でした。この近くにも遺跡があるのですが、三年ほど前にその遺跡を父と私で調査していました。その時に雨が降ってきた、父と二人で雨宿り出来る場所を探していると先程の洞窟を見つけたのです。今でこそ広く開いています、当時は崖が崩れたらしく本当に小さな隙間でした。そこで雨宿りをした際に発見しました」

「まさに幸運じゃったの」

ファステイーナが答えると、ガリエルが笑った。

「すぐに調査すんのか？」

ジェイルは空を仰ぐと既に日が傾いている上に四方を崖に囲まれていることもあり、かなり暗くなっていた。

「ふむ。ここは暗くなるのが早いからの。調査は明日からにしよう」

「ええっ！？ 入らないの？」

ミーファは中を見たくて仕方が無いらしく、心底心外そうだ。

「今入ってもどのみち大して見れないさ。今日はこのまま野宿して、明日朝からにしよう」

「ちえ」……」

ミーファはかなり残念そうだったが、六人は先ほどの入り口となつている洞窟を再度くぐると馬車へと戻り、そのまま野宿の準備に取りかかった。

「敷物と毛布は人数分持つてきとるから使つとくれ。食事はパンと干し肉と乾燥野菜がある。適当なスープでもつくろうかの。誰か近くに川があるから水を汲んで来てくれんかの」

「私が行つて来ましよう」

カイトが馬車からバケツを取るとガリエルから聞いた川へと向かった。ファステイナーとエマはパンを切ったり乾燥野菜をほぐしたりしている。ジェイルも慣れた手つきで大きめの石を使って簡単な釜戸を作っていた。

ミーファはしばらく周りを見ながらうろつろつしていたが、座つて石組みをしていたジェイルの元に来て小声で耳打ちする。

「ねねっ、ジェイル。あたし、何すればいいの？」

「はあ？ 必要なことをしろよ」

「必要なことつて……、わかんないよ。外で野宿なんてしたことないもん。前に公園で野宿した時はご飯無かつたし……」

「嫌なこと思い出さすな……。しょうがねーな、じゃあ薪でも拾つてこい」

「薪ね。わかつた!!」

ミーファはやることを教えてもらつと、森へと入つて行った。

「水汲んで来たぞ」

ジェイルの石組みがちょうど終わった頃にカイトがバケツに水を汲んで帰つて来た。その水を鍋に移すとジェイルの作った釜戸に乗せる。

「ぴつたりだ。見かけに寄らず器用なんだな」

「つたりめえだ。今までの生活の四分の一は野宿だからな」

ジェイルが誇らしげに胸を張ると、ちょうどミーファも薪を抱えて戻つて来る。

「ジェイル。これでいい？」

「ん？ おお、随分取つて来たな。十分じゃねえか」

ミーファは両手いっぱい抱えた薪を釜戸の近くに落とすとその

まま座り込んだ。

「ふう。疲れたし、お腹減った」

「休んでねえで火を付ける」

ジェイルはミーファが持ってきた薪を釜戸に入れながらミーファを呼ぶ。

「もう、人使いが荒いな！」

ミーファは立ち上がると、釜戸の前に行き人差し指を釜戸に向けた。

「火よ」

ミーファの指先から小さな火球が発生すると、釜戸に落ちそのまま薪に火が着き徐々に炎となった。それと同時に食材の準備をしていたファステイナーとエマがそれぞれパンと干し肉、ほぐした乾燥野菜をもって来ると、干し肉と乾燥野菜を鍋に入れエマが適度に塩で味付けをする。

「新鮮なものではないが量は持ってきた。腹の足しにはなるじゃろ」
「十分だ」

馬車に荷台で明日の準備をしていたガリエルが鍋を覗きながら頷くと釜戸の近くに座り、ジェイルも続く他他の全員も釜戸を囲むように座った。空は既に日が沈み星が瞬き始め、夕食には良い時間となっていた。

「人もこういう料理をするのだな。味の濃いものばかりだと思っていたが。これは我らの冬の料理に似ている」

「ん？ そうか？ 確かに飯屋でこういうのが出てくることはねえからな。野宿じゃわりと定番な料理だぞ。まあ、俺たちはほとんど飯屋だから知らねえかもしれねえが」

「そうなのか。人の里に着てからは変に加工されたものばかりだったからあまり口に馴染まなかったが、これは懐かしい匂いだ」

「……ジェイル、エマ」

その会話をカイトが制止する。周りを見るとガリエルとファステ

イーナがエマを見ており、その状況に気づいたジェイルは頭を掻いた。確かに今の会話は事情を知らない者が聞くと何かおかしい。

「……わりい」

「私は別に構わないが。人が騒ぐだけで私は別に隠すことでは無いと思っっているのだがな」

「まあそうだな。お二人とも悪い人では無いし、いいか。どの道エマもそのままじゃ寝にくいしな」

「？」

「？」

ガリエルとファステイーナは会話の内容がまったく理解出来ていない。

「バンダナ取っちゃえば」

「ふむ」

ミーファが軽く言うのとエマも特に躊躇することもなく、頭に巻かれた緑のバンダナを外した。エマは軽く頭を振ると、美しい金髪の合間からエルフ特有の長い耳が露出する。

「まあ！？」

「なんと！！ お主、エルフ族じゃったのか！」

ガリエルとファステイーナからは釜戸を挟んで反対側にいたため、湯気と熱で揺らめく大気によりエマの姿はより幻想的に見えただろう。二人はその姿に驚愕し、ガリエルは腰を抜かしたように両手を突いて後ろに倒れ、ファステイーナもくべていた薪を落としてしまった。

二人の反応は無理も無い。エルフ族は人里離れた深い森の中に隠れ住んでおり、その場所を知る者はいない。その上人族との交流は無いに等しく、さらに都市同盟の領内にはエルフの隠れ里すら無いと言われている。

「三十年程前に一度だけ見かけた事があったが、まさかエルフ族に護衛してもらうことになるうとは……」

「私はお会いするのも始めてです」

ガリエルとファステイーナは驚きを隠せず凝視していると、エマは不快に思ったのか顔をしかめた。

「あまり気にしないでもらえますか。我々の仲間が一人エルフなだけですよ」

カイトの言葉にジェイルとミーファも頷く。

「あ、ごめんさい」

ファステイーナは申し訳ないと思ったのか視線を釜戸の火に戻したが、ガリエルはその後もしばらく見ていたが得に悪気があるわけでは無かった。

「しかし、何故ワンダラーなどしておるのじゃ？」

ガリエルはまだ見ていたがエマは質問には答えず、鍋から少量のスープを器に移すと味見をし、塩と水で調整を始めた。そのため、代わってカイトが答える。

「まあ、成り行きで。それよりも明日の調査方法をお伺いしたいのですが」

カイトは曖昧に答えると話題を変えた。そもそもカイト達もエマが人族の里にいる理由はよく知らず、エマも特に語ったことはなかった。また、エマも特にワンダラーの仕事をしているという意識はなく、行動を共にするカイト達がワンダラーだっただけであり、カイトの言った『成り行き』もそう的外れは回答ではない。

「ん、そうじゃの。明日は早朝から調査を開始したい。あの場所は昼前であればわりと日が当たるのでな」

「中はどんな感じなの？」

ミーファも加わってくる。ジェイルはエマからスープをもらうと「味が薄過ぎる」と注文を付けていたが、塩の追加はエマに拒否された。

「うゝむ。申し訳ないんじやが、昨日も言った通り何も無いんじや。据え付けだったものはそのままじやが、持ち出せるものは持ち出してしまったからの。明日、奥を調べてみて何も無かったら、それで終わりじや」

「ええ！ それじゃつまんない」

「絶対にその先がありますよ」

ミーファが肩を落としていると、ジェイルとエマのやり取りを小さく微笑みながら見ていたファステイーナがミーファを元気付けるように言った。

「うむ、わしもそう思っておるかの」

ガリエルも笑いながら同意すると、ミーファはほっとしたようだ。

第三話 【5】

「そろそろ、良さそうだな」

「お、出来た？ もうお腹ペコペコ！」

鍋の様子を見ていたエマが野菜と干し肉のスープを人数分取り分けると、ファステイナーはそれに合わせて切ったパンを配っていた。

「いただきます！！」

ミーフアは配られたスープにパンを浸すとそのまま口に運ぶ。

「あ、おいしい。思ってたのより全然おいしいよ」

「悪くねえが、味薄くねえか？」

「ジェイルが日ごろ食べているものの味が濃すぎるのだ。これくらいが素材の味も生きて健康にも良い」

エマもスープに口を付けると、自分の味付けに満足そうに頷いた。「確かに。ジェイルが好むのは素材の味よりも香辛料の味が強いものが多いからな」

「わかってねえな。そういうのが酒のつまみにはちょうどいいんだよ！」

ジェイルはどこに持っていたのか酒瓶を出してあおるとパンをかじった。

「ふむ。わしもこれくらいの濃さがちょうどええの」

「そうですね。干し肉の出汁もよく出ていておいしいです」

ガリエルとファステイナーもエマの味付けに満足したようだ。ジェイルは自分の器にだけ塩を足そうとするが、エマに睨まれ塩を片付けられてしまい、渋々そのまま食べ始めた。

六人はガリエルの今までの研究成果を聞いたり、談笑したりしながら食事を続けると、あっという間に時間が過ぎて行った。

「さて、明日も早いですしガリエル殿とファステイナー殿は先に寝

てくださって結構ですよ。我々は交代で見張りをしますのよ」

食事が大体済んだ頃を見計らってカイトが口を開いた。寝ている間に瘡獣に襲われねえとも限らないため、野宿の際の見張りは欠かせない。

「そうじゃの、ではお願いしてわしらは休ませてもらうかの」

「よろしいのですか？ 私も一緒に見張りをさせて頂いても大丈夫ですが」

「とんでもありません。これが我々の仕事ですからお気になさらず休んでください」

申し訳なさそうに申し出たファステイナーにカイトは優しく断りを入れる。

「そうですか。では申し訳ありませんが、よろしくお願いします」
ファステイナーは立ち上がり頭を下げると、ガリエルと共に馬車の近くで床についた。

「見張りって一人でやるの？」

「いや、一晩だし二人一組でいいだろ。俺とジェイルが別れよう。

そうだな、俺とエマ、ジェイルとミーファで組もう」

「りようかい」

「カイト達は先に寝ていいぞ。俺はもう少し飲むからよ」

「そうか。じゃあ、そうさせてもらうかな。あまり飲みすぎるなよ」

「心配ねえよ」

カイトはジェイルの返事を確認すると、エマも立ち上がりそれぞれ床についた。

先に寝た者達が眠りに付いた頃、ジェイルは近くの木に立てかけていた大剣を抜くと火にかざし、刀身を調べ始めた。

「何してんの？」

「ん？ ああ、大きい刃こぼれや亀裂がねえかと思ってな」

ジェイルはそう言うのと刀身をじっくりと見つめ、細かな刃こぼれを丁寧に調べていく。

「まめだね」

普段のジェイルからは想像できない姿にミーファは少し驚いたよ
うだ。

「当たり前だ。てめえの命預けんのに手を抜けるか」

「へへ。でも、都市同盟って本当にワンダラー多いよね」

ミーファは焚火に火をくべながら呟く。

「そうか？ まあ、軍も無えし憲兵も最低限の仕事しかしないから俺達の仕事は割と豊富にあるしな。ロビエスじゃそうでも無かったのか？」

「うん。いるっていうのは聞いたことあるけど、あたしが住んでた街にはいなかったよ。ギルドも無かったしね……………！？ って、なんであたしがロビエス出身って知ってるの？」

ミーファは手を止めると驚いてジェイルを見る。

「ん？ 言葉の訛りがロビエス方面じゃねえか」

「んぐ。まあ、別にいいけど」

この大陸では言葉はどこも同じだが地方毎に微妙な言葉の訛りがあり、ジェイルはそれに気付いていたようだ。

「じゃあ、ジェイルも教えてよ。どこ出身なの？」

「出身？ 出身か…………。ほとんど定住したことがねえから難しいが、そうだな、生まれっていう意味では帝国だな」

「！？ 帝国？ 帝国ってベルドラス帝国？」

ミーファはまたも驚き薪を落とす。

「この辺りに他に帝国なんて無えだろ？」

「まあそうだけど。最悪」

ロビエス共和国とベルドラス帝国はとても友好的と言える関係では無い。

「何だ、ミーファ、お前政治に興味があるのか？」

「全然。でもロビエスじゃ帝国はすこぶる評判が悪いよ」

「らしいな。だが、俺もガキの頃にいただけでほとんど住んだことなんて無いけどな」

「だよ。なんかあんまり帝国って感じしないし。でも生まれた場所があるなら、家あるんじゃない。前は無いって言ったのに。両親はまだ帝国にいるの?」

「両親? 親父はどっかの戦争で死んだらしい。お袋はそれが元で自殺したって話だ。どっちも俺が生まれたばかりの頃で物心がつく前の話だからよく知らねえが。物心がついた頃にはもう孤児院だったから顔も憶えちゃいねえよ」

ジェイルは笑いながらそう言うと、刀身を軽く叩き音の響きを確認する。

「……………ごめん」

ミーファはジェイルの触れてはいけないことに触れたと思ったのか、少し目を潤ませながらジェイルに謝った。

「ん? がっはっはっは。なんて顔してんだよ、らしくねえぞ」

ジェイルはミーファの背中を叩くと、近くで寝ていたエマが寝苦しそうに寝返りをうつ。

「痛いよ! みんな起きちゃうでしょ! でも、そうなんだ。じゃあ、帝国に居たのにどうして都市同盟でワンダラーやってるの?」

「なんでって、そうだな。結局十四くらいまで孤児院にいたんだがそこが嫌で脱走して、軍に志願したんだけどよ……………」

「ええ!! ジェイルって軍人だったの?」

「軍人つつても少年兵だからな。ほとんど雑用係さ。半年くらい兵糧運びだの倉庫番だのやってたんだが、そんな時の上官ってのがいけすかねえやろうですよ。少年兵にやたらと威張り散らすもんだから頭にきて殴っちまった。んで、それが軍法違反だとかで結局軍を追われて、流れに流れて都市同盟でワンダラーの仕事をみつけて、ガキだったから大人のパーティに入れてもらったりして、まあその後いろいろあったがとりあえず今に至るって感じか」

「は……………はは。なかなか波乱万丈だね。ジェイルらしいけど……………」

「そうか? でもまあ勝手気ままな今の生活が気に入ってるからな。いいんじゃないか?」

「確かに……なんか似合ってるよ」

ジェイルは笑って話したが、ミーファからのそれも含めて何かジエイルらしさを感じたようだ。ミーファは落とした薪を拾うと、また火にくべた。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………ねえ？聞かないの？」

しばらく沈黙が眩いた後、ミーファが静かに呟く。

「あん？何を？」

「え？あたしがワンダラーやってる理由とか、過去とか？」

「人の過去に興味なんかねえよ。大体おめえ十六だろ？過去ったつてちよつと前まで鼻水垂らしてました以外にあんのかよ？」

「むううう……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「わあかったよ！ へいへい、それでミーファさんはなんでワンダラーをやってるんですかい？」

火をいじりながらも何かを聞いて欲しそうに伺う視線と沈黙に耐えかねたジェイルが投げやりに聞いた。

「しょうがないな。あんまり言いたくないんだけど、そこまで言うなら話すけどさ。」

「……………」 お前

ジェイルは腑に落ちなかったが、とりあえず流した。

「実はあたしロビエスの一応まあ、自分で言うのもなんだけどちょっとした貴族の娘なんだ。こう見えても四兄妹の末っ子なの。」

「……………」

どのあたりが「こう見えても」なのかはわからなかったが、ジェイルは納得したようだ。

「むっ……………」 ま、まあいいけど。でね、なんか立場的に微妙でさ。

兄様もいるし家のことには直接関係しなかったから結構放任されてたんだ」

「……………」

ジェイルはあまり興味が無いのか剣の手入れをしながら適当に相槌を打つ。

「まあ、それは良かったんだけどね。普通の魔法学校にも通えだし、社交界にも興味無かったし、それよりも学校の友達というほうが楽しかったしね」

「社交界……………」？ 社交界つてえと、権謀術数と裏工作と愛想笑いが

渦巻く例のあれか？」

「そう、それ」

かなり偏見のある意見ではあるが、社交界は華やかな裏側にはいろいろあることが多い。ミーファも子供ながらに感じていたのか特に否定はしなかった。

「まあ、姉様もいたしあたしが呼ばれることなんてほとんど無かつたけどね。でも、数ヶ月前の社交界にたまたま参加させられて、その時に他の貴族の息子に見初められちゃって」

「なんだ？ 自慢か？」

「違うよ！ しかも、そいつ以外にも長子の跡取りでさ」

「結構な事じゃねえか」

「どこが！！ でも、親もいい縁談だとか言つて乗り気で、とりあえず親の手前仕方なく社交界の後にもう一度会うことになったんだけどさ、そいつの話すことって、うちの家柄はどうだとか、伝統はどうだとか、街の交易の大半を仕切つてるとか、家のことばかり。家のことはいいから自分のことを話して、つて言つたらなんて言つたと思う？」

「さあな。なんだ？」

「『その全てを僕が受け継ぐ！！』だつてさ」

「だあつはつはつは。典型的な貴族のぼんぼんだな」

ジェイルが大声で笑うと、今度はカイトが寝苦しそうに寝返りを打つ。ミーファがそれを気にしながら声を下げるように手を上下に振った。

「でも、ほんとだよ。過去の栄光どころか、ご先祖の栄光だからね。それで父様に断りたいって言ったんだけど、『お前の意思など関係ない』って。その後はあたしに関係なく話がどんどん進んでつちやつてさ。しばらくして正式に婚約するつて言われて、それで……」

「家出したのか？」

「うん……。たまたま兄様が都市同盟の方に出かける用事があつて、無理やり着いてきてその隙に……」

「なんでえ、もったいぶつてた割りにはベツタベタだな」

「う、うるさいよ！！ 女の子にとっては重大なことなの！！」

「まあ、気持ちにはわからんでもないがな。親の都合で人生決められちゃかなわんわな」

「……………ありがとう」

「さて、そろそろ交代して寝るぞ。エマを起こせ」

ジェイルは剣を鞘に収めると立ち上がり、自分はカイトを起こしに行った。

「え、あ、うん」

ミーファも立ち上がるとエマを起こすために、エマの体を軽く叩いた。

「エマ〜、交代だよ〜」

「う……………うん……………」

エマはミーファの声に薄っすらと目を開ける。

「もう交代の時間か」

エマは起き上がると軽く伸びをした。

「よろしくね」

「うむ」

ミーファはエマが起きたのを確認すると、自分の毛布に潜り込んだ。ジェイルに起こされたカイトもあくびをしながら焚き火の近くに来ていた。ジェイルは既に毛布の中でいびきをかいている。

その後、何度か交代を繰り返した後に朝を迎えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8242t/>

ワンダラー放浪記

2011年12月11日19時48分発行